

328

374



始





21235

328-374



珍書刊行會叢書

第八冊

大正  
5. 4. 14  
購求

印刷部



珍書刊行會叢書第八冊として『傾城色三味線』を輯めた。これは曩に博文館で武田仰天氏本を底本として複製した事があるから、比較的よく知れて居るものであるが、本會藏本とは稍ちがふところもあるので再び刊行することにした。

本書は昔から『八文字屋の五三味線』と稱されたものゝ一つで、然も其最も早く出されたものである、そして所謂『三味線もの』流行の魁をなしたものである。世間でもてはやした割合には原本の遺残が尠く、『五三味線』が全部揃つたのなどは殆んど見られないのである。

本書は京、江戸、大阪、鄙、湊の五卷から成り、各卷の首に其遊里の名寄を附けてある。旅に出たことのない著者の其蹟がどうしてこれを手に入れたか、又其當時こんな細見が行はれてゐたか等の面白い研究も出来るが今はこれを省略した。なほ卷中に屢々記されたる洞房の秘事は殆ど全部を抹殺して聊かも法規に觸るゝことなき用意を採つた、これは聊か原著を損ふの憾みがないが止む事を得ないのである。

大正五年三月

珍書刊行會

### けいせい色三味線

#### 序

世に聞馴たる鶯の花に啼も。さのみ身をうつほごにも面白からず。只いつ聞ても魂にこたへて感じまいらすは。嶋原の投節吉原のつきぶし。新町のまかきぶしなり。艶顔をすこしそむけて紅舌のうごく有さま。月雪花紅葉にかへられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは此分里の契縁。何か此外に又樂みのあるべきや。江戸の散茶に戀の寄太鼓。京の引舟難波の鹿歌にあはせて鳴す色糸。ひ



序  
く手になびく勤女の品くかわりし諸分をのせて色三  
味線と是を名づけぬ。  
二

## けいせい色三味線

### 目録 京之巻

#### 第一 花の下紐ながと短と

結びの神の守りめに奥州が身請の悦び廓すまいもけふ計は名残おしきは朱  
雀の細道に廣き心の大臣

#### 第二 花を繕ふ柏木の衣紋

引手あまたにはやり獨樂うつたりまふたり太鼓女郎引舟に乗て沖こいださ  
はぎ戀の種まさちらす金心中

#### 第三 花崎實のる玉の輿

はりあいにかゝるわな尾を見せて夜ふけ大臣太鼓も鳴をやめて刀物をさや  
におさめた分別心底にくもりのない月を手池



第四 花は散ご名は九重に残る女

身請の沙汰菊川にはまる大臣

第五 花にも負ぬ三五の月

うつり替る浮世遊び見すかして粹中間の先ぐりしやれた月の見所一しほな  
がめも色ぶかい八鹽の紅葉

第一 花の下紐ながご短ご

身ばかり物魂は彼里に至り大臣

あはれも是よりぞ知る。戀の只中少しの内も浮世の隙さへあらば、此美君をながめまいらせ、揚屋酒に氣をのばす事、仙家の不老不死の妙薬よりは増りて、命の洗濯水あそびの上り、何か此外に世界の娛み又有べきや、人世七十古來稀なる世に、始末の二字にくゝられまうけ溜てつかはぬ、人の心が知たし、今でも冥途から使が来れば、ゆかねばならぬ身を持つながら、ある金を我樂しみにはつかいもせで、來年の何月迄と切りきつて、念借す人程大膽なるものはなし、今宵も知れぬは命なりと、一生やくたいもなふ身を浮雲の天水といふ男、晝酒の酔醒しに東邊へ出かけぬるに、むかふから來る男を見れば、當流の跡あがりの天窓はやる時厚髪にして、然も鬢を巻立て、神主かと思へば赤地の裏を羽織につけたり又大臣かと思ればつくく太鼓もなし、芝居役者には色黒し、いかさま一ト癖ある奴どちかよつて見れば、是はくゝいにしへ目をかけとらせし、おとしの咄をよう夕がほの、五條あたりに住し、表辻伊勢之助といひて、浦辻まさりとせんしやういひし、安筆屋の浮氣もの





也、扱今程はいづくに居るぞとへば、筆の命毛あれば又お目にかゝるとまだいひかけの口あいはやまず、京も住うく、多くの借銭も寝て伏見の里に、今は謠の師をして三人にゆるりと見事なぐらし、されど此身に成つても、まだやまぬは御ぞんじの悪性、是も大かたならぬ因果、鐘木町の龜屋の井筒にふかき中、ちと賢覽にそなへたし、自然大阪へ御下りあらば、かならず御立寄待入也、扱今日の出京は余慶のない謠を教へつくして、外百番を毎日上京迄一番づゝならひに參つて、又それを其日にをしゆるいそがしさ、さのみ是は苦勞にも存せぬが、折ふし御屋敷方の御留守居より、囃子のある時分召出さるゝにはこまりはつるなり、柏子はいもくの拙者め、鳴物がじやまになつて、さりとは謠にくしといひさして、互に大笑ひしばらくなりしが、何やら上からこわ高に鉦太鼓をうちならし、おかしげなる人形をつくり、焼印の編笠をきせて、大勢色紙のさいをもつて傾城買を送るは、おくるはくゝと、こゑくゝにわめて来る、是はしたりむかしより風の神を送るといふ事はあれど、けいせい買をおくるといふこと、いまだ年代記にも見あたらず、さりとはかはつた思ひ付、いかさまいわれあるべしと、跡にさがりしさいもつおやちに尋れば、我らがあたりは近年老若共に、家業にうとく、島原狂ひにかしくなつて、おほくの金銀を蒔ちらす事砂のごとし、それも我物あつてつかへばまだしも也、三月延の借り米、なしくづし

の借銭、買置して賣損の銀まはし、又は家質あるひは連判銀にて紋日を勤て、面々杉焼も鯛青鯨ならでは喰れずと、宿では大唐米に、五斗味噌をへてくふなりして、伽羅も鹽釜はしたるき所あつてわろしと、黒木焼身代にて、無用の盛をやつて我家のとりぶきやねのざざぬけを葺かへるちからもなくて、あげやのざしきが、ひろふてのせばふてのとのせんさく、皆氣ちがいの沙汰也、北ごなりにはむすこをかんだうするとひしめく、南隣には主人へ大分の損をかけて、けふ請人へ手代をあづける相談、すぢむかひには世倅せがれがけいせい狂ひゆへ、三代つゞきし家を人の手にわたすと、母おや涙をながしじみの町を立のかるゝ其となりはよい年をして、白髪ぬくを仕事にしてあほふをつくし、子供には古布子さへしてきせず、太夫が所へ小袖してやるもくろみやくだいなしと申さふか、あいだれといはふかと、女房しんいをもやして、ちやわん茶釜すりこばち迄打つての女夫いさかい、すべて町中四十二軒の内、賣家三十七軒、残り五軒も家質に入てあれば、是とても我物ならず、近所はいひ合しやうに、將基だをれと云ものにかたひにたおるゝ事、皆是けいせい狂ひより事おこれるなれば、片時もはやく此けいせい買の心玉を人形にうつし町送りにして、丹波越さすべしと、才覺なお宿老殿の仰せにしたがい、おくるはくゝと、よい年してわめてゆくを、伊勢之助取つき、近比それは素人なる了簡、今時の悪性者仕過してもいかな



丹波越などする事にあらず、京の者は江戸へくと下り、江戸のものは上がたへのぼつて當所なしに相應に請人屋あつて、悪性も請こむ家あれば、立身して重ねて又おのの町へ、つかいくづしに立かへるまじきものでなし、爰が大事のしあん所、同じくは雨ふりつづく水の出はなに、川へさらりとながしたし、是水は川へはまるの道理也と、口拍子にのつていへば、おやちよこ手を打て、ちゑかなく、成程そなたのあけんにまかせ、五條の橋より下へながすべし、いづれも若い衆、是から五條の橋へひけて送るべしとげぢすれば、伊勢之助又おやちをまねいて、何と其人がたにおのの家々より十二燈を一ツづゝそへて、我らへ渡されまじきや、さもあらば御町へ道切の呪して參らせんといふ、もどより愚につくつたるおやち悉しと、町中の若い物共をかたはしより、あたまわりに十二文づゝ出させ、子々孫々迄いせい買は申におよばず、茶屋狂ひ小宿狂ひもせぬやうに、御きねん頼むと、伊勢之助に人がた共に渡して歸りぬ、天水我をおつて伊勢之介にむかひ、汝それを引うけて何にかするといへば、されば是にはふかき存入あつての事、私などに此人がたが取つて、おかけてつかひくづす程の身になれば満足なり、悪女房持て田舎商すと、獨法師の歩行とは、留守にまおとこと、ぬす人の氣づかいのなきやうなものにて、我らにけいせい買の生靈取つた分では、何もつかはふ種がないゆへ、此人形を煎じてす

ふても氣づかいなし、扱是をもらひしは、いせん私五條にて借屋して居りしすぢかひに鎌倉屋の源と申て、江戸大阪に店あつて、手びろく商せし分限者ありしが、其身若ふしてしかも二親なく、自由なる身を持たながら、色事に一錢もつかはず、生れついてしわい奴にて、じゆつながら銀共を箱へをし入く、内藏につめるをたのしみにして、一代絹の下帯かかず、口に魚鳥の味をしらす、色ぐるひするものをたわけとぬかして、拙者が身持など見ては、おのれが苦にもならぬ事じやに、むかひの筆屋とつきあふな、あいつ今の間に身代つぶす仕果也と、物にくさふに手代共へいけんのひき事、開度にむねんかさなれ共、そいつがいふにちがひもなく、二番めの手代も我らが引導にて、ききやう屋の雲井にのぼりつめさせ、一年たぬ内に、親方の手まへぶしゆびにさせぬれば、いふも道理とは思ひながら、ひつきやうさそふものにとがはなし、其身器用はだにて深入して、おのれとこそこなふなれば、外にうらみはないはづなるに、二日寄合の次而に會所にて此噂はつと尾ひれをつけて申せしゆへ、律義な家主にて、色ぐるいするものは切死丹の頭取程にはがり、しわい心から半年餘の宿代の滞かんにんして、宿をかへさせし恨、ひとへに此鎌倉やの源が頼ぬ口をきしゆへなれば、此人形をきやつが門にすて置、ものゝ見事なけいせい買になして、身袋もみつぶして、見てなぐさまんために、人がたをもらいし也、まはりごをき



事ながら、是かや厄病の神にて、敵取しあんと始終をかたり、只今はからずぐに參ると、いとまごいして立別、それよりむかし住なれし五條あたりの、かの鎌倉やの見世へなげこみ跡をも見ずに伏見の里へにげて歸りぬ、抑此かまくらやの源と申は、親より家藏諸道具の外に、八百貫目の譲りを請てより此かた、假にも遊樂の道に心をよせず、世わたりにかしこく、朝暮小判を溜るしあんをのみめぐらし、何によらず江戸大阪にきくべき物を、見立聞たて買廻しよく店にくだし、其身三十一才になる時、貳千貫目金に元手をふやし、溜ては箱にをし入、釘付にして藏につめ置、つひにあげやの手にも渡さず、まして、野郎宿の花にもならず、一生男を持すに朽はつる美なる娘のごとく、よいめにもあはずに、あたら金銀埋れいるこそかなしけれ、然るに源州ふと暮かたより無常心になつて、つらつら思ふに今もしれぬは人の身、いつ迄欲に身をこらすべき、身に叶ふ樂をせんがために金銀ほしき願ひ也、其望なくしては、石瓦も同前、ふんべつする程分もなき今迄の覺悟、さらりとあらため思ひ切たる色あそびして、世を心のまゝにさわぐべしと、始末せし身をわすれて俄に男作り、今迄は夢に見し事もなき、島原に通ひ出し、物の見事な色ぐるい、もごりゐんつう持あまつて遣ひつるに分別極たる大臣、親はなし女房持ねば子もなし、浮世は隙也、異見すべきおも手代は、近、比頓死する、世界我物といふ男、奥州をおもしろがつて

里がよひをやめて、四五日養生せし間に、はや奥州は斗方なしが、根から引ぬき、庭前の花とながめ、我物にしての樂しみ、さりとほきやつにだしぬかれ、扱もむねんくと齒切をして殘念がれ共、今は人の物になればせひなし、もはや此里もおもしろからずと、色川原の野郎遊びに、もやうかゆるしあんせし時、色友達の松原の闇の夜といふ、跡先しらぬひやうたんの川ながれ浮にうく男が、源をすゝめて、おうしうがいぬとて、外にも戀はある物、仕掛し女郎ぐるひをやめて、野郎狂ひにせんとは、尻もむすばぬ絲なり、針のみみずより天のぞくとは汝が心せばし、かの太夫にうつくしき増つて、ちるあつて功者でて、今迄の女郎とわたりくらべて見よといふ、お名はととへば、露とこたへてきゆる程の君、それは長門の萩焼お茶ののめるのか、それよくその君、すぐれてうるはしきに何とて出かねけるぞ、日本國の末社、かたのごとく取持けるに、今に此女郎に廓のすまわさせ給ふは、いか成びんばう神の仕業ぞ、汝福の神となつて根引にせよといへば、我も其君には戀有、成程抓んで、斗方なしにも廿方にも、おそらくまけぬ名を取べしと、それより又



色を替て、長門舟にのりかゝつて、とめどのない大さわざに、年々うめきし銀箱、あけくれの付とどけに、いつもなふ皆になつて、家藏計残りし時、源が懐より、かのけいせい買の生靈、あげ屋酒に酔て、赤色の玉と成り、晝中に飛出、丹波の方へ欠落しぬ、其時源は正氣になつて、今迄の遊びを夢のやうにおぼへ、さりとは我ながらがてんのゆかぬ事と内藏へ入て見わたせば、銀も小判もなかりけり、浦の笹やの明箱斗二三百、鼠の下屋敷となつて、いかなく包紙も残らず、是はとけふもあすもさめはて、足摺してないてもかへらず、とかくしあんにおちぬ所へ、御意に入の末社、花笠左七、按摩取の道安御見まひ申ていつもの調子に是だんな、君よりの御書簡到来、さだめて身請の御事ならん、まづ是は何としての御延引、又奥州さまのやうに、だしぬかれ給ひて、跡での御後悔見るやうな、なんと道安さうではないか、中々あのやうな御らんでいの異なる太夫さまは、日本ひろしと申せ共、まひとりあらばいふてござれ、此くび水もたまらず進上いたす、我らよい身でござれば、後共いわずに抓む事じやに、何とて旦那は壽命の洗濯に、日和見てござあるぞはやう奥さまにして、お中のよいを見ましたいと、そやしたて、かさ高な文御前にさしおけど、源は悪性の生靈去て、正氣最中の時なれば、太夫が文も満足がらず、にがくしき顔して道安にむかい、御自分には拙者共よりはお年かさと申、殊に御法體の御身とし

て、日比入魂に申談する甲斐には、不行跡にもござらば、御おけんでもなされて下さるふ、こなたがけいせい白拍子等の、いやしきものを請出し、婦妻にいたせなど、は、近比本意を背たおすゝめ、お恨に存ると、常どかわつたあいさつすれど、兩人の飛あがり共ま

ゝむれば大臣眼をはつて、お身たちは人を馬鹿にめさるか、神八まん堪忍ならぬといふては、ま一言きかぬ男と、わざざし取まはすを見て、兩人驚、こりやならすの森のほど、ぎすと、こくうに飛て逃て行きけり。其後源は遣ひ捨し銀のかへらぬ事をくやみ、手代共を寄て勘定して見るに、現銀二千貫目、三年半にうつくしう皆になるのみならず、あげ屋に五貫七百目の拂残り有、其外伽羅屋ごふくや、兩替屋より當座借りの金銀合三十二貫六百二十一匁三分九リンの負銀、有物とては居宅諸道具二十貫目が物はありなし也、然れば是をわたしては、手と身とにてのくといふもの、何とぞ家藏此まゝにて、人手にわたさずつゝけてゆきたしと、さまざま分別して見れ共、とかく分散にせねばすまぬに究る時、源ちゑを出し、我をそだてし乳母がていしゆ、南都手具といふ所にゐるを、よびのぼせ、しあをんを申きかせしは、其方年かつかう人物よければ、けふより我らが實のおやと頼むとあれ



ば、是はめいわく千萬と、疊へあたまをすりこむ、いや是が身共が仕出し也、もと此の借銀、色狂ひより出来し事、だれしらぬものはなし、去によつて負せ方を残らず呼よせ、其中にして其方我らが親源右衛門と名のつて、久々江戸の店に罷ある留守の中に、世倅め大分の金銀をつかうしない、あまつさへおの／＼がた迄、かりこと申、存じもよらぬ引負をいたす事、せんだいみものたはけもの、則只今勘當いたす、きやつを斬て成共、ついで成共取つて給はれ、すますあてがあればこそ、おの／＼より借りも買もしたてござらふ、もはや拙者も法體いたし、あいつに諸事をわたし隠居もいたし、らく／＼と後生をもねがはふと存た所に、さりとは／＼情ないことござる、見ればしんいのほむらの種じやと、此わきざしをぬいて、我を追はしらかし給ふべし、時に手代共左右より取付、御尤々々じまいにして、此借銀を舞おさめん、負方の中でむつかしういはんものは、兩替屋のこまかい手代共より外はなし、其外はごふくや、きやら屋、色宿、今迄拂ししり残りなれば、勘當せらるゝうへはやくに立ぬと、粹ごもなれば二言と云まじ、然ば我らは江戸店へ下り、一かせぎすべし、京都は其方手代共心を合、すいぶん始末し銀を溜らるべしと、此手にて借銀を云のばしそれより五年たつて後、大分金銀を仕出し、江戸より都へ立歸り、借銀残らず皆済し、二度富貴の家と榮へ、鳥原よりふく風は、魚屋の南風をいやがる程に

おそれ、太鼓を見ては、神鳴よりはおぢおそれける。

### 第二 花を繕ふ柏木の衣紋

身は隠し物姿は酒樽に入まいのよい親父

むかしより今は商がない／＼と獨して氣をやむおやちあつて、子供の行末の事迄、無用の思ひ置、是其身愚にして商賣の道に疎く、身過の種をくふうして、金の花咲春を、しらぬからおこつてのあんじ過し也、されば都のひろき事、ちいさい心からはかりがたし、頃日九州より獨樂廻しの小人のぼりて、四條川原の小芝居にて、さま／＼の曲ごまをまはし、數萬の入を取て、れき／＼の大芝居をすがらせけるが、なを盛になつて、町々に此ごまをもとめて、家／＼に販びし、後は隠居のおやち共迄、念佛講に參り、持佛堂に御明はごもしながら、鐘木の先にて曲狛、それよりはた／＼き鉦の真中にて廻ふ音、そのま／＼蟬のこゑに似て心のすいしさ、いづれ餘念はなかりき、なまなか心に利欲のかんがへして、口には念佛申さふよりは遙に増と、佛も時のはやり物に氣をうつして、是計はしからせ給ふまじ、去程に家／＼に狛五つ六つ或は十廿買もとめしを、をしならし一町に貳百宛とつもりて、狛一つ十二文づゝにして、此代貳貫五百文、凡京中三千町にて、狛の錢高七千五百貫、銀に



なをして百五貫目餘也、然れば商がないとはいはれぬいひ過し也、爰に人の異見きかぬ氣の大臣有り、銀づまりにてせひなく、彼里まづはやめぶんにて、おもしろからぬ無色の酒のふて居らるゝ所へ、日比御目かけらるゝ末社ども四五人、かざりたてゝ參る、是はいづくへど、とせらるれば、今日は東山へ獨樂の會に參るのよし申す、然らば下稽古に廻して見よとの仰、承つていづれも上手顔して、懷中せしこま取出し、やつて見れど、いかなくおもふやうにまわす、是は我が手にあわぬとて、さま／＼こまに難をつけて、地がかたふいてまはぬこそ不興なれ、大臣おかしく上手に成たれば文庫もつて御出なされ、一曲一角づゝで秘傳をおしゆる事じやとあれば、然らば旦那のお手前見たしと申す、それこそやすき事と、九州の子供もはづる程に、さま／＼の曲ごま、いづれも我をおり、あつたらお手が旦那にある事、すでに我／＼があのごとくまはせば、さつそく金になる事じやとやらやひ、それは平生の所作を恨むべし、大臣はかねを蒔て、まはす事を得給ふ、末社はまはる役めにして、つゝに人を廻して見たことなし、草木心なしとは申せ共、此斷をこまもがてんして、末社の手にあふては、まはりがわるさふな、もし汝らにまはさるゝこまならば、よもや大臣ごまではあるまいといへば、獨樂は根本の廻し手からが、小人じやと笑ひ立にして東山へ參りぬ、されば道／＼によつてさかしき世とは今なるべし、宮川町の子供やの

主、不斷常香盤もる舞臺藝不器用で、隙日のおほい若衆に、枕返し扇の曲、參るゝの仇口やめて、おなじ慰ならば、こままはしこそおもしろけれど、親方ゆるして、黒塗の狗をかふてあてがいけるに、渡りに舟と悦び、其身のこしもと役をしまふて、樂屋に入ても一心不亂に、狗をまはしてなぐさみけるが、下地螺まはしの手きゝなれば、其格をもつて早速上手になつて、初太郎も耻るほどなりしかば、大臣の御きげん取に參りし役者共が噂して、若衆はかつて思ひつきなく、狗の曲見ん計に、諸方より招て、はきゝの太夫子よりは、

此狗の思ひ付をさせて、くわつとはやらし、いよ／＼人しらぬ(三字缺)にあふべしと、鳥箒の忠内と申太鼓が、笑をふくむ、是大きな了簡ちがひ也、太夫達狗の曲見たきどの願ひなれば、何時にても大臣うなづき、早速九州より來る、根本のまはし手を、金にあかして呼寄、居ながら自由に見せらるれば、今から取つて情根つくして、廻しならふが損ぞかし、總じて色里の事は、何によらず、ひすらこげなく大やう成がよし、過し比迄毎年定て正月十六日に人形見せ出して、あげやの門／＼をしわけがたく、いか成太夫も其日の大臣のめいわくかへり見ず、我物いらぬくせに、價ひにかまはず、十兩廿兩が翫びを調べ暫時のなぐさみに、人形屋數千兩の商をして悦びけるが、くるわの中に世知賢き男あつて、



前日に人形屋手前より、多くの人形を買切り、廊中に店を出し、一夕の物を百目といふても、ねぎり手のない商、只取とは是なるべし、是憎きしわざと其比の大臣いひ合て、又來る春を待て面々手よりの人形屋をよびよせ、美をつくしたる人形を五兩七兩がづ、前がたに求置、大臣一人に人形屋一人宛召つれ、十六日の晝からあげやに來りて、太夫禿の望次第の人形、抓取じやと、座敷中に蒔ちらせば、金銀の箔のひかり家内をてらし錦の衣裳着そこらきらめき、くれないのばつとしたるなぐさみ、又此外に有べきやとさわざあいて、せちな男のまはしもの、人形店には、誰がひとりかふものもなく、おほくの仕込其まゝにすたつて、大分の損となつて、是より人形見せかざる力もなく、今の十六日遊びさりとはおかしからず、とかく色里は、内にはつかむ心あり共、表向は大やうにして、大臣をのぼらせ、そだて、取が肝要也、又大臣もせちがしこくまはつて、金銀すくなふ出して、よい事せふと思ふ氣からは、神ぞけいせかはる、筈はなし、それよりは諸道具の取賣にかゝつて、掘出して遊ぶかたがましなるべし、惣じて今時の悪がしこき大盡、大こと云もの費の至り、さらに身の爲にも、女郎のためにもならず、きやつにとらする物を溜て、ひそかに太夫にやつたがましと、ひすい丁簡、こんな氣で太夫にも、見事に物やるものにてなし、殊更色町は男つきにも座配にもかぎらず、金で萬がすむ所なれば、男作るは前方成せ

んぎと、木綿の仕立着物で出かけぬる人あり、此心で太夫にあはふよりは下帯のふるきに伽羅もおします焼すて、引舟に小歌のぞみて、それには耳もかたふけず、末社あい手に至りばなしして、金も手づからはやらす、太鞍にさばかせ、萬事大名氣になつてこそ、御女郎買の甲斐はあれ、百貫目の銀を始末して、五年につかふてあそばふより、半年ほどに蒔ちらして、名をいろ里にばつと残し、しやんとはやくつかいやひこそ、此道の粹とはいはめ、女郎も宿もよろこばぬ小道なあそびして、おんきよの婆さまの芋屑そろゆるやうに、まだら／＼と銀をほそながう遣ふ人の心か知たし、とかく女郎狂ひの始末かならず無用也、其銀とて残る物にはあらず、只うれしがる物やらいてはおかしからぬ所也、なんば高ふのぼつて位を取り給ふ、歴々の太夫達でも、つまる所が金次第でまはりのよいこと水車のごとし、淀鯉といふ男、此里の水をのんで、粹共いはれし身なりしが、今少々の事をわしりて、き、やう屋の天職を、親方に断いふて、年前にしては請られしぞ、さらにおかしかるまじき事と思へど、當所のない金つかふて、揚屋の手前不埒にしてしまふ人より、はるかにましとわらひぬ、爰に信濃國の住人麻生殿の御内に下六藤六とて兄弟の樂助有しが、金はありても遠國の不自由さ、つかひすつる遊山所なくて、身を病ものにつくりて、兄弟共



に都にのぼり、四條の西に住所さだめ、さまざまの遊興、金ありあまりて蒔事に苦のない大臣、わけて舎弟の藤六は生れついでに分しり、京着其まゝ、三と替名して、柏木に比目しがらせける中に、半六といふ大臣、久しく逢馴て、互に命ざりといひかはし、浮氣を去て實なる中なりしが、いつぞの比より、藤六といふ大大臣にへだてられ、幾日もくさしあひ、そうく借も品わろくて、宿屋夫婦を頼み、やうく暮よりもらひて、藤六にまけぬ大氣を出して、萬大場にさばき、あげや一家に満足がる物とらして、めつたにつのつて出、人のそしり世の取沙汰なんとも思はず、名高い末社を數十人あつめ、天職かこい女郎めつたつかみにつかんでこいと、太夫手前のせいに、一度に費のかねをまき、夢中になつて遊ぶ所へ、紺の單物着たる六尺、五六人して一石斗入、酒樽を荷ひ來て、是は半さまのお口にあふ、伊丹の蘭菊と申名酒、去方さまより進上と、臺所にどつかとおろせば、一ツ家悦び大臣さまのおかけて、けつかうな名酒をたくさんにたべんと、皆く手をかけ、座敷の真中になをし、才覺な大こが、紅うらのきる物うらがへして着し、大盃を手持、よもつきじく萬代迄の酒の大臣と、猩々のあしもとして大臣をいわへ、半さらよかに其意を得ず、先來た所の先はごじやといはるゝ時、樽の内にこえあつて、來所はきづかいすな、

先は慥な身共じやと、内より樽のかいみを取て、出たる物をよく見れば、半が親仁にがく敷顔して、むす子をにらみ、敷度の異見を尻にきかし、野郎狂ひに大分の金をついやしける時、勘當すべき所を、町衆の詫言ゆへむねをさすつてかんにんすれば、又品を替て此里狂ひに金をあけおるやくたいなし、宿にてかんだうせんと思へど、又く親類町中のあつかいやかまし、去によつて此所にて耻をあたへ追うしなはんと、此比爰に尋來れ共、宿屋がさどくて風をくい、ついにおのれに合せぬゆへ、此方便にて今月今日、あふが親子の縁のきれめ、未來をかけてかんだふ也、手ぶりでけいせい買れふならば、萬年も爰に居て、したい事して遊ぶべし、あげやのおやちも金とらずに客にしやらば、それはその勝手次第、かんどうするからは向後いかほどの出入あつても、身共はかならずしらぬぞやと、跡の跡迄念を入れて、座敷をにらんでかへられける、太夫をはじめ座中の女郎泣出して、わけもなふなりける、太こ持の中に、手まりの才助と云頓瓢ものおどろかず、大臣に力をつけて是旦那、男は裸百貫と申氣おちなされな、おやちさまも棺桶の試に、酒おけへ入つてござつた、追付めでたい御往生のすいさう、さりと爰があげやでなふて、寺でもあらば、一度桶に入てござつたおやちなれば、かへさぬ法じやとこりや見事に生ながら土葬にする事じやに、大臣の御肩がわるふて、寺でなかつた計に、此理窟がいはれぬと、あたまをか



いくやめば、いづれも泪片手にわらひ出し、是を肴に又酒をのみかけ、せめては半をいさめけるに、はや宿屋にはげんを見せて、手を叩てもへんじせず、茶のもといへは、兩の手に天目二つ持て来て、立ながらさし出し、かへりさまにらうそくけして油火にしかへて行、宵からおまへに罷出、けいはくつくして御きげん取しあげやの男も、かつてから呼もせぬに、まつかせといひ立にはいつて後は出す、臺所には吸物仕かけかゝつた鍋の下を引ひて、女郎それそれによびたつる、扱もく替るは色宿のならひ、人のなさけは金あるうちなり、太夫身にしてはかなしく、ひとり跡に残り泪にしづみければ、半も口おしさむねにせまり、命を捨るに究しが、太夫が同じ道にといふべき事をかなしく、とやかく思ふうちに、女郎色を見すまし、かたさまは身をすて給はん御氣色、近比それはおろか成思し立、此儘にてむり死あそばしては耻の上のはぢ也、子としておやごのかんだう請るが、世になきならひにてもなし、我身事はいかにしても、世になごりあり、勤はそれくちがひ、半も我を折て、れば、何事もあはぬむかしく是迄の御縁と立行、さりとは思はくちがひ、半も我を折て、いかにけいせいなればとて、今迄のよしみをすて、あさましき心底、かうは有まじき事ぞと、涙をこぼし立歸り、其夜は日比目をかけ置し、御が方にてあかし、とかく生てはいられぬ所、逆も死なふなら、心底犬におどりし太夫めをさし殺し、其後いさぎよく腹かさや

ぶつて、未來迄もつきそひ、此うらみをいふべしと、かくごをきわめて、身を行水にてきよめ、死ぬるに思ひ詰て、あくる日あげやに行て、内義にあふて、先親共のきげんををる迄、江戸の手代共方へ立退也、然れば太夫に又あふ事もまれなれば、いとまの盃せんため参つた、ひそかに是へよふで給はれと、きのふに替るあいさつ、おんぎんにのべれば、内義も涙ながら、さりとはおいとしい御事、成程太夫さまもおしらせ申べし、まづくおくへと、情ぶかふ申について、是等さへかく誠ある心ざしなるに、いかなれば太夫はといよくにくさもまさりて、酒もむねにつかへて通らず、枕引よせ世をあぢきなふ、ねるより外はなかりき、太夫其日は風呂屋の作左方に、藤六と出あい、何か申出して、はななくしきくせつ仕出し、互にふんづふまれつ盃みちんになつて、かんなべにさ々なみたつて、塵敷は慕風の朝見のごとく、わけもなふみだれ髪して、太夫がいふほどの事皆むりにして、あげや一家罷出、さまたまなだむれ共きかず、とかくかたさまにあきました、向後女郎替てあふて給はれといふ、そもやそも男たるもの、金でなる女にきらはれ、何と一ふん立ものぞ、生てはいられぬ所と、藤六は果し眼になつて立腹する、所へやり手が参つて、半さま御こしとさ、やけば、女郎こは高に、なんのめんぼくがあつて、心ぎたなふ半さまにはあいにござつたぞ、むかしのごとくよい身になつてござらぬうちには、千年立てもあはぬ太夫じや



と申といふて、かへしましてたもと、すげなくいひ切り、ひとへに狂女のごとくにて、前後そらはぬことのみ、一座ふしぎをなして、物なれたる末社が罷出、まづ大臣をしづめ申、是にはいかさまさいの有べき御事、とかく太夫さま思召の一通りを、つくろいなしにまつすぐに仰られいでは、眼前だんなが、生てござらぬ御しんていきわまつたる所、此里に女日よりはせまじ、お氣にいらぬに、むりにあはふと仰らるゝ大臣にもあらず、只御心の底をあかして、やうすよく旦那の一ぶん立やうにして此くせつまいおさめ給へ、さもなくては百年たつてもすまぬ事と、道理をせめて申せば、さりとはそふじや、皆わしがあやまりました、藤六さま何事も今迄のよしみに、御かんにんなされて下さんせと、人目もはぢす誠の涙をながし、しばらく啼て申されるは、まつたく藤六さまに、あきまして申にあらず、皆もぞんじのごとく、かねてふかふ逢ます半さまと申お敵、きのふにわか勘氣をうけさせ給ひ、當座のちじよくに跡先のかんがへもなく、死かくごきはめさせ給ふと見しゆへ、心に思はぬ詞を申て、水くさく思はしまし、さりとは女郎ほどお心底なるものはないと、おはらたつ氣につれて、身をすて給ふ覺悟も替り、死にさへなされねばあなたのおため、又私の心中なり、しさいは人のおやの子を見かぎりて勘當いたすに、其身をかくして此里迄来て、かんだうなさるゝ親ごはなし、是誠の永き御かんだうにあらず、我

人身をかざる色里に来て、ちじよくをあたへられしは、此以後此里へ是を耻て、永く足踏し給はぬやうにとのふかき親ごの御しあんにて、し給ふかんだうなれば、しばらく我事をわすれ給ひ、御出なければ、追付御きげんをるにした御勘氣と見ましたゆへに、つれなふ申た、なれ共藤六さまに今迄のごとくあいましては、せつかくわしが半さまへおためにしたお心中が、誠の不心中になるがかなしさに、女郎かへてあふて下さんせとは申しました、其思はくはこなさまといふ幅のある男があるゆへ、今迄ふかい半さまを見すたご、世間の人にははれては、此云わけ成がたし、誠わが身事ふびんと思召下されなば、半さま御かんきゆるされ給ひ、むかしのごとくならせられてのうへに、御心かわらずば今迄のごとく、御ふびんくわへられ下さるべし、此後かわらぬ心底は、毎日文して申上べし、御げんに入事今しばしの間、ゑんりよいたし度と、泪玉をなしてかたり給へば、大臣にがい顔して、それでは半への心中には成申さふが、さらに身共へのお心入はないといふものと、せき心にていはるれば、さ思しめすもことわりながら、世上にてお心中ものと、我事あしく評判いたさば、あふでござることなさま迄が、御心ようはござるまい、但御ねんごろなさるゝ太夫がお心中などいはれてもくるしうないか、それでは御一ぶんよはしとあれば、一座是は尤と心入をかんじぬ、時にねどいの又右衛門といふ、物ごと念を入る素人末



社すすみ出、扱太夫さまには、親の勘當するに、ゆるすかんだう、ゆるさぬかんだうといふ、脈あぢごふして御ぞんじといふ、はて親が子に勘當するに、所を見立てすべきや、其まゝおぬしの内にて、何とゆうにも、ひそかにかんだうのなされやう有べきに、お年よられて、身を酒樽の中にかくし、窮屈なめをして、此里までござつて、大せいのつきあいの中で勘當なさるゝは、こらしとより外見へず、それも半さまが主にかゝりにて此しゆびなれば、親方腹立のうへにて、せめてのはらいせに、かく有べき事にもあらず、さある時には、こなたから半さまをすゝめまして成共一所に死なねばならぬ場也、是は重て立身の當なし、半さまはさにあらず、御親子の中と云、ことに御一子ときけば、しばらく此里とをさかり給へば、おつ付ひかしにかへり給ふ御身成ゆへなれば、態とけふも、つれなふ申て逢でかへしましたも、あなたに氣を持しまして、無理死なされぬやうに、又此里を見かざり、重てあひに格子へもござらぬやうに、あいさうもなふ申ましたは、皆あなたのおためなれど、さぞや今は恨に思しめさんと、其日は一日泣てくらされける、これらを誠の心中とやいはん、半は此心底をしらず、落たと見てあはぬと心得、とかく遊女程水ぐさきものはなし、かくぶ所爲なる賣女めだ、うか／＼と心をつくす所にあらず、さふしたつめたき女と死ては、跡／＼迄の笑草、此里通ひも今日切りと、我とがてんの仕時おそけれど、今

ははや取かへしもならず、廣き都に身のかくし所もなく、舊離切れて、便なき身のかなしさのまゝ、科なき一もんを恨、何も知れぬ町の宿老をそしり、振舞の時大きな焼物するがのふで、詭言してくれふ共せいで、さりとて氣の付ぬと、むりな事ひどりばらを立て、歸らぬむかしの奢の戀風に、吹上られて天づく牢人と成あさましきけふの日もはやくれ竹の、伏見の里に、ある人悪所の出合に、頼もしき言葉を残されけるを便に尋行、やう／＼そこになげきを云て頼めば、主見すてすおもての借家をあげさせ、先取あへず此所に身を置給へど、おろかならぬもてなし、うれしく半年あまりも爰にくらせしが、此門前は大阪かいだうにして、往來の人たへず、ある日面おもての見せに出て、通行の旅人を見れば、町人らしき者共四五人つれだち、とかくあなたのござる所は、新町ちかくか、道頓堀邊にて有べし、先此二所を第一に尋んと云こゑ聞ば皆手代共也、是はしたりいづくへ行ぞと、なつかしさに思はぬ涙をながせば、お悦びあそばしませ、大旦那の歸依僧、淨土寺の和尚さま、色々おわびあそばされ、比日御かんき御ゆるさるゝにきはまつて、諸方へ人をさし遣はされ御尋あそばし、我／＼も大阪へ御むかいに參る所にさいわひ爰で御目にかゝる事、私共が仕合と悦ぶ事かぎりなく、主にも一禮のべ、半をかごにのせ申、都の住所に御供申せば、親父のきげん母の悦び、しんるい家來出入人迄、いわひの酒盛にぎはひ、それより親



父は、萬事を半に渡して、岡崎に隠居し給ひ思ふまゝなる仕合、きくとひとしく藤六尋來りて對面し、太夫がつかき詞も今此時を、未然に知ての事也と、具に語り、扱其後は二り、前代未聞のけいせい買と、世上に是沙汰事知とは是なるべし。

### 第三 花崎實のる玉の輿

身はすて物命は、ないに打つけた太鼓持

五體は違なくて、人程替れる物なし、前生にてよき種蒔置けるにぞ、たとへば忍び駕籠にのる人のあるに、まはす人あり、金銀も死すれば瓦石のごとくなるが、生あるうちは是にまされる重寶なし、ことさら色里はゐんつうにてはのきく事、一しほの大臣の威勢も飛鳥トビ中間とて、上京に卸おろせてあげの者はやぶかひ、江戸に二挺立の小舟、大阪に浮世小路の悪所駕籠、かくのごとく道のいそがる、物をこしらへ置ぬ、むかしは何の書にもない事、今の世の自由さ、次第に人賢ふ成りて、萬に氣をつけ、かゝる事迄たくみ出せり、迎の事に神鳴を地の底でぐはらつかせ、地震を天へ宿替させ、物前に借錢乞の方から、出違ふやうにさせば、世界に何か思ふ事有まじと、花の都にも大晦日になるすつかふ太鼓持、なりかつかう願西

に似たとて、念西彌七と云素人末社有けり、折ふし吾妻の大臣始て上方見物に上られしを、さいわひと、取付、名所古跡はお下り品にも見らるゝ事、先女郎のうつくしい島原と云、色所を御らうじませと、中間の可笑男共七八まねき、まんまと色におもむかせ、いづれもさらを見がきて、大門口より鳴込萬かさ高に、氣の取のぼる春なれや、陽氣な男共わや〜と云て、丸やが方におしこみ、諸事彌七が承つて、幅廣にしこなし、すいぶん粹じまんとして、あげ屋へ内證申は、先金銀蒔に斗、わざ〜御上京の大臣お國にては金も瓦も同じ事、とかく人に物やらねば氣色の悪ふ成だんな也、扱此里へはけふが始ての御出なればどなた成共御意に入たる女郎様あればおつ取て當年中はあげづめになさるゝ事也、とかく今も云通り、此度初上りにて、諸分未熟なお客なれば素しらひ事共有べし、必わらはぬやうに、上する女共にもよく〜云つけらるべし、お金の蒔じぶんおそくば、我等迄さしこみ給ふべし、八まんそこらはぬからぬ男、壹歩といふは初心な事、あたまから小判の花をふらす事じやかと、ていしゆが悦ぶ上をいへば、萬事は貴公を頼奉ると、疊へあたまを植へて悦び、扱女郎さまはいづれにかと、おうかひ申せば、大臣仰らるゝは、今も彌七がいふごとく、遠國者なれば、かさねてのぼるも知がたし、只國方のはなしの種に、此所の御太夫さまに合てとあれば、まづは夕霧さま柏木さま、長門さま、さんごさま花崎さま、惣じてかやう



の太夫さま達、俄には成がたしと申す、いかにもさこそあるべし、しかし汝がはたらきにて、もらふとやらは成まいか、先是にて見事なちるを出し、何とぞ才覺いたすべしと、小判壹兩投出さるれば、さりとて且那は京にもまれな御粹さま、ごなた成共命にかけて、もらふて見ませんと罷立、しばらくあつて、先以大臣さまの御仕合拙者がまんどくは花さきさま、今日八文字屋方にござりますが、只今御内證きかしましたに、ちとやうすござりまして、もらひがなりさふなど申す、やれそれこそ取にがすな、人橋かけよといらち給へば、畏て追人をつかはし、いよくござるになつて來た、是ありがたの影向やと、一座いさみて待所へ、御きげんよく太夫さま入せられ、のつしりと座につき給へば、口鼻出て御引合せ申、それより酒おもしろくなつて、押へたしもせい、しめた間、合點か彌左衛門、心得たんば、よめなまじりのかるい吸物春めいてのめるほど、むしやうに飲で、かたはしから行つ

て此君ならではと、大かたならぬ打込やう、明日から當月中迄、外へやくそく無用と、ていしゆに仰付らるれば明日明後日は、京の大臣さま則此所にてのおやくそくと申す、然らば明々後日からかならず晦日迄、かたくきわめおくべしとあれば、其段は明日京のお客さ

まに尋ねましてから、御返事申上べしといふ、時に大臣むつとしたる顔にて、扱は身を田舎者のび助と思ひ、はりあいをかけ、きしますと見へたり、あたご白山、出やうがわるいときかぬ氣な男と、むづかしき顔付、成程御尤ながら、明日のお客は、兒玉堂の何某立賣の玉中さまとて、太夫さまとはふかいおなじみ、此里にかくれもなき御方、明日の御きげん次第で、當年中もそのまゝと仰出さるゝ事あれば、あなたの御意きかすには、おやくそく成がたし、何とぞ其日のしゆび次第に、又今日のやうにもらひましてしんせませんといふ、いや／＼金銀出ながら、恩に着てもらふなどいふ事、大きにいやなるせんさく、第一其男め戀しらすめ也、金銀の威光にまかせ、外の戀をさきて、廓に置ながら、餘の人の自由にさせず、幅なき大臣共の胸をこがさせる段、戀は互といふ事をしらぬ癖者に、鼻あかせて、一代思ひをかけてこうくわいせん、さあ此ちゑ出して見よと、七八人の太鼓共を、ちかくへよせて仰らるれば、いづれも愛は一思案と、霽の酒の醒るほどあんに、とかく太夫さまを引ぬき給ふより外はなしと、口をそろへて申上る、成ほど／＼我らがしあ人も、それにきわめ置べしと、すこしの事に氣を持って、ばつとしたるせんさく、女郎もそれ程に満足がらぬ事に、八百五十兩の内證やくそく、ていしゆおちつくためとて、紙入に有合せの小判わたして、ふた／＼びかへらぬ金子、残りは四五日に才覺して指越べし、今少



しの事にて、跡々にてさもしき噂もいやなれば、此上に貳百兩三百兩餘慶の入分はくるしからず、萬事分あしからぬ、やうに頼むと、大場に出て、扱太夫置所は、樵木町の、伊與屋うら座敷ときわめて、お内儀木屋町の家見に何をもつてござるぞ、芝居見がてら、朝とくより御出を待たり、おそらくは日本廣しといへども、初會から請出すといふ事、我ならでは有まいがといづれもよいきげんで、笑ひ立にして歸りぬ、翌日玉中爰に來りて、やうすをきくよりむねふさがり、さりとはむねん千萬かねて我うけ出す所存なりしが、今少し心得かぬる所あつて、その心底を見とどくる迄と延引して、今の後悔、太夫と我中、およそ西三十三ヶ國には、誰しらぬものもなきに、今外の手に渡しては、此里知の男共に、うしろゆびさゝるゝ所、生てはいらぬしゆび、死ては猶又此上のちじよくと、大方は亂氣のごとく狂はれしを、亭主をはじめ末社共取付止て、むかしより身請に、もらひといふはなき事ながら、是計にはどうぞもらひがなりさふな所ありと、ていしゆ申出すに力を得、金銀づくで成事ならば、廓中に金を敷べし、すいぶんちゑを出せとあつて、當座に見事な御事、とかくかやうな事にせいたはわろしと、しさいらしくしづめて申は、尤體に請るとのやくそくながら、此客始てなれば、あなかなづみて引ぬかるゝとも見へす、酒きげんに少しの事に氣を持、せんしやう一へんに請らるゝやうすなれば、何とぞ手を入彼大臣の

ひざもとさらすの、彌七と申太鼓に、ないせうからお頼みあらば十に五つ旦那のお手に入やうに、成まいものでなしと申せば、大臣喜悅あつて、是はせめても手がりのある相談どうぞ其彌七にのみこませやうの才覺あるべき事とあれば、おろかや旦那、そこらは小判で類はるなり、殊に此者今居る夷川の借宅、ゐなりにもらひたきよし、家代貳貫七百目のねがひ、頃日大臣へ訴訟の最中、是さへつかはさるれば、自身胸をさいて、生肝にても指上るは慥な事と申、それは何よりやすき事、とかくはきやつに片時もはやくあふて、先さまの所存き、たしと、談合中ばへ彌七次の座敷へ參つて、何か内儀とひそかに内談する體いよゝゝ究に參つた物であるべし、爰にてくだんの家買代金、皆迄いふな、五十兩の小判にねたば合せて待て居る、はやくつれて參れの、御意畏つてつきへ立て、彌七にあふよりはやくきげん取がほにて、こりや世界の仕合男、家でか金でか望次第に、貴殿が心まかせの春じやとめつたにのぼらすれば、そういふあるじがきげんほごめいわくな、とかく口さきでは、いひぬけのやうにて一分よはし、ことはりは是なり、何事も此心底にめんじて、かんにんしてくれと、兩はだぬげは、下に經かたびらをちやくし、左の手に珠數を持、右の手にて脇指ぬく時、ていしゆ肝をつぶしてやにわに取付先やうすはととへど、死で跡で知る事と語らず、とやかくいふこゑにおごろき、奥より大臣をはじめ、末社のこらすかけ



出、何かなしに先わざしを引取、とかくやうすをかたりてのうへともかくも汝が心まかせといふ、然らばしさいをかたるべし、昨日供して参りし、東の大臣、太夫さまを請出すにきわめてかへりしゆへ、いよくかために、只今ちをんらん門前の旅宿に参りしに、朝未明に宿をあげて、釜の下の塵も灰もないやうにしまふて立退ける、さゆうの大筈おほはちもの共しらず、眞實と思入、諸事をかさ高にさばき、おのおのを我等がちよろまかしたと思はる手前、いかにしても面目なし、とかくは死て我等ぐるみに、だまされたる所をお目にかげんと、涙をながして申す、おのく横手を打て、是はかくべつなるしゆび、玉中さまのおためには、又なきおしあわせ、さりとは彌七いひ出しやうがはやし、今すこし待て、あなたのを聞てから、かくごきわむれば、かねてのねがひのゑびす川の家が手に入ものをとかく果報のない曾我耳じやと、大臣の思召入のこらすはなせば、彌七しぬるをやめて、さつても残念千萬、此方からわび口いわすに、あなたからはわせます事じやにと、大笑ひになつていよ／＼太夫の身請に究り、千兩のひかり郷にかゝやき、榮花の花崎威勢のさかりいくちよかけて御中よく、太夫さまは九十九迄、相生の松風、小歌のこゑぞたのしむ。

#### 第四 花は散ご名は九重に残る女

身は賣物心は自由自在にならぬ天神

世に親仁と名さへつけば、我人おそれて、仕掛し色ばなしをやめて、當年は夢がようござるのと、手のうらをかへすやうに、はなしも一調子ひくうなつて、一座にわかめいる事おやち身にしてはめいわく千萬、おやちとても人間のたねにあらずや、本悪性人が、年のよりたるのが皆おやちといふ、こわきものになれば、あながちめつたに、こわがらふものでもなしと、後家おやにかゝつて、我まゝにそだちたる男が、せけんいきびしきおやちのある事をしらす申出せど、こわい親仁は當世の浮氣男とは、かくべつ仕込のちがいのもの也、第一若い時から、身過を大事にかけてかせぐ事には夜を寝ず、氣根づよふ勤てきた目で、今時帳相仕さして、あそぶ事に夜をねぬむすこ共を見合ては氣にいらぬが斷也、むかしとても色遊びのないではないけれど、金のつかひやう各別也、先親よりゆづられし銀なごあだにつかふ事にあらず、商事に自然の仕合よく、思ひの外に利徳を得し時、まづ冥加のためとて、お伊勢さまへお初尾銀拾貳匁、りんとかけてのけておき、扱旦那寺へ盆正月の禮の外に、いまだ遠き母の三十三年忌の布施迄包、其上に今年四つに成乙娘が、よめ入する時の心あてに、長持をあつらへ、水風呂より湯風呂が徳なれど、こしらへる事を造作つくろに思ひ、四五年も案せしに、是さいわひとして仕舞、こんな仕合一代のうちに、さい／＼は



なき銀もうけなれば、思ひ切て、かこい女郎たゞひとつ買て見んと、遣ひ残りし五十匁あまりの銀のうちからずいぶんつき悪きをゑり出し、十八匁に少しかるうかけて、ひとりゆくもさびしく、さいわひ参宮せしじぶん、るす見舞ひに肴くれられし返禮に、むかいの四郎太をまねき、あげやの夕食ふるまひませふと、雨のふらぬ日、朝とく起て、あさめしさし急ひで、はやり芝居見物に行にもはやき時分、あげやにゆきて遊びしが、今時の若いものは、爰からあそこの一またげある、島原へ、かごにのつて行げな、あゝもつたない事斗と、輪珠數くりくむかしを語るる、年寄あり、されば一切のおやち皆かくのごとく、物堅かと思へば、さりとはせかいはひろし、東洞院にかくれもなき、うろこがた屋の徳政とて有徳なる禪門有りしが、六十以後唐物のあがりを経て、俄にたのしくなり、それよりいよ／＼借銀がはたらき、内蔵にもあまりけるが、若き時より秤目をせりて、朝暮渡世にゆだんなく、しかも下戸なれば浮世の樂みたへて、やくたいもない年月を送られしが、物には時節あつて此禪門七十と申春の比より、島原狂ひを心ざし、夢のごとく氣をうかして、あたまから一文字やの名高い太夫になづみて、其比の至り末社共を召つれ毎日かよはれける、是かや日くれて道をいそぐに似たり、しゆもく杖ついて床入せられしが、腰は反橋のごとく誠の事は思ひもよらず、足ののびかみさへ成かたくて、齒もないはぐきをくいしばり、

身をもやして無念がり、我せめて二十年前に、此里狂ひの心ざしあらば、したい事をしてたのしむべきに、今となつて口おしやとかく向後床をやめて、名にきし太夫天神を殘らずまねき、太鼓におもしろい酒をのませて、金にあかしてさわいで遊ばんと覺悟究めて、人のほしがる物懷より取出し、出るほどのものに五兩七兩づゝ取されければ、いづれも悦び、是はおやちさまに死花が咲といさみける、それより次第に粹になつて、一座の酒振あちをやられ、かるはづみのおとし咄もしおぼへ、しかけのうそも見出し、七十におよんで分知といはるゝは、誠におんざの初物なり、ある時出入の素人末社をめされ、我若く盛にし、女郎にはち巻もさする程に、いきほひのつよき時は、揚屋の小盃をだに手にとらず、さもしくも金銀溜る事に、あたら月日を送り、今樂み至極の色遊びに、かんじんの分のたぬ時に至つて、此心ざしの出來し事、かへすゝも殘念也、然れば色狂ひの盛といふはに生れし甲斐をしらすべし、是が本の親の慈悲なり、汝らよつて此道をすゝめ、人にも大臣といわする程の、粹にして得させよ、金銀はむす子が心あてに内蔵一つ手をつけずのけて置たれば、かならず始末せずに、ばつとしたさわぎいたすべし、きたなびれたさはいして、親の名迄をくたすな、女郎は大坂屋の若むらか、見やまちよかるべしと、物なれたる末



社三人御子息に付られ、親父金本しての女郎ぐるひ、神代此かたない事と、藏の鑑まゝならぬむす子供が、のどをならしてうらみけるも斷ぞかし、此むす子當年廿八になつて、器量よく姿は當世男に生れつきけれ共、正直にてうそつくすべをしらず、りちぎ千萬にして物堅く、我妻の外には、女のはだといふ物をしらず、姨のもごより給はりし桃色にそめし、

さらに耳に聞入ねば禪門きのどくがられ、とかく當流の末社は、物がたき風にはあわぬ筈と、日比むす子がねんごろに語る、我より下めな友たち共二三人に、あらましをかたりて頼み、不食な病人に、粥をすゝめるやうに、いろ／＼とすかし、一つはおやちの氣やすめなれば、親孝行と思ひ、永ふとはいふまい、せめて今年中、女郎狂ひをしてたもれと、やう／＼とがてんさせ、痛ものにさわるやうにして、島原にともない行、あげやへも親仁から此内證申つかはれ、常の客とは替り、諸事物堅うしかけ、何とぞ其里あかぬやうにしてくれどのお頼み、それ畏て、物に心得たるあげやのていしゆ、下袴着し表迄むかひに出、座敷に通しまし、見ぐるしき所へ忝き御出と、時の旦那の氣に入やうに、いんぎんに手をついて申せば、息子大臣作りつけの人形のやうに畏り、私儀は東洞院通に罷有、うろこがたやの政右衛門と申ものでござる、扱是なるは同町橋屋道西老の借家にゐられます、諸酒屋の

五郎兵衛殿と申、又それなるは珠敷屋の善助殿とて、誓願寺前の人、爰なは私南隣に、突米屋の茂平次殿とて、ほこり商賣でござれども、七人口ゆるりとのくらしと、みぢんかくさす有のまゝに引合せば、三人の連は汗をかいて、さあ／＼酒にせまいかどまぎらかせばていしゆおかしさをむねにおさめて、是は委いお引合、近比よいお近付をもとめましたと臍のお切て、ついに申さぬあいさつすれば、自然町筋へ御出の折から、俄雨には何時成共下駄傘の御用には立ませうと、物堅き口上すんで、扱女郎さまは一文字屋の天職ともへといふ若女郎に内證申て、内儀つれまして出られ、近付にいたされ、それから盃事はじまつて座中、酒きげんに、もんさくつくして高笑ひすれど、大臣はひざまをさす盃手前へ来る時は手習寺でならふた通り、念入ていたゞき、大事にかけて雫も酒をこぼさず、一滴七十五粒が所と、過てもあけるといふ事なく、指れた方へ急度もごし、其度ごとに看をはさみ其箸を我もいたゞいて下に置、さま／＼おかしき身ぶり、一座かんにんしかねて、こりやならぬはと笑ひ出せば、我事共しらす、おなじやうに大笑ひていしゆ夫婦も我をおり、天地ひらけて、あげやといふものはじまつてより此かた、かやうの珍敷お客はなし、親仁さまとは各別世界と申あへり、扱膳出れば座のせんざしばらくして、おの／＼膳にむかへば、大臣ていしゆに丁寧なる時宜をのべ、一獻過て、引て焼鳥かまぼこを、上する女が見ぬ内



に、はな紙出して手ばしかく包袂に入る時、三人のつれ興をさまして、とかく此世の人で  
界の事一がいにはいひがたし、ある時越後の半九といふ大臣の本より、澁紙包一つ職人ら  
しき、ひわかい男があげやへ持参して、御ていしゆに直に渡したいと申す、主罷出て請取  
御太儀に忝し、お茶でもまいつて休てござれといへば、まづそれをあけて見て下されとい  
ふ、中あらためて請取書てしんずるにおよばず、追付こなたからお國もとへ、御返事を申  
上べしといへば、其中に私が金がござります、あらためて見て、けいせいかわして下され  
ませと申せば、ていしゆぎよつとして、紙包ほごき見れば、烏桐の小箱の中に、金子百兩  
半九大臣の添状一通ひらき見れば、此吉藏と申男、一文字屋の天職ともへといへる女郎を、  
去春御影供のかへるさに、ちよと見しよりも大かたならぬ思ひとなつて、此度わざ／＼と  
其女郎にあいに斗罷のぼるの間、すいぶん馳走いたさるべし、先色狂ひの手付金に百兩相  
わたさるゝ、是にかざるべからず、いかほどにも入用次第、其元我ら定宿へ申つかはれ  
其里の分あしからぬやうに、たのむのよし、ねんごろに書れたり、ていしゆ俄に詞を替へ、  
よくこそ御入先奥へ御通りあそばし、御酒でもめしあげられましたうへにて、思召も承  
り奉らんと内儀も出られ槌で庭はき紅はき詞に色を付て、さまざまのもてなし、扱女郎さま

今日はならしやりませぬと、遣手が申詞にすがり、けふのお客のおもはくくわしく語りて  
あるじ夫婦ひたすら頼めば、此やり手後世ねがひにや、よく聞入て女郎に申入れば、情に  
まはる巴にて、お心ざしのうれしければ、こなたのお客に斷ゆくべきよし、大臣へ文遣し  
何の事なく手さへにぎらず、其夜はあけて其まゝ歸りさまに、又の日から十日つゞけて契  
約いたし、爰に碇をおろさせ申、沖をこぎたる遊興、末社もなくて一家をあつめ、主に預  
し百兩を、心よく蒔ちらせば、あげ屋のざしきは時ならぬ山吹の岸かど見へて、宇治へもき  
こゆる計、辰巳上りなこゑを出し、聞しに増る大臣と、笑をふくみて悦びあへり、されど此

らに其けしきなく、何事も叶はぬうちこそ戀路なれ、心のまゝに自由なしては、妻女も同

萬に心おかれて、さらに面白からぬ御事、誠我思召ての御出とはぞんせず、あいまして廿日



聞ましたいと、ともへは浪の紋郡内の袖をぬらしてかきくごかるれば、おろかや思はぬ御身に、大事の目を爰にくらして、艶顔を拜し申べきや、誠の心はけふぞしるべしと、ていしゆに兼て申渡せし身請の事もいよ／＼けふに極むべしと、五百兩の外に五貫貳百目の借銀迄持せ來れりと、供の者共呼よせ、はさみ箱あくれば、それにちがいはなかりき、女郎なを／＼ふしんはれず、此里御出し下さるゝ、御心入はうれしけれど、あいそめてよりけふ迄の御しなせ、さらに實とは見へず、よもや戀にて引ぬき給ふにては有まじ、さあればかたさまにつれられて參る事、いやと申切ていしゆ夫婦やり手迄、是は一興なる太夫さまのお詞此里を出給ふは、御身のほまれと申、御一生のかたづき、何とか心得給ふとしかり申せば、大臣きかれて、いやいや是は女郎の दौरानり也、今は誠をあかしてきかせん、我れ事、實は越後のものにあらず、皆も知らるゝ、當地においてかくれなき、曲水と替名を申て、此女郎のあねご菊川といふ美君を、先だつて根引にし給ふその大臣のけらひ、吉藏といふもの也、頃日菊川我旦那にねがい申されるは、我身事御影にてくるわのくげんをのがれ出、かく榮花にくらし侍る事、ふかき御恩、死てもわすれがたし、しかし御ぞんじのごとくひとりの妹を、廓にのこしうきつとめをさせぬる事、此身になりて思ひやる程か

わゆし、迎のお情に、いもと巴も我におなじき身となし給ひ、兄弟共に御ふびんくわへられなば、何か此の上の望あるまじと、わりなき心底大臣聞といけられ、それこそ安き望、早速けふにも請てあはすけれど、そなたを請てまだ間もなきに、又引ぬきしと世間の人に、奢のやうに沙汰せられんもむつかしとあつて、則むかしの色友達、越後の半九さまへ此趣を仰つかはされ、あなたのそへ状もつてゑちごものと偽り、表向は我らがつかむ分に、して、内證は御兄弟一所におかせらるゝ心入かならず外にはさたなしと、一家の口をかため、すぐに姉子の方へ御のり物をかき入ゝくるわをはなれて兄弟の對面、是計には虚のなて、曲水大臣もよいきげんして、菊川といふもながれにちかき名なれば、けふよりして、人のほしがる物の色によそへて山吹とめされ、月にも花にも雪にも螢にも尻つきのよい、兄弟の女郎をながめ、あした夕べの楽しみに、あねに色絲彈せ妹にうたわし、萬自由のく世の極樂なるべし、されば今の世の人間、假の生死をわきまへ、一日成共色道の遊興、又もなきたのしみと、短ふさだめけるこそ上分別なれ、申せば堅き、なれど且に紅顔あつてあ



げやにはこらるゝといへ共、夕べには白骨となつて、くわいひん荒言はいたる太夫さま達、くるわをならぬ大臣、跡引て此うらみを仕掛、物の見事なさわぎをするわろと、二割半にまはる借銀の内を、戀なればこそ持て來てつかふ貧なる男を、おなじ事にふらるゝはいぢらしい事也、

けふ九重と時めき給へ、美君も名のみ残りて花は咲比、其身はちりて苔の下露きへて情のふかき事は、今に我人申出しておしみ侍る、あゝ夢じやもの〜。

### 第五 花にも負ぬ三五の月

身は病の入物、願は先の見へぬ目病の地藏

秋の夜の、長きに退屈するとは、色狂ひせず霞から寝る、しわい奴が申せし事也、千夜を一夢にくゝり合て、其上に閨月迄こめて晝のない國に生れても、色さへあれば夜に飽といふ事のない、遊び好の末社共三三人御目かけらるゝ大臣、御親類の中に不祝義な事あつて、

一兩日かの里御遠慮につき、ふしぎにきのふけふ揚屋の疊をふます、今霄も又無色にて我宿での夜の長さ、近比草臥判官、静、平人片岡彌市、伊勢の三ぶなど淋しさに打より、今迄見つくせし色里のうわさを仕盡て、是より末の世の色里の事すいりやうして見るに、次第にしほ濡て替た事のみあるべし、既に今さへ常なる事を、何によらずふるしどもちひす、名の木も鼻につくとて、焼物を留るなど、かほりのよきにはあらねど、かわつた事を、しやれたといふて悦ぶ人心なれば、そば切を酢でうごんを茶でくふなどあちにやる計にして、手重き事をやめて、萬事をかろく小切り目にして、つくろいなくしらすくにして、すぐばけな事のみおほかるべし、然れば女郎ぐるひをして一座がおもしろいの、器量がよいの、意

立にして、大臣は歸らるべし、女郎も今迄さまざまの衣裳しつくし、風俗も袖下のちいさい時もあり、ゆつたりとする今もありて、いろいろに替れば、此後の物數寄しやれて、髪は替らず島田にして、ひらさひ平髻に金唐紙をたゝみ、衣裳もぐわらりと神鳴小紋などつけて、廣



袖ゆたかし、はうご反古染の上下を着て、素足に沓はいて道中せらるべし、ふたの二布は紋紗にして、

中を掃除するやうに、切々出し入をして、今迄のごとく、すそにきやらもとめられまじ、扱状文にも、御身のいたはり頼みますなどした、あまい事はかゝれまじ、増てきのふはあいましてなごゝはくだなり、あたまから御かへりの後は、とじてかくしてと、其品をかかゝるべし、御内の御しゆびいかいさゝましたふぞんじまいらすは、千年過てもやめられまじ、さりとは是計はきづかいし給ふがうそで有まじと、大臣も誠にうけらるゝ事也、しゆびそこねてはげんざいあきない旦那を取りうしなはるゝが實正なれば、けいせい買の本阿彌に見せても、是は真に究べし、扱物前にやらるゝ文は、成程かさびくにして、封じたる上に、此方無事と、遠國から書て来る格を以て、此内に何も無心ごとなしと、披ぬ先に、さつそくてきがあんどするやうにしてやらるべし、又大臣も着類の好かはつて表は日野袖、又は龜屋島の細いに、裏に唐絹の美をつくし、齒枝に磨出し蒔繪の物ずき、延紙の切

し、起請を書する事など、一向初心の至りとして、怪我にもさせまじ此替りには、我逢ふ女郎の親元を、いつわりなしにいはせ、今迄の心ていに少しにてもちがふた所あるなれば、そんじやう何といふ女郎は今太夫風をふかせ、公家方のお姫さま顔して小判は木になる物やら、酒はごこの井戸で扱て来る物やらと、世の事しらぬかほはし給へ共、あれは西の京の御前通りに、かすかな扇のはねけづりの、太郎助といふものゝ娘にまがい御座なく候と書て門口に張つけちよよくをあたへて、すぐに外の女郎にのりかゆるけいやく、是誓紙にまさる心中がためと、いな事にかわるべし、只いつ迄も替るまじきは(五字缺)目付かすか



めになる事計いふて、すぐばけにして、こかさる、一手をあみたてらるべし、すでに今時の放下師品玉取にも、種々のかくし所、手づまの仕かたを品品して見せ、其上にて、かやうに見へぬやうにいたした物でござると、秘する事から、先へして見せねば、がてんせぬ時ぞかし、次第に大臣かしこ過ぎて、十四五手づ、先を見すかし、常に下戸を知てゐながら、あげや夫婦やりてまじりに、おもしろおかしういふて酒を強る時は、また間のあるに正月の事頼むか、さなくばあげやおもてかへか、やり手が夫に商さる元手の訴訟か、どうでもしいて酔すは、無心いふ下地と、はやがてんして、當暮は江戸の店へ勘定き、に下れと、かねて親父がいひつけ、さりとて都の正月せいで残念千萬、去ながら逗留も久しからねば、罷上つてはつがごとにも近付に成べし、全盛なる太夫殿にお目にかゝれば、諸事に氣ほねがおれいで心よき定て正月の事などは御ないせうしめてござらふといひさふな事こちらから以て參れば、宿屋夫婦やり手のはつも、はや敵に先をこされ、心に籠しねがひの事の裏をかゝれて、あきれていひよるべき手がかりなさに、江戸へ御下りなされませうば、太夫さまへさぞ置みやけが、うなつた事でござりませふといひかゝれば、餞別見ま

して、其上の事と、きよろりとした顔、客でなくば、頬へ水がかけたい程に先ぐりばかりに知恵がはしつて、本大臣の心の廣きが次第にすくなくなるべし、是からは我々が商賣連も心もどなし、今迄の調子に、あちな手つきして、是だんな計いふて、盃のあいしたり、かる口いふ分では、よもやつれまし、算用もしたり、目安もかいたり、少し針も立ならひ按摩も取て、小料理もき、小刀細工も得て大臣床に入てござる中に、桃の種にて猿を作つて御目に向け、竹の切にて、耳かきこしらへ、當座の御用にたてるやうな、かりそめの事にもために成事せずしては、太鞍にはつれまじ、かふよつた三人の中、いづれも無藝にして何の取得なく、たい酒をのむと、遊ぶ事に退屈せぬと、物もらふ事と、かるたわざに目がひかると、大臣のふびんからる、女郎を、透をみて横をいたしたがると、酔て及物ざんまいすると、精進りやうりが嫌ひと無事で済だ事を引發して腰持と、人のいやがる程の事は好物の男共、思ひつゝける程此後の事心元なし、今迄のごとく、よい大臣がかからぬとて、此身がよの商ひ物のやうに、芝居通に、甘軒茶屋の門口に見せ出しもならず、盆でもないに、太鞍持はく、あげ屋町の食時心がけて、賣にもまはられまじ、まだもぬくもりの有うちに、もらひおきし羽織の一つもしまつせよといふ、近比めいりしせんさく、太鞍持と金山にかかるものと、芝居の銀親するものとは、氣をしなしてはならぬ商賣、世



界に世知がしこい始末大臣計も有まじ、きのふ伊勢の三太大臣の御供して、大和屋の替り狂言見に行しが、提重申付に、四條の鯛屋へ立より、品々申渡して門口へ出る時、新在家の髭の喜八にゆきあい、是は久しやいづくへ行とへば、大臣の仰付にて、目病の地藏へ百日のはだし参りするといふ、扱はさんごさまのおてきか、慥に此願成就也、かく鯛屋の門口であふたからは目のよいはしれた事じやといわへば、近比満足此太夫さま事、又できまじき上作物、ぬり砥にかけても、みぢん疵けのない生れつき、さのみ酒事に上手をも出し給はず、詞に敷なくして只何となくきげんよく、角く迄氣も付られず、いかにしても一座の大やうなる所、たとへ鳥の木綿布子きせましても、誰目にも太夫さまと見ゆる女郎は此君ぞかし、あはれ人の目がお役に立ものならば我らが兩眼つかみ出して、太夫さまの御目御養生なさるゝ間、掛替に進じまして、大臣お手前から眼代として貳百はい程申うけ、東寺あたりによい田地もどめて物まへしらすに大晦日の闇も目くら蛇におぢず、杖一本で、ゆきたい所へゆく身になる事じやにと、無用の欲ばなし、汝ごときの末社の眼を借りて、太夫職をつとめ給はゞ大臣のよい羽織に目かつき、ぬがるゝとすぐに着取りのむね算用したり、一盃うけて、のみにくい顔して、花待ついやな下心など、取る手引手に欲で仕上た眼なれば、お役にたゝぬがましとわらふいかさまいへばいふとをり、女郎は無欲で

もつたもの、又大臣も金銀の沙汰なく、賢過た方より少し鈍き方が、大様にしてよし、されば今日病の地藏へ代参仰付られし大臣は、絲屋町にかくれなき、色狂ひの旗頭熊谷笠の新平と名のつて、島原陣に一度もふかくをどられず、金銀の矢種つきねば、あたるをさいはひに、はらりくど蒔ちらし給へば、あげ屋一家はいふにおよばず、犬迄見しり奉つて、尾を振て、お出をよろこぶ、同じ人間と生れて、かかる浮世のおもしろいめにあい給ふは、よくく前の生でよき種を蒔置給ひ、今女郎にぬかせらるゝ髭とは、生出侍るかど、高あしただはく行人も此大臣を見て、又の世の事頼もしく修行いたしぬ、こんな大臣に合せらるゝ太夫さまは、大果報者といふもの、追付根引の花やつてのり物の内より東山の春を詠やり給ふべしと、四十末社の物共、大臣の御意に入べしとて、もてはやせば、さりとは太鼓持には似合ぬ、不物好きな事を申者共かな、世間の大臣、女郎を請出すは、皆しわい心から、算用づくで請る也、たとへば一度に千兩出して引ぬけば、當座は大氣に聞ゆれ共、揚詰のさんやうして見た時は三年過るとたゞになる也、我らが物ずきは其算用づくにはかまわず、なぐさみを専にすれば、いつ迄も此里において見るが面白し、色里はなれて町屋に置ては、常の女の少し取りなりのよい分也、下屋敷において通ひ女にと思ひよれど、是も半分は汝らが物になれば、我あふ内は人にあわせず、千年もあげづめにして遊ぶ



こそ心よけれど、毎日手を替品をかへての大きき、殊更過し名月の遊び、月宮殿にて、玄宗と楊貴妃兩吟にして、曲拍を廻されしも、まはりごをきなくさみ、ほしがる物はつはつとやつて、人をまはして見るほどの遊び、又外にあるべきや、いつもといひながら、こよひの爲にはわけて柏屋権右が二階座敷、南うちはれて夕ながめ、月は手池にして太夫のさんこ、夜中新月の色ふかく、二千里の外迄まはらせ、色絲ひかせてうたはして、おもしろくて、けうとい程にさわざぬ、爰に此大臣のお友だち、大文字の山さまといふを知るか、成ほどそれは深たことのお好な、一文字やの井筒大臣か、いかにもうき世の遊び事仕盡して萬にしやれた物ずき、酒がちな提重こしらへ、近所ののらを誘て都一番の月の見所を、我ら案内して見せ申さんと、島原の南なる揚屋の塀の下成島の中に酒事始て、爰の月のおもしろきこと、人はしらざりけるといはるゝこゑ、柏屋の二階に聞へ大臣耳ささく、今のこゑは儘に山ではないか、なんとしてそこにはゐるぞ、是へ參つておもしろき酒をのめと、詞をかけられしに、そこへゆけば氣がはつて慰に引口あり、心をそこになして爰での月見塀一重のちがい計、物のいらぬ遊興、ねざめ心やすしといへば、二かいも下もどつとわらふて興になる時、其座に八鹽ゐられしが、こゑかけて是は替た出掛やう、山さまうまさものをしんじますと一重に芋入て、帯にてさけられしを請取、近比お氣のついた

女郎さま、是忝なしとかへしさまに、前巾着より錢十五文取出し、重箱に入てかへされしに、八鹽はもみちを顔にちらし、赤面して此錢はとどはるれば、儘當年は一升か十五文かと存じたど、又大わらひに腹をいためし、其夜の事なるに、ある女郎好物のよしにて臺所にて芋をしたゝかせしめられ、口ぬぐふて二階へあがりさまに、箱階子の中ほどにて、取はづしての高鳴、座敷にひききわたり屋風はげしく、二かいのおのゝおどろき、女郎さまそふなか、あつばれ見事な秋の夕べかなといふ時、太鼓の吉介下にゐしが、やがて女郎の尻をつけば、手を合して拜まるゝ、すかさぬ男なればがてんでござるかど詞をかけて女郎をおろして吉助二かいにあがれば、末社の身として人もなげなるふるまいと、大せい立かさなつて胸をうたされて濟ぬ、いで其時のへをおいし其返報に加賀一疋當座にもらひ其上に此女郎の年のあく迄毎夜錢いらすによい目にあふ事、こんな身替りには我々とても立たしと、鬘の喜八が咄聞ば、又氣をしなさふ物でもなし、太鼓がきかすば、すいぶん男作つて生れつきのひくい鼻を引のぼして成共、見せつきをこしらへて、金後家に思ひつかるゝしかけすべし、さりと世をせきせばう、思ひ給ふな人々と、いさめて其夜をあかしけり。



げいせい色三味線 二

目録 江戸之巻

第一 月にも増る高雄の紅葉

色もてりそふ江戸鬼灯根引にして我宿の詠物房狂つゆわひは巾着のありざりおじ  
めの石のあながちな色好

第二 月にも花にも只濃紫

ふりもふつたり雪の肌にのりかゝつてもがき大臣戀は外になつて義理づめ  
の身請

第三 月より上に名は高松

吉原の噂いざ事とはん都鳥飛より早き二挺立は色狂ひの重寶けいたくんだり計  
案らしき大臣



第四 月に彈はじる琴浦が三味

ひつかけてのひ酒の上の約束當にならぬ事實正明白二半な手形色は勝山情  
はふかき海におよぎかゝる大臣

第五 月に薄雲かゝる情

身請の後の京上り名所の數／＼おもしろい夫婦中ながめは小倉山定家にも  
おそろぬ小歌知り

第一 月にも増る高雄の紅葉

智恵をやめて一時成共化禮徳

月花に心をよする歌人も梅が香を櫻の花にははせ、柳の枝に咲せて見たきねがひ、いづれよい事はそらはぬものなり、男はすぐれて然も分の道にかしこく、心も賤しからずして女郎にかけたらば、初會から打とけ、二度めには門までおくりて、人にもひけらかすべき器量の男は、揚屋に近付さへなく、霧から寝ておもしろい酔を知らず、又ぶ男にして片言まじりに物いふ親仁、金の威光で歴れきの太夫に足さすらせ、宿のかゝに酒つがせねながらのむもあるぞかし、爰を以て叶はぬ浮世と申なり、されば昔より、風俗器量は島原の女郎にして、吉原のはりを持せ、難波の九軒であそびなば、あつた物ではあるまじと、三ヶの津の色里をかけめぐり、色道一遍上人といふ樂坊主藤澤を越て江戸に下りしに、吉原はさびしく見へて、内證のはんじやう、とかく金澤山な所ゆゑなり、さるによつて女郎の心ざし、おのづからつよくなりぬ、すべて遊女は其時／＼の能男次第にて、一しほ色を増紅葉高雄はひまれつゝの太夫職風義いふ迄もなし、宿にかへりて衣裳仕替る事なく常也、いかにしても上方の太夫のならぬ事なり、あげやの晝をつとめ、身仕舞に、歸るに對の禿に



三味線を、はさみ箱のごとくにかたげさせて、二行に先へあゆませ其身は道中ゆたかに、しれる人にも詞かけず、帯ひなだかにして、身をすへてのあしどり、ねむれるほどしづかに、くらゐをとつて、からくり人形の、歩行ごとし、あどをなへは遣手でのこわいやつが、いつとても水へいらぬ布子着て、夕日にまがふあかまへだれか、はやきは、太夫とおなじ顔して、練てゆくもおかし、扱宿ちかくなれば、つれたる六尺を先へはしらせ。門口より高尾さまおかへりと、はやり醫者の宿歸りのごとく、ばつとしたる事、是こそ本の太夫なれ、爰に神風や伊勢町に數年わづかな錢見せ出し、壹貫と買にすれば先づ三百渡して残り追付跡から進ませふと、其銀とつて近所をどびめぐりて、やうく七百の錢才覺するほどな、せはしき世渡にも、戀は分別の外にして淺草の觀音參りの友にさそはれ、三谷に行て前巾着

りき、扱取あつめて拾々にたらぬ銀も皆になつて、腰まはりに氣遣なく、うつかりと辻に立て、れきれきの太夫達のあげやがへりを見渡せば、花ももみぢもひとつにかためし、高尾

を聞きだめ、手遠き戀の思ひ立雲にかけはし霞にちどりあしして、其日は宿に歸り、必竟銀次第で埒のあく戀とは知てありながら、商の元手さへ、かすかな身をして、いろく分別して見れ共、天から降す地からもわかすとかく此身で此世の御げんかないがたしと、人のしらぬ涙をながし、所詮ながらへてゐるゆるにかゝるうき事もありと戸棚より脇差取出し思切てぬいては見たれ共、どうやら小きみわろく、いやく死でから此戀の便りには、ならずと、まづ刀物をさやにおさめたが智慧をいだし、むかしより叶はぬ事を神にいのるに、手前の信心次第にて成就せぬといふ事なし、先づ銀さへあれば自由に埒のあく戀なれば戀の元は銀なれば福の神をいのり祈て見んと、淺草のいなりの社に日參、追付お影にて何ほどつかふても尾の出ぬほどの身體しんたいになりて、背のはげたる女郎買、鳥居を越し粹こつひと、世の人のうらやましがるほどになしてたびたまへと、ちいさき鳥居をこしらへ、毎日是を立置かんたなくだき、半年ばかり祈しうちに、高尾は誰か根引にして、里はもみぢなき三浦の、秋の夕暮さびしかりしが、又めづらかなる花むらさきに、色ぶかい男共がさはぎて、いせんかはらぬはんじやうと、御町知がはなしを聞て、はつとむねせまり、さりとは其君ゆるにこそ、此社へもあゆみをはこび、さまざま心をつくせし事よ、今は浮世に片時もよろついでゐる事、ふつつりといやと、世を見かぎり、煮賣する家に入て、一盃の



ふでの上に、最期きはむべしと、片陰のはたごやに立寄、小半酒を冷にて見しらし、ほろほろ酔の來るとき、むかふよりどうもいわれぬ美形、人に見られたき風情もなく、くろはぶたへの紋なしに、龍門の中は、帯、目たぬやうにて目にたち、成程かまはぬあゆみぶりなれ共上かへの蹴出し腰のひねり、すあしにわら草履のいたりせんさく、いづれかしほらしからざる所なし、是はと死に覺悟の男も、色には目がつき、ちかよるをよふ見るほどたれやら見たおもかげと、思い出す時、かの女こゑをかけて、助さま私を見知てかといふ成程見ましたお顔なれ共、どこでお近づきになりしや、急にはおもひ出されぬと申せば朝夕戀したふてくだんすには似やわす、戀人さへ見知らいで、あのうつない男め、これ高尾が里をはなれ出し姿なるはと取つく、是はうれしの俤と、天にもものぼり助四郎、手の舞足のふみつけ所をわすれて、悦ぶ事大方ならずして、是への御來迎は、いづれの衆生をすくはんためにかと、とひまいらすればおろかや御身、我事を戀にして此社にあゆみをはこびいのらるゝよし、ある夜の夢に稻荷大明神枕にたゝせ給ひ、あらたにつけてのたまはく錢もたす太夫をたゞといふ、ふしやうながらねがひ事、むりとはしれてありながら、神の役なれば、是もかなへてやらねばならず、汝急かの男にま見へ、一夜ちぎりをこめてとらせよとの御事、則ぬしさまに、夢物語をいたしぬれば、戀は互なれば情をかけてやれど、すこ

しのおいとま、うれしく、是迄しのび参りたり、さいはひ此邊に我たのみし方の、遊山屋しきあれば、是へともないゆるりと御げんになりましたと、助をともない一町ほどゆけば日比は見なれぬ竹一村のかまへ見た所はさもなく、門に入てびやしき、高尾あないして、幾間かながめゆくに、是れこそ極樂の出店なるべし、ひとつゝ氣をつくるに、築山の物すきに、たくみに石をなをし、三谷といふ縁をとりて、三つの谷をしつらひ、常は此三谷の影にあそぶと見へたり、扱座敷になをれば、高尾は勝手に入て、しばらくして、有し御町の姿にて、鬢切したる女小姓、七八人左右につれてゆるぎ出られ、先づお盃とあれば、畏つて次の間にひかへし艶女、こがねの盃銀のかんなべ持て参りて、酒事を始おなぐさみにとて琴しやみせん音をつくし、小歌敷を聞て心もうきたち、氣ものぼる程名の本をどめし床道具取出せしに、其美なる事、つゝに名も聞ぬ唐絹、此夜具の中へすくといられて、

れば、うれし過てふしぎに思ひ是はあんまりうますぎたる事、もしや晝狐にばかされはせぬかと、心に心經となへまゆげをぬらせば、白むくきたる太夫と見へしは、忽白狐となつ



て高尾といふ尾を出して、社の方へかくれぬ、極楽とおもひし大座敷は、靡かけたる水ちや屋の休しよ机まきなり、扱は大明神の御利生有がたし、はじめからかくとしらば、酒事おきて先はれぬ小才覺出して、眉毛をぬらさふよりは、ぬらさずにあて、いつ迄もばかされた方が徳ぞかし、しかし茶菓子に、しんこのやうな物が出したがと、今思ひ出して、むねをわるがるもおかし、とかく佛神の力にも、銀づくの事はかなはぬと見へたり、此男もいなりへ日参をやめて、家業に是程精を出さばちかみちに利を得る事も有べしと、大笑ひになつて日待伽のねぶりをさましぬ。

第二二月にも花にも只濃紫

百三十里戀をかせぎに下り大臣

武者ぶりよくむまれついで、あんつう持て浮世を隙ひまにしてあそばさし今なりと、萬にこのの缺ぬ持丸長次とて、上方にての分知わんし、難波の色いろのよしあしを見つくし、都の花も實もある男と、西島にてもちいられ、二ヶの太夫を手に入れ自慢して、是より名にきし、武藏野の色ふかき小紫を見に下り、三谷あないのために吉原雀の茂吉といふ御町知を先に立て、其外

京大阪の口利くち末社共に、皆定紋のそろへ小袖をきせて、此度此里始て一見、萬大形に宿へこがねの花をふらし、かしらから大たばに出て、當流の手をつくしたる料理、せりり箸して亭主が氣を付し初物もかまはず、諸事引こなせば、いかなる女郎も位をのまれ、あちらこちらになつて、おのづから身に嗜たしなの出来て、見をどされぬ氣づかひせらるべきに、さすが高上成事を見つくせし小紫はごあつて、さらに、わろびれたる體なく、詞すくなに大や



とても大臣もがいて素もどりいたし、どうやうなりそふな物と、ふらるゝにしたがい、今度はくど心ひかれて、通ふもかよふ、ふるも振、ついで廿四日といふものは、物の見事に誠の分をたてざりしが廿五日めにおよんで、大臣氣をつかして、打うらみ申けるは我はるゝの所を越て爰に來り大事の銀をなげうち心をつくすも、そなたをおもふゆるならずや、それに近比むごきしかた、それも馴なじみての上に、互の思ひあまりて〇〇などで、かふした首尾ならばおかしき事もあるべし、然るに初會よりけふ迄つゝに誠あるお情にあづからず、是は一向我等に死ねとの事か、それは太夫さま共おぼへぬむごき御事と、實事を申出せば、太夫細返答なく、殿ぶりはすいた風なれ共おそらくあぢをやるとおぼしめす、一座のしこないやなり、誠我事おぼしめさば、我心のこくる迄かよひ給へど、はなれ切たる詞に、大臣けうをさまし、然らばけふより女郎替てあそぶべしといへば、それはごふなり共、御心まかせ上方の、もの和な女郎を、こなたたまふ土氣のおちぬあいだは、打とげ參らする事いやよと床柱にもたれかゝりて顔をそむけ、心を臍の下に納て、すこしもさはぎ給ぬ風情、惟持のお内儀さま見る心地上方とはかくべつ、ぐあいちがいて手だれの大臣、此はりのつよきに弓矢八幡きかぬ氣ざしもたよわく成て、自然と我方より機嫌取やうになつて位取事も上手ごかしも、中々およばず、又分もなふ宿り歸りて、茲の太夫

を手に入て、心のごとくまはす大臣あらば、ちかづきになりて、女郎の意氣方買手の仕平懐尋き、たしと吉原雀の茂吉に、せんぎさせけるに、三木といへる三野第一の大臣、御町我物にして今出の色知、是こそ好む友よと、初對面から互に心安申合、いざ是からといふしほの、引ぬ氣な男共二挺立の舟をいそがせ、目ふる間に悪所のがり場、船頭共に太儀くど詞のこして、つねのあげやに入、けふはめづらしき一座、下り大臣のぼらして、是迄誘引いたした、扱おなじみは、小紫ごのとや、お隙いりあらば太夫殿に内證申て、何ぞぞけふのお客へことばり申されこなたへ御來臨あらば、一しほ有がたからんと申參れといひ出すより萬のしなせ、上方とはかくべつなる事共すいぶん京であぢやり自慢の男、三木が幅に覆はれ、満月の前の星のひかりにて、影がなく、するほどの事、初心に見へて、我ながらおかしかりき、しばらく、色なき里の心地して、先づ何かなしに呑出して素人末社が半太夫ぶしの習のない上るり、悉皆染物やの繪本見るやうな事を語出して、ながく敷待うちのてんがうに、太夫が來るかこぬかと疊算、半にあたつて、七つの鐘のなるとき、すそ吹かへす紅裏、ばつとした姿にて太夫様御出、まづうれしし、こなたへと上座になせば、座する迄詞なくして、まづほつやりとわらい出し、さりとはかはつたお出あい、けふおやくそく申せしこなたの御客は、奥筋の頑な御方にて、おことばりも申がたき首尾な



大切なるお敵様たちなれば、さしあいの一座と遠慮して來ぬかと、上方のお客はかくべつ、先づこなさまの必こんな事に悪推わるいまはすお方故、いかふきにくい所をようよびにお越たな、そんな初心な太夫かとおもふて、廿四五度もあいました長次さまを、よふぞつれましてござんして、ちか比耻入ひぢりました、私が心の底の底までしつてゐながら、にくや男めと、三木がふとも、に、跡のつくほどつめつめせられ、痛ほど忝な過て、さすり／＼それは太夫の、粹ばまりといふ物、今日長次を同道せしは、一つはそちをおもふての事なり、そも／＼長次上方にて、小紫といふ名をきゝて戀にし、はるばるの海山をこへて、そなたにあはんため計に此里に來り、心をつくすを、いかに風義があはぬとて、廿四五ふるといふ事、情をしらぬむごきしかた、戀ねんたする我迄も心よからず、其上長次は上方一番の分知、且は京大阪のきこへも悪、けふは拙者が仲立いたし、心よく長次にあはせん爲つれたつて參つた、此心を無にして、我等手前をおもひやりて、あふまいなど、未熟な義、仰らるゝと、たちまちけふ切りといふ男、さあへんどうはと酒氣もなく、誠を申せば、太夫感涙をながし、それ程迄に私事をおぼしめさるゝ御心、鎌倉にひとりある母をせいもんに入れて、いかほどか／＼忝なし、長次さまをふりましたは、われこと聞およばれて、美君おほき京をすて、

はる／＼のお下りとの御事、今の世にはあんまりうそらしく、あたまからおもはれたいのしかけて、わるすいまはり、誠かうそかの御心底を見きわめんため、つれなくもおほくの日をふり參らせし悔しさ、何がさてそなたさま御一座の上は、あいませいでおきませふ

ごの事前後して、ひとへにうつゝのごとし、太夫も三木もきのどのあたまをかいて、二人がけふの心ざしの、無になる事を、かなしみ、酔のさめる薬などをなめさせて、つんばうに物いふごとく兩方よりさま／＼いひこめば、ぎよろりとして、人心地なれば、さりとは是非におよばぬ仕合、今宵は爰に留て、酔さめなば、あれが心になふやうに、なぐさめてくれらるべし、我等は是より歸ると立んとするを、太夫引とめ、けふ是迄の御誘引にて、御連といふ名があれば、貴様御一所にあらずしては、こんりんざいあふ事せぬと申切、しからばけふがかぎりじやが、中／＼たとへ此世は扱置、ながき來世まで、御げんならぬとて、御一座でなくしては、御合點の上なれ共、我身にしてはうしろぐらき事、ふつ／＼いやと心底きわめて申せば、三木も道理にせめられて、重ていふことのはもなき時、長次むく／＼とおきて、涙をながし、さりとは、お江戸の色遊びのいきかた、傾城買のせ



いじん共申べし、我も實は過ぬ酒に酔べきはづはなけれ共、兩人の心入を感じ態と正體なに、一つのねがいあり、迎の事に三木きいてたもるまいか、してやめての上のねがいは、さればその事、もちろん兩人の心底をかんじ一旦思ひきるとはいへど、戀慕の道はねふかきものなれば、此里に太夫をおきては、ねが賣物といふ心にて、又ふと心のまよふまい物でなし、ねがいと爰の事、貴殿太夫をけふの内に請出し、ながれの道をたつて、お内儀さまと人によばしてくれなば、我思ひすみやかにほれて、永く物おもふ事あるまじ、此ねがいを聞入す、りんじうきたなく心の残るべきやと、一夜はあはして其上の事など、深切過たる心づかひあらば、只今爰にて自害いたすと、刀物を取まはして、誠に思ひ切たるがんしよく、三木聞届爰はへたくろしういふ所にあらず、先我等の爲には十分よい事、ごもかくもと、則私宅へ事の自由にはたらく、山吹色の物を、馬二駄につけさせて、只今爰れと申つかはし、早速の身請情知りの寄合と、見し事を今申出し、女郎も、とりんぼうも、あまねく色道の鏡といいたしぬ。

### 第三 月より上に名は高松

散茶にふられて、のどのかわく男

世の中に無分別者と、銀の利ほどはきものはなしと、朝比奈の三郎が悪所銀の利におはれて、物前にはてん／＼こ舞鶴のひたれも汗にしはたれ、鐵の門は破れ共、銀なくては力業にも預り手形の判は破られすと、自慢の毘もちいみあがつて、當所のない銀をかならずつかひ給ふなど、九十三騎の親類中へすいぶんこりて語りしは尤ぞかし、今時は身體がらよりは遊び花麗になりて、思ひの外の仕過しおほし、其ために身體相應の遊びを、色里にも拵へおけば、細元手の人、太夫格子におよばぬ戀をせふよりは、氣ぼねのおれぬ散茶にたはふれ、又は近き比の仕出し、うめ茶で咽のかはきをやめ、當座拂の氣散じ、それか

も、御町のだしは各別なり、爰に本町傳馬町の棚に旦那の爲に成手代共十人計寄合、命の洗濯講といふをはじめ、先あたまに一人前より、金壹歩宛出し、是をもとだてとして、毎月壹人に三匁つゝ出し、格子女郎をまはり番に、一人宛買て慰ける是よりして、あたま掛



を、世間に枕掛と申は、此因縁と承る。又無盡といへるも、無なりをして、盡たがるものを、おなじ心の友打寄て講をとりむすび、つくさるゝほどに身上取立て、大盡にしてやるより發て、無盡共、又は戀頼母子共申ぞかし、其中に棚預りのすこし大氣なる男の申は逆も此講思ひたつからは、今少しの事なれば、太夫を買てなぐさむべしと、そろゝ奢を申出せば、成程それも取結ぶ前方に一相談いたせし事なり上方とちがい、爰の太夫職は、初會などには、身仕舞ぶらゝとして、やうゝ八つ前に、揚屋に来て、そこゝに盃まは買手の人替れは、いつれかあふも初會なれば、銀出しながら年中祕佛の光堂へ參つた、こへば、棚預り我をおり、さりと太夫といふもの、はした銀にてかはれぬ物と、今迄のを掛捨にして、講をのきける、いかさまそれ一つの思ひ入てゆく客に、初會なればとて、寢道具さへ出さず、すもどりさするは、何程か心残りにして、銀拂の時、養子親の借錢なすやうに思ひ、出しかねけるもことほりぞかし、とかく女郎は賣身なれば、其日の男に嬉が客も是より思ひ付、あの美しい姿の高家方の息女なら、金銀にてかなふべき物にはあらず、

是には何かおしからじと、ある程は參らせあげける、三浦の大助といへる、末社の老人申けるは、むかしの女郎は、何心もなくかたちをうるはしくつくるを專にして叶はぬ聲にても歌をうたひ、三筋の糸さへならせば、太夫とよばれて其日の男上戸なれば、酒おもしろく扱かはし、又は上るりすきなれば、いやながら、たびゝ聞なれし十二段の忍びの所、ゑいかんぶしのおかしげなるを、折ゝにしやみせん引かけ、是はこまかに御語りなさるゝなごそやしける、おもへば病人の伽するに、かはる事なくそれはゝ心のくるしみなるに今の世は又すいた男ぶりを氣にいらぬ顔をして位を取様々に心をなやませ、つとめなればこそ、こんな男に人中で、あはるゝものかとおもふほどのいやらしきにも、ひたゝどもつてまいり、身をそれが物になせるしかけ、たどへ天眼通を得られし羅漢も、一およぎはおよがさるゝ程のかしこさ、女郎の智慧の盛とは今此時かや、爰に三鳥三木とて二人の分知色道の傳受事迄しりぬいて、およそ三ヶの色里にかくれなし柳三木の内、川な草と申は、ながれの女のさそふ水あらばと、客次第に成を、ねのない草にたとへし事なり、おかさまの木といふは、松も根引にせられて、お内儀さまに成事、また三鳥の中の、よぶこ鳥と申は迎の男のこゑなどのやうに世間では申せど、それは傳受せぬ人のいふ事、利口な末社が上



方より、かすづけの生かつほを、もらいましてござる、是一種にて御出とよぶ時、かならずゆかぬ物なり、霜先の無心いはるゝはせつなきものと、また前方なる、素大臣衆へ大事を語りぬ、此三鳥といふ大臣、都の末社の名鳥、はじめて下り、此里にて十三替りをさへづりしを聞いて、ちか頃おもしろき色くごき、是珍鳥と悦びいさみ、爰の諸分を見せばやとおつとつて、京にない圖、二丁だちに打のせて、あれなる都鳥とは汝が事よといへば、あのごとく終には水が川へはまる事、打見にはゆたかなれ共、水の中にてあしごりのいそがしさ、我れ等の身上も、さりとはあの鳥にかはらず、内のくるしさと、はや耳ぞせう、爰の大臣はすいぶん氣ながうて、急に物やる心つかず、何事もそふ心得たがよしと、てきめんにもつて參て中々はげしき男氣、上方の大臣とは、各別のちがいと、口をあきけり、扱けふのしゆかうは都の名鳥といふ男を、上方の歴々の大臣に仕立、三谷の水共に、手をとらして一興と、三鳥三木申合て、其旨名鳥に申渡せば、かりそめながら色里にて、歴々の大臣になる事、萬事につけてむづかし、此成賃に上方へのぼる路金御意にかけられたらばと、はや欲を申せば、それこそ安き事と、三鳥ふどころより金子五兩を取出し、早速くれば悉なしと、紙入におさめ兩人がはさみ箱より、用意せし替衣裳出して、船中にて俄に、本大臣に作立、舟つけばおのゝあがりて、いつもの揚屋に行ば、皆待顔に、ばちお

とを、やめて、二かいよりおりるもの共は、兩人が常につれる若い者共、津輕才助、出額萬吉、平太蜘蛛の勘助、其外おかし中間共、お先へ參つて御出はおそし、今迄さわいでおりましたと、いづれも下座にかたまる、時に兩人の大臣、名鳥を正座になほし、あれらは拙者共が常に遊山所へめしつれて參る末社共なり、我々兩人同前におめかけられて下さるべしと、扱手をつゐていんぎんに申せば、才助をはじめ、いづれも旦那さへあのごとく、けつかう成御あいさつをなさるゝからは、たゞの御方にてはあまじと、一度にかうべを疊にすりつけ、まき舌にて御返事申、かくて三木宿のかゝ近くまねき、小ごゑになつて、あれなるは我等兩人をお引まはしなされ下さる、上方のさる御方さま、此度ふと、御下りあつて、ひそかに忍びの御遊山常の客とは各別なり、何事も都はやはらかにして、花車を專にする所なれば物ごとしめやかに、いづれ共さだめず、太夫格子を六七人つかめと小倉、勝山、初尾、大橋、きてう、八重霧、山の井、まじりに酒も大かた成時迄、名鳥も上方にてよい事見つくせしものしなれば、成ほど大へいをさばきかねず、切々手水にたつて、あゝ水をくみ替させいさぎよくつかふ時山の井といふ女郎、私かけてあげませんと、杉びしやくととりて、かけ參らすればちか比氣のついたる女中、お名はといへば、山の井と申ことほりかな、むすぶ手の、雫ににぐる山の井の、あかでも人にと貫之がよみし歌の心にもか



ない侍るいづれ俊成卿の忠峯が有明の歌にも、おさくおどるまじと稱美したまふ歌ほどあつて、幾度吟じてもおもしろしと、打あがつたる歌ばなしなど申出し、すいぶんあちをしこなす所へ勝手から宿の男が、丸裸になつて總身を金箔でだみて、其まゝこがねの佛の奉加くといざりて罷出る、是は一興なりと皆くわらへば、今朝朝酒にたべよい、おもての二かいからおちまして、總身をしたゝかに打まして、難儀いたせしを、金は打身の薬とて臺所で皆がよつて、かやうに此世から、佛にいたしてくれましたれ共、奉公を引て養生いたす飯代はんだいの奉加く、無遠慮に座敷をいざりまはる、是はふびん成義、今日の大取付てなげきを申せ酒興の上なれば、ゆるさるゝぞ、お懐へ手を入、あつうかゝつて申請と、兩人ゆるせばかつにのり、是旦那おにげなされな、あたご白山手がわるいと、いざりながら袂にしがみ付、懐に手を入船中にもらいし、五兩の小判に手かくれば、名鳥せつなくこりやならぬと、女郎の手前も耻ず、大臣やめる是があつてこそと、置づきんをとれば、扱は今日の大取付はつくろい物かと、女郎未社はらのいたい程笑ふて又酒になして遊ぬ、裸佛は云じらけに成て、せめてびやくがうに成程、露がねにてもほしやと、いざつて勝手へはいるをよびかへし、兩人手前より一兩となげ出せば、近比しゆせうなお心ざし永代裸佛の藥代の施主にお成りなさるゝ事と、いたゞいて立て入ける、其の後三木は、中松やの高

松にふかくなれての上に、引かいで宿の花となして詠めくらしぬ、三鳥はかゝるよい事もせずして、むしやうと云物に成ていつも有ものゝやうにつかい捨、指引残らぬあけやへも内證手うすくなれば、おのづから身にひけて、我方からゆかれぬ氣に成、止は今なれ共一日も色を見ずにはゐられぬ性にて、やうく一ツ角才覺して、しりはらやますに散茶にかかり其まゝむかしの氣を出して、薄雲勝山など自由せし盛せいばなし、耳に立て散茶女郎むつ

の太夫格子にも、こんな事はせざりしに、むねん千萬とは思ひながら、世につれて一步のが外へ出ましたといたわれれば、それ程の事は覺がござるといふ、男今はかんにん袋の口をあけて是はれきくゝの太夫達のなさるゝ、ふるとやらいふ事でござるが、拙者初心者でござれば、さんちやとはふらぬといふ心なりと、いへる名によりて、ふられぬがてんで參つたが、散茶のふらるゝは、扱はいるまど御出なさるゝかといへば、私が名をうす雪と申せば振ますと云、近比つめたい心いき、是は北國筋の大雪よりは、つよいふりやう、ちと



ちやにさへふるゝ身に成くたりて、無用の色ぐるひと、我どよく／＼得道して、もはや今日切と心せいもん立しが明れば又身をつかみ立るやうに思はれて人目も耻す通ひけるが後には何に成て、いづくへ行しか果をしらす、さればむかしの薄雲花鳥など打よりてかしこなすぐれたる、つとめ物語のついでに、心の眞の異見をきくに、それはさもこそ有べけれ、總じて買手俄につかいかさかる時は、やがてともし火のきゆる戀の闇路とは、しれてかなしく、其人いとしく、御宿の不首尾をわけんして、少しは遠ざかるやうにしかけぬるは、神ぞ神ぞみじん偽りのなき所なれ共、男はあしく聞なし、猶しきつて毎日出、ことによつて外の女郎に替りて、こなたへ見せる全盛に、せいでもくるしからぬ大さわざに、程なく身體たゝみければ、是計によい程といふ程はなし、とかくとらるゝ程は、ばた／＼と取て仕廻、まだしき時に分別さすれば、指替の一腰も、茶入の一ツものこる物ぞかし、べんべんどやりくりする内に、一色／＼皆になし、手と身とに成てのおさまりは、お札おさめの下組、願人の袋持坊主になれるより外はなし、よく心へて深入せぬが粹なりと、すいぶん戀に取つめられし男のかたりし。

第四 月に彈る琴浦が三味

酒につよき事間鍋の綱

女郎は昔と替り一座かしこく酒事各別あちやつて、うそも男のすけるやうに云て慰に成事今ぞかし、され共つとめ日の外、物前の無心、我も人もいそがはしき中へ、迷惑ながら商賣のさし引は捨置、色町のつけとけ、身の一大事とおぼへぬ、是ひとりにかぎらず、此道に足を踏込て深入をする人なみぞかし、茲に桃町に、清酒商賣をするものありけり、其身じやま上戸なれば、余所へ買にやらず、年中呑だけをのびにして、朝暮酒のかすか成世渡此酒家のあるじが、むかしをしれる人のいへるは、あれは生國宇津の宮にて、彌三郎といゑる大臣の果なり、今こそあれなれ、いせんはあんなつう過分にもつてひらいて花をやつたる男其時は三浦のことうらに、うらなくちぎり、互に命切と申かはして、かよはぬ日はなし、一日あはねば、女郎も思ひにしづみ、晝夜に十二の一時文、もしや御心地にてもあしきやと、外のつとめも中々心にそます、名のたつほどに思ひあいが、かゝるふかき中も、かはればかはる川の瀬と、うわき男の心は一時のうちをしらす、比は七月始つた、そろ／＼秋風の吹て來る時、ある女郎にはれかゝつてひそかに宿をたのみ、文していろ／＼とぞけ



共、御心ざしはうれしけれ共、ことうら様のおぼしめしもめいわく、此戀さらりと御やめ下さるべきとの返事、是は一事をり女郎の作法なれば、かうあるはずとは元來合點してほれ出したものなれば、今さらやめる男でない、此戀首尾能取持なば、ごなたでも小判の山を築て急度御禮申事ちやと、宿の夫婦若いもの共末社迄申渡してふかくたのめば、末社の中にちかのといへる三寸局の年の明しを女房にもつて、女郎の心いきを知た顔する、鹽釜の長兵衛といふ男、彌三大臣のほれられし女郎に、きりや市左衛門方にて一谷の御客の御供せし時一座いたし、大酒の上にて、よき首尾を見合ひそかに彌三郎がおもはくをかたるに、私もあなたならばと、とびたつ斗おもひますれど、いかにしても琴浦様の手前あればと、大和心になつて、大きにやはらいたる口上、扱はなり寄たるあきないど、上手をつく

はくおぼしめすは、前方なるせんさく、戀はしがちと申せば、しやれてこなたからほれていた男、けふはめいよの出合、今からかわゆがらざ、つめるぞと、しらけて御あいなされなば、さりととは名譽の女郎と、情知の名をとりたまひ、今の間に、すさまじき御全盛見るやうなり、ことに此事宿の夫婦をはじめ、我々共迄ふかく隠密にいたせば、中々うろたへ

た神も御ぞんじない事と、口のすふなるほどあぢをやつていひまはせば、然ば外へさたさへなされぬ事ならば、ひそかに彌三さまにあふてしんじません、此心底御つたへたのむとあれば、長兵衛悦び其座を、そこ〜につとめ、其日の御客に御いとま申、すぐに彌三郎方へ参りて、旦那小判の山をおつきなされ、仕おふせて参りましたと、いばらきがかいなを取りしほどのいきほひも、酒きげんにて、かななべのつなといふつわものと、きおいかかつて申せば、大臣折ふし末社をあつめて、御町ばなして、無色の酒ものめるものちやとよつほどのきげんなりしが、長兵衛が只今の口上、何共其意を得られず、いかにしても、思ふたよりなびき様早速なれば、あはぬ内には小判の山も築れず、そのよい返事のあたゝまりのさめぬうちに、ちががなくいつ比あふてくれるべきとの、大夫自筆のたしかな手形とつて参れ、さふないうちは汝が詞たのまれずと、忠が不忠になつて、何とやら、つものやうに思ひ入れ、申出してもとねにしかね、爰は一生の大事の場と心をしづめ成程太夫様に、御好の通かゝせませて参りません、其替りには、又旦那からも、お手形取て参たらば、小判何ほど下さるべきと御墨付を頂戴仕たいと申、是はよい念の入所、いかに書てつかはずべし、十日より内にあはふとならば金子五十兩取すべし、廿日の内ならば卅兩、來月へかゝらば十兩、それより延なば、此手形反古たるべしと、早速書てたびければ、長



兵衛は手形給りて、御前を立て出けるが、立歸りかたくは、我心をみちのくの會津の爐にあらね共、ながれを立る女郎に、好の手形をかへせずは、二度太鼓持せぬ法もあれと、荒言はいて宿にかへり、先かゝに酒のかん申付、きげんよくして、人の仕合は何時なをらふもしれぬものぢや、物前とさへいへば出違、そなたに斗りくらうさするに、今度はうちに居て、當前の半はおいて、古借錢まで拂て久ぶりにて掛乞の笑顔を見すべし、まづおつとつて、旦那から五十兩の御合力ちがいのない所は、如件と手形を出してただかせ、夫婦盆仕舞おちつたる心地にて、去年の鯖はちいさかつた、蓮の食の米は、白きにあきがない、今年餅米貳石斗買て、大屋殿のからうすかつて、前方から踏せおくべしと、萬大名氣になつて悦ぶ所へ、家主の若いもの、あんないなしに内入て、長兵殿ふしぎに内にござる、いつ参りてもお留守とあつて、大分宿賃のたまりの算用をなされぬ、それゆへ旦那腹立いたし、今日は右宿代をのこらす皆濟なさるゝか、さなくばけふの中に、家を明て何方へも御出なさるゝか、二つ一つの罫をつけに参つた、後程と申様な手のびなせんぎでござらぬ、お返事がわるふござれば、只今諸道具つまみ出し、請人方へはこばせ申と、にがりきつて申せば、徳右衛門殿それほごさびしうおつしやれずば、今時の棚借りはさつぱりとはすましますまい、成ほごわるうは承はらぬ、久々延引いたした代に、滞たは申すに及ば

す、先當年中の宿代は進ておきませふ、拙者もちと此比はよい仕合をいたし、歩にもまはる屋敷もござらば、もともいたさふかと存するほどの身になつてござれば、今迄の如在屋の長兵衛しゆとはおぼしめして下されな、後ほどそれへかりめなしに、宿代持参いたすべしといへば徳右衛門耳に入ず、こなたの後程と紺屋の明後日は、かんざふ彌平で、うけつけないと、かぶりふつて申、さりとほそれほど迄に御見たてにあづかる所、ちか頃心外に存すれ共、負たがじやうでござればせひにおよばぬ、我等偽り申さぬしは、先銀子もつて参る迄、是を代りに進置と、一腰をわたせば、徳右衛門とくとあらため、しからば必ちがいなふ、追付銀子御持参有べし、先それまでは此脇指我等預りおき申と、いとまこひしてかへりぬ、とかくさしあたつてせはしき方なれば、やつて仕舞て一腰を取戻し、其後三野へゆくべしと、思案極めて材木町の本曾屋の清平といふ、日頃目をかけらるゝ大臣、度々御無心申掛て、あいそをつかして此頃は、よびにも下されぬ共、分知にしてたのもしき御方と、かの大匠の許へゆき、大臣におめにかゝり、くだんの手形を取出し彌三郎の戀の次第、女郎の返事の様子具に語り、すいぶんわるい仕合にして、來月迄の中には、甘兩もらひますにはきわまつたるお手形、是を質に留おかれ來月迄金五兩御借となげきを申、清平手形をひらき見て、尤是に偽りはあるまじ、しかしその女郎儘に彌三にあはふと



いふに證據なければ、何共心もなき證文なり、五兩取替てさつた上に、もし其女郎、彌三にあはずば、勿論此書物反古となつて、現金出して損するものは我等壹人なり、こんな事に金を借ふよりは、請のない半季居の奉公人に、壹年分の先金借たが、まそつと儲さふな物じやといへば、成程女郎もあはるゝはづに、今日かたふ口をかため参りましたれ共、旦那念しやで、いよゝあはふとある、一札とつて参つたならば、逢日の極り次第に、此通りの金子くれらるべき證文にて、只今はよりすぐに、此女郎に一札かゝせて参ります、此一札さへ旦那へとつてしんすれば、私は金を早速もらいますけいやく、跡はあはれふともあはれすまい共、それから拙者かまひませぬと申、しからば此方より手代を壹人、汝に付て、三谷につかはし、其女郎のくちもきかし、一札も見せての上に、いかにも借てとらすべしとあれば、是はかたじけなき御事やと悦びいさみ、木曾屋の手代と同道し吉原に行ば、はや暮におよびて、きりやのお客もお歸りなされ、太夫様も身仕舞にお宿へござつたが、今晚は鎌倉やへ御出のよし、市左衛門方の男が申、扱はと鎌倉や方に行て、先お内儀に對面し、かの女郎の事を聞ば、今方御出にて座敷にござりますとの事、女郎のおためによい事申に参つた、ちよと是迄よびまして下されといへば、心得たどて早速通すれば、自由に立ふりして勝手に入て、是は鹽釜殿なんとしてござんしたと立ながらのあいさつ、

先下にござりませ書おはせられました、深切の段々彌三さまへあたゝまりのさめぬうちに、すぐに持て参つてきかしましたれば、お悦び共満足共、神八幡よねんはござりませなんだ、しかし全盛の御身なれば、ふと其内に引かいてのける客が、あるまいものでなし、しからばこがれ死に、しなふもしれず、とかく情の上からなれば、とても事に急なる御げんを頼み奉るとの御返事がてら御使に参りましたと少しでもはやきがねうちのあるやくそくなれば、太鼓をはやめて申かくる、女郎きよつとしたる顔つきにて、長兵衛殿はつがもない事いわんす、思ても見さんせ、彌三様は琴浦様とふかい事は、誰しらぬものはなし、其お方にそもやそも、ごふあはるゝ物でござる、こなたも太鼓もつて、此里へ年中はいりこふで居るやうにもないおろかな事に使用する人じや、それも琴浦様と口舌でもなされて、手がきれての上に、こなたから琴浦様へ、のかしやりやうの段々聞につかはし、付届すんでの上には、又あふもならないなれど、是共に取り持て、おなじみと中なをし元へもどすが、女郎の作法でござる、そんな事もわきまへすにようもゝ太鼓はなさるゝ、厚皮など目をすへて、はらを立らるゝ、是は以ての外の相違、けふひるこなた様には、沙汰さへなされずばひそかにあふてしんせふと、彌三様へおことづけを、大せいもんでおつしやつた、扱は我等をおなぶりなされたか、事によつては女をあいにて、せまい物でもござらぬと、大き



にせいで申せば、さりとて笑止や、先太鼓持は何が役めぞ、素お客、我儘大臣などのむりな事をいわんすか、又は色里の諸分をしらすに、なじみの女郎ありながら、此やうなあたばれなどあそばすを、ひそかにとめまし、其大臣の名の出ぬやうにさつしやるが、第一の役めでないか、既に大臣の仕方がわるければ、れきくくの太鼓衆がつきそひながら、不調法などこなた方外しからぬぞや、其上けふの御客はこなたもついでござつていさしやるとをり、一谷の蛇之助様といふて、朝から翌夜明迄のみつづけに、さんしてもきよろりととしてござる大上戸、其お相手になつて大分さによふて、うついで居た私をとらへて、さゝやかしやるとおもふたが、何いわんしたやら、何いふたやら、神ぞくおぼへませぬ、かきのうれんかけていさんす、米様たちさへ、それくにししやいはくりたまふ、まして私等身の上の事、すいもあまいもつているこなたの、たとへ酒興にいへばとて、誠にさんすが聞へませぬはて、かういふが無理じやおもふて、はらがたゞ公事に成共みやに成共、心次第になされ、エ、素人らしいといひ捨て、座敷へ立てゆかるれば、長兵衛あきれて今は悔ても埒のあかぬ手形を取出し、ひろげたりたんだりして、何共ぶしゆび千萬、木曾屋の手代見かねて、こんな所に長居は無益とて、ぐんなりとなつてゐる、長兵衛を引立門口へ出れば、やりてのかめが来るにゆきあふ、是は長兵衛様色がわるい、お内儀

様へ氣に入やうが過る物であらふと、わらへば、そんなよいきげんでないと、はら立さうな顔おかしや、けふ晝きりやにまそつと、おつとめなさるゝと、見事な女にあはしやる所を、ごかくはやきお歸りのこりおほし、私共は蛇之助様より、いびつなりな物ももらいましたと、よい事斗申てはいる、さてくは是程埒のあかぬ事に身をつかふて、現金でとれる鳥をにがしたと、中の町あたりではこしがぬけたと、こけそふなるをかへ、大門過て籠を才覺し、夜が来て終に今時分かへつたためしがないにさてと、なみだをながして宿にかへり、いよく證文役にたぬにきはまり、脇指一腰家主へ渡しただけの損となつて、家を立退金杉邊に、何をしておくるやらかすかなくらし、そのうち琴浦も彌三が心を見かざり、女郎の方から隙入申てあはざりしが、靈岸島の七二とやらに、請られ奥様となつて、三年つゞけて、年子に男子を三人迄もうけ、世に不足なき暮とかく人の身の上はしれぬものなり、彌三郎はいよくひしやうといふ物になつて、はじめの勝山に戀を仕替て、跡先の志案なしに、いかなく金子壹兩も残ぬほどにつかひ捨、古郷の宇津の宮も鼻持もならぬほど悪い首尾にてよせつけず、せひに及ぬ仕合、昔の悪所友達富田の酒大臣の御影を請ての酒商賣、是もまうけよりは大分呑で果、ふだん狸々のごとく酔て暮し、夜晝なしに、ねて花をやる、桃町に今あの姿はもましなるべし。



第五 月に薄雲かゝる情

銀際になつて酔のさめる十人の殿原

世に心もどなき物は鯉のわたくふと風吹に籠の中でたばこのむと密男のてがら咄しとなるべし、いはねばはらふくるゝとはいへど、たゞ何事もいわぬにこした事はなし、茲に政都とて唐人流のあんまとつたり、三味引たりして、大臣といふ大鳥の羽がいの下にてそだつ座頭ありしが、旦那衆につれられて大方吉原にはいりこふで、すいぶんはらたてぬ坊じやと、女郎共にかわゆがられ、毎日食悦いたしぬ、ある女郎すこしたのむとて肩をぬぎかけ

や此事をはなせば、男ひでりはあるまじ、おのれにそんなよい目をさする物か、偽り坊主がいひなしと、其後大臣共いひ合て慰所へつれてゆかざりければ、無用の手から咄しに其身の遊山をかくのみならず、日待にさへよばれぬほどになつて果けり、大臣の御きげんとつて世を渡るものゝ心得わるきゆへぞかし、太鼓の智慧だてすると、色宿の亭主が、客に

大へいなどは、皆うつけの沙汰にして、是をよいとは申されず、とかく色の道にかゝつて、身をすぐる人利發を止て、たらぬかほして大臣にまかれるが上手なり、都の色茶屋の亭主にすいぶん智慧自慢して、客御出といへばくわしやおしのけて罷出、是は旦那よい衣裳付でござります然し素見る茶は、今時世間にはやり過て、我等がやうな粹中間の目にしみます、とかくいつ見ても、山の端染に、なゝこ織の羽織でなければ本大臣とはいわれませぬ、ちと物ずきを替てごらうじませと、客のおかけですぐる奴が、来るほどの大臣を、おしこなして、是は三四様には此頃御出を見かけませなんだ、盆前が近いとおぼしめての、身用心と存る、そんなちいさい心では磯せゝりも御無用と、まだ座敷へもあがらぬ先に赤面させける、世間はひろしこんな所に、何が見込あつて、結句外よりははやりぬと、此茶屋で打こまれしもの、江戸に來ての物語、聞ば爰元にもそれに毛頭違ぬ末社あり、あく迄粹だてをいたし、大臣高ふのぼれば、旦那の余程よい所あれど、折々あのせんしやうでくさると、しかも大勢のつきあいの中で、たかゝと申、女郎勝手ばいりをしげくして出れば、節々勝手への御見舞、酢かけの酌に湯づけ食は、必あたる物でござりますと、よういふかほにて太鼓の口から、ばちのあたつたる事と、皆人にくみてつれざりしが、今見れば所々の開帳場へ出て、古編笠着て、大臣粹に成やうの相傳書とて、何やら封たる物を賣て



口を過ける、何をか書て置けるやと、と、のへみれば、粹には金ばかりつかふてなるものにあらず、はじめから事知りの末社をつれて、諸事はが粹なるしこなしを見ならい、それに氣をつくれれば、つい粹に成事なり、麒麟の尾に取つく蠅は、一日に千里をゆくがごとし、ひしやうに金をまきちらし、影でわらはれたまふなくと、扱もおのれが太鞍持た時、智恵だけをいたして、夫がかいになつて、今あのままになりても、まだかしこだての止めこそ笑止なれ、何ほど末社が粹なればとて太鞍のざはいを、大臣が見習ふて何の役に立べき太事の粹と申は無欲な顔して大臣に思ひつかれ、あなたから心の付様に仕掛るが粹なり、こんな事大臣が知て、其心になつてよいものか、まだ粹な女郎にあふたらば、馴てから酒事のおもしろいはずみを見おぼへ座配も能、氣もこなれて自然と粹に成事もあるべし、しかし必竟此道の極意は只金銀なり、かならず粹になつて色道においては、よくたれんしたる男、ゑては揚屋の門を、夜るも編笠着て、とあるやうなおほきなり、然ればいづれもあんまり、粹に成と、かねが皆になるとが一時じやと大笑ひいたせば、其中に大商人の心の廣き、むさしの、色里、たてよこ文字やりてのはつが、私金の取手おき所迄おぼへたる男のいへるは、粹にもせよ家暮にもせよ、とかく銀始末しては、片時もおもしろげのない所なり、世間に商がないといへど、爰のぐはらりとしたる事、神鳴も虎の皮のふん

どしどし掛、太鞍打ては大豆買氣になり、さんちやの見せかけ姿を、ながめて、あはれ一角あらば、今宵一夜の稻妻にせんと、天にかへるさをわすれて、終に天竺牢人となる太鞍のかはゆい事なり、いわんや地をあゆむ人間、たま／＼せんせいの世に生まれ、金銀づくでなる戀を、おもふまゝせぬは無念なり、色里も次第に銀のくらくらいつめに成ける、此ほど家質に銀かるさへ大方のぎんみにてはかさゝりしに、爰でつかふ銀はどこで借だしてつかひけるぞ、世にない物かとおもへば、たくさんに成物は銀ぞかし、此まへ吉原の太夫其身の重さを目替にして代銀渡し請出しけるさへ、世界の取沙汰、又もなき事といひしに、今の世の薄雲、すいぶん花車づくりな女郎にて、十三貫目はありなしの姿を、金木の三郎重家といふ大臣、金子千兩にての身請銀につもれば六拾貫目なり、五度目にかけての銀子なり、時代とて是にもさのみ肝をつぶさず此大臣薄雲請出して、貳年半目に算用して右の六拾貫目あげづめにして相濟、今よりすへ／＼大分の銀まうけとよろこび、一日も長生するが徳と、すいぶん身の養生を専にして、浮世をしまふたやの氣さんじは、薄雲ねがいにて上方見度のよし、それこそよい氣のばしなりとて、同道にて都にのぼり、祇園清水嵯峨あたご土器なげも、くるわにて、聞しよりは興あるながめ、頭は春ながらむかし傍輩に、聞なれし名なればゆかし、高雄に立寄紅葉の秋を思ひやり、なき名のみ、高雄の書といひ



たつると、太夫古歌を思ひ出れば、大臣取あへず、君はあたごの、みねの薄雲と、かゝる花車なる事のみ申て、毎日諸所に出かけ、よい中の詠歩行、又なきたのしみと、聞傳てうらやみぬ、此大臣の舍弟龜井の六郎三といふ男、是また兄にまけぬ大臣、ことさら若くして、氣盛なれば人の下手につく事をせず、萬事上かさにばつとしたる遊び手、不斷末社十人づゝめしつれ、是を十人の殿ばらと名づけ、其身は小栗判官と名のりかけての大酒、鬼かげといふ口のこはいやり手にも、小判の轡をかけぬれば、前ひざおりに忝ないを二三百も申ぬ、けふも又れいの殿原ともない、いつもふせたやにて晝からのみ出し、夜に入ほご酒事染て、よいきげん過る時、禿蠟燭のしんをさるとて、あやまつて火を消、勝手へどもしにゆくうちに、池の庄助といふ太鞍がしら、すかさぬ男にて、酔まぎれに、大臣かわゆ

ごくをにくや男めと、そばなる煙草盆引よせ、させるのがんくび引ぬき、たばこのやにを左の頬へしたゝかつけて、大臣へ此の品をひそかにさゝやき、燭火あきらかにならば、左の頬先にたばこのやにのつきたる男こそ、私を迷惑がらせしものと、よういふ顔してつけければ、大臣思はれけるは、誠にうつくしい上を、我人のすくやうにこしらへたる色なれば、人として是れにまよはぬはなきはづを太鞍持やくと、家業を大事に思へばこそかんに

んもいたせ、十盃きげんの上では李下に冠を整さずとつゝしみたまふ聖人も、人の買女郎に、興風だきつかれまいものでなし、こんな所をあらためぬが、分知の第一と、座中の末社共にむかふて、なんぢら此暗き中に、左の頬さきに、はやくたばこのやにをぬつたものに、金子一角はづむべし、おそきとならぬぞとの給ふ、こゑを聞と、面々に長徳寺が仕事と左の頬先に手ばやくやにをぬつて、此しむ事一步には安い物じやと、大笑ひする所へ、勝手より火をともし參つて、蠟燭へうつせば、一座夜のあけたることく、いづれも我先に罷出、私は左の頬はのこらす念入れてぬつたと申せば、拙者は左のかけがへに右の頬まで此ごとくと、つらを出してかしまる、是も一興と約束のごとく、壹角宛下さるゝ、何になる事やらと、人此事をしらす過けり、其後大臣正月の事、氣さくにうけあいたまへど、重手代異見最中の時にて、手前銀自由ならざれば、日頃の末社共をひそかにめされ、此銀才覺の内談、いづれもかの里へ御供申時の様に、見得たとは申さず、先承り合て御返事申上んと、猿丸太夫の顔して、何共明りの見えぬ談合、大臣きのどくのあたまをわつてあんじられしに、さあないだんになつては、前巾着に二朱が一つなかりき、末社がしらの、池の庄助、御笑止に存たてまつり、諸方をいたてんのごとく聞ありき、色々智慧を出して、小田原町より調ふ口を聞出し、命にかけて働きやうく才覺いたし、正月買の間にあはし進ければ、



大臣喜悅かぎりもなく、十人の中にすぐれて、汝壹人此はたらき末に至りて家買でもらひ  
たき願ひ有やとせらるれば、いかなくさやうの願ひ存もよらず、いづぞやふせたや  
にて酔にうかれて、女郎のふところへ手を入、左の頬先へやにぬられし男なり、其時の  
御情を報じ奉らんと存てと、なみだをながして申上る、大臣此心をかんじ、手前よき首尾  
の時分かの女郎を請て下さるべきとの御企、近頃忝なき御事ながら、其女郎いかにしても  
其夜のしなし情あるとは申されず、勿論ほれてはおりますれど、下心いやと申す、それは  
粹なる汝には不了簡なるべし、我等ふびんがる内又汝がいふに任て、うしろ暗ひ事有ば、  
今以ていやといふ筈也、其時は我を大切におもふ心から、汝が心任にならぬ所、婦妻にし  
ては宿を出歩行太鞍の女房に、打てつけた事、留守の中に手むさい事があるまじ、ひらに  
持てとあらば、庄助重ねて申は、其夜の事大臣手前を思召て、拙者心のごとくなり給はぬ  
所はよし、然しそれもいやならばいやにて、我心ひとつにておさめおかる、筈なるを、ほ  
れたといふ男にしるしをつけて、旦那の耳に入る、心根、いかにしてもむごし情しらぬ也  
臣なれば、即座に隙下され、重ねてつれられぬには究た事、おもへはこそほれもいたせ、  
それをからきめを見せんとは戀しらすなり、畢竟拙者大臣よりまさつたるゑりの厚きもの  
にあらば、私銀の才覺男におぼしめして、其夜も情あるべきがいふても太鞍の身なれば

打てもたゞいても、物にならぬといふ所をがてんして、大臣への注進だて、先は欲のふか  
い心から也と、いやに極めて申せば、龜井も尤の事に思ふて、夫よりして女郎替て、今の  
小倉にあいそめ、かゝる太夫に今迄あはずに過ゆきし月日をおしみしも斷ぞかし、さかく  
千人の中にすぐれし所あればこそ、多くの數女の中より太夫職とは成給ふ也、色有て情あ  
おぼへし人の申ぬ。



けいせい色三味線 三

目録 大阪の巻

第一 梅も松も打交て大寄

九軒の遊は唐にもないぐはらりとした事。神鳴も心かける女師の臍くり金。  
胸もおどる盆前の付届

第二 梅よりすいた萩野が一風

たのしみは我宿の棚さがし。太夫手づから夜飾のあんばいうまいせんさく

第三 梅の花山に登り語る男

半太夫は歌よまぬ小町が錦。移りにけりな徒(五字缺)。とりあげられて天  
竺らうにん

第四 梅の花笠に降掛る村雨

目次



人並にない袖をふる道具や。ほり出しに運をひらく封じ文。手のよい(二字缺) 狂ひ戀が積て(七字缺)

第五 梅に名の鳥が啼東路の別

名につかはるゝ身は七重の膝をおつて八重霧にたのむ戀。日の本に様なき唐土が心いき

第六 梅の匂ひ吹わたる大橋

かゝり口の大きなせんしやうもの。五人一所に對の紋所つけておく。禿が才覺太夫のつけ智恵

第一 梅も松も打交ての大寄

郷ではくせつ宿では女夫いさかひ

色遊びのおもしろいといふは、今此時津浪打よする大湊、人の心も打ひらいて小道なる事をしらす、是所繁昌の故ぞかし、大氣にひまれつたといふても、まうけなくばおのづから遊びもちいさかるべきに、攝取の心覺へあればこそ、おつひらいたるせんさく、越後町扇風方の大寄、太夫は泉屋のみよしの、茨木やのことうら、かほる、丸やの小ふち、天職は背山、山の井、八重山、ありま、大崎、其外かこい女郎十九人、手のつくほど色絲彈て小歌は蚊のなくごとく禿共は手替りのおごりけいこ、正身の太神も岩戸をひらいて出たまふべしおもしろいといふは大抵の事なり、暮てはそれ／＼の床の取所、かゝるあげやの手廣き事餘所には見もせぬ事なり、此家のみにあらず、九軒の住吉やには、八鹽、江口、みやまぢ、小藤、浮舟、小太夫、名高い太夫職、かれこれ六人、梅はあり原、井筒、藤崎其外しらぬ鹿戀女郎五六人、次の間は遠柳風の小歌、利兵衛ぶしのかげ物揃、抑此御佛と申は、淨飯大王の御子悉陀太子と申せしが、十九歳にて御出家ありと語り出すより、さりとは釋迦は若い時から無分別な如來ではあつたぞ、此おもしろい事をすて、何のあてが



有てだんごせんへは夜ぬけにせられしぞ、其身大王の御子なれば、よもや金に事缺ての事ではあるまじと、酒きげんで申出せば、其座に坊主墮の西念といふ按摩めが申は、今の世界にも、金銀大分持ながら、此里のありがたき道をしらす、あたら日を談義参りしてくらし、無用の僧をやしない、または突鐘の寄進して、衆生に戀の別れをなげきかなしまず其罪のがれがたし、只慈悲心におもむくの第一は、死に一倍の請判をしてしんせまし、此所へそゝのはかして御供申て参つて、色にすゝむるを大善人とはいへりと、むかし衣かけて出飯の文となへて、食いたゞひてくふた時を知て居るものもあるに、時々商口を申て、旦那の御きげんを取ける、惣じてかやうのはんじやうの所に、つとめたまふ女郎は仕合ぞかし、常さへかくはやらせらるれば、物日はさぞお隙があるまじ、三ヶの津の内にては、此里の女郎斗は、借銀の事はおいて、年中によほごづゝのびがあるべし、へそくり銀があらば、ひそかに内證で歩をやすうしてかりたいと、萬にこまかい開帳場へ錢見せ出す、細元手の男大臣につれられて、酒呑をたのしみに、よいから参りて、なんの役にもたゝぬ事を歴々の太夫殿に尋かゝれば、あのいわんす事はいの、物日紋日役日をつとめてもらへばとて、其揚錢は親方の爲とこそなれ、私が徳にはならず、衣類の外の身ごしらへ、禿の仕出し、親里への合力、其外むかしにかわりて、人のしらぬ氏神せんさく、京の祇園會を大坂

にて渡し、堺うまれの女郎は大寺祭を喰て果され、新紋日十二日は三津寺やくし、廿八日は北野の石不動、是等迄賣日になりて、義理おもふての身あがり、ことさら近年世につれて、至り留木も、人のきゝしれる名の木を焼ねばならず、十種香源氏の道具、揚弓のながれ、讀でも二十一代集、宇治に壺をつかはし、見る事もならぬ能芝居の棧敷を取、しらぬ國の筑紫に石の鳥井がたつの、東の淺香山とやらに、裸形のあみだが出来るのと、見ぬ神佛の事迄、縁をもとめて奉加帳、いやとはいはれず信心なる顔つきして、一角づゝなげだすもかなし、それにかぎらず高ふはいわれませぬが、町よりわせる太鞍衆、染出しのゆかたなどごらるゝは、惜き心にもくからず、たゞ無理にてかなしきは、脇指をこしらへるとて、柄鯨をもらいかけらるゝ、女にかやうのめいわく度々なり、かゝる事にて勤のうち、太夫といわるゝほどの全盛なる女、私にかぎらず、皆借銀となるなれば、今時の女郎すいぶんもらはではすまぬ算用と、あり體を語るゝ、いかさまもあるべし、去年の七月十日の暮方に、さる女郎ねんごろなる宿小座敷に入て、あげやのかゝに十露盤をかせ、やりてに手帳を付させ、盆の事共を仕舞れしを、ふすまこしにきくに、其節の客七人ありしに皆無心いはるゝ程のなじみ、拾兩五兩三兩取あつめて、四十八兩もらはれしに、是にては中々不埒と、大方の拂は半分濟せとの内談、され共毎年のつかひ物、奈良晒は廿五疋



大儲二百三十指錢七貫素麴百把、宿の團五十本、ほうづき提燈三十八、火のたまがふつても調へずにはおかれず、太夫泡の外聞と、おつ取てやりてがいふ、聞にひつかしき付届、町屋にて手前よろしき人の、世間もつばらにするも是ほどの事にはあらず、色道なればこそ今此借かりの不自由なる銀を、やうはやる事なり、もろふて女郎の身にはつけず、とかく今程女郎のひつかしき事なし、義理は武士のごとく立て、内證さぞくるしかるべしと、氣をなくさめに参りて、世界のせばふなるやうな咄しを仕出し、次第に調子びくになつて三味の音たへ、聲賣女郎も小歌きげんはなくて、連歌座敷のごとく一座しめりて氣のつきる所に、其夜の大臣何か女郎とはなくしき口舌仕出し、とかく心底のみこまぬといふ時習の泪をこぼし、其上に小指切てなげつけ、跡は永々としたる恨、是はごうでも旦那が無理さふなと末社共取あつかひ、ざつと酒にして歸りしが、其中にかの錢見せ出すこまかい男、此口舌に氣を移して、大臣よりさきへぬけて内にもどり、酒きげんに内儀を呼つけ遊女のごとく零の口舌を思出して、今更我をにくからぬ心中ならば、指を切といひ出す、女房おどろき、夫婦となれる身のうち、いづれかこなたの物にあらずや、つがもない事とけうとい顔をすれば、ていしゆ眼色かへて、扱は此男をふると見へたり、そふした事なればなをさらさねば一ふんたゝす、さもなくば向後御めにかゝらぬ、只今爰を出て行、親の

許へ身あがりとやらをせよと、いよ／＼つとりて出れば、女心になしく、さりとはそなたに物がつゐてくるはすか、指がなふてはあすから仕事がならぬが、いかに女房なればとて、ひりなる事と啼出せば、そんな前方なる仕掛の泪などに、ふわたの男にあらず、ごふでも切といぢれば、あい借屋の親父其目をさまして、夜ふけての高聲只事にあらずと夜中に家主をたゝきおこし、借屋中八人、大屋殿を先たて、錢やの戸をたゝけば、女房泪ながらに、表を明てよい所へ御出、大ていの女夫いさかいにあらずと、始終を語れば、いづれも我をおり、とかく酒に酔れしものならん、何とぞ夫はなだめやうの有さふな物といづれも内に入て、色々いわるゝほごきかず、かやうにくるわ中一倍に、露顯致ては、なをなを切さではおかれずと、氣色替て申せば、家主智恵を出して、然らばそなたをおもふとの誓紙を内儀にかゝすべし、是にてかんにんしたまへと、さま／＼に詫れば、しからばおのおの仰にまかせ堪忍いたすべしと、女房に起請をかゝせ、其奥書に、右の通内義其方を思はれ候所實正明白也と、家主を始借屋中連判して渡せば、是ほど慥な起請は唐にも有まいとていしゆ悦て取て置ける。

## 第二 梅よりすいた萩野が一風



雪のはだへはばたいの障り

當流分里の興女、金つかふ人斗をよしとはせず、たとへ分限なる男も、前方なるを嫌い、徳のゆかぬ男の名代になつて、一座のさばけるにあひたがる事、勝手はともあれ世間は是なり、今時新地の茶屋女さへ、不便をかけてこまがねを取せ、京郡内の着物をしてとらす男の事は、さしにあふた時ばかり泣て見せて、浪世男の名の高いもの、軽口おしえて歸るは何の役に立ぬ事なるに、此男にあふた事を客毎に是非に咄しける勤の身は、内證の用に立男を、假ば片つらの耳がなく共、いふ事さへ聞てくるれば、たんといとしがる筈とおもへど、勤なればこそ、いやな男にもあふてはやられる、金でならぬ身ならば、不器量なるおそこは美男によい事斗してとられて無念度々成べきに、有難は金の威光で、一代揚枝つかはぬ口あわれまじ、小判にあふと思ひたまふゆへに、酒の上にもむかい氣の來ぬ事と、すいぶん世間へ出されぬ男の申侍る、爰に天滿に銀で自由自在に天神をまはす男有けり、ひまれつきふつゝかなる上に、近い比揚梅齋の出た跡一めんにくへて、面は一度むいたやうになつて雲紙を見るにひとしく、濱芝居の見せ物に出しさふな男と人皆磁螺大臣と申あへり是をよい事と心へ、伽羅之助といふ替名をやめて、いそらと申せば喜悅いたしぬ、ある時酒染て

末社共、よいきげんのあまりに、屏風をかこいて、其内へ旦那をおしこめ、いづれも屏風の口に立て、さあ〜今度海中で仕過しいたし、龍宮城を夜ぬけにして、始て此里へ出現いたした、磁螺と申島もの、毎日かるもといへる女郎を三つゝくふて命をつなぐ稀もの、さしあいじやと、座中どつといふて大笑ひ、皆する程の事大臣をつかふて、太鞍共が慰、是からいそらに裸でがきおどり所望と申出せば、酒が過たにゆるせといふを、不仕付など叱せひなく大臣裸になつて、がきおどりをいたせば、旦那踊の出來たいわゐに一角づゝいたさふと申せば、踊は何へんでもいたさふが是はゆるせと手をあはすを、太夫泡のござり前で、ひけて見ゆるとばやけば、せんかたなくて親の借錢なす様に、ふせうぶせうに一角づつとらしける、是はごうらはらなる事はあらじ、たとへば妾に内儀のきげん取て給仕して食くはさるゝに似り、いづれ世界はひろし、すいぶん取ぐるしい氣を取て、つれそふ女房のかくす事迄、人中でいわさせ、其上いやな酒のんで、ことさら大臣にわるい癖ありて、酒過ると其儘わる理窟を申出られ、其あげくに凡物ざんまひ、命勝負をこらへて、五六度も御供申て漸く二米一つ下さるゝ、是にもかたじけなひ百ほごいふていたゞくに、さりとてはいそらについてありく末社共果報過て追付太鞍冥加につきそふなものと、中間寄ての



是沙汰、かくおもなが成る大臣にあはるゝ女郎、嘸や心うかるべし、しかし今時女郎の氣に入大臣は、くらゐ斗とつて勝手にならぬ事いふにおよばず、逆もつとめの身なれば、二つ取には紋日役日にへらつかはず、勤てくれる男が氣骨がおれいでお爲によかるべし、随分しやれたる事自慢の人、大阪堺にもあまたあれど、あぢやりだてに皆になし、晝中には揚屋の前を得とをらぬ男多し、此比も難波一番の色男、始て女房をむかへしに、是等は遊女どちがい、一生の詠物なるに、難波一番の悪女、然もわきがくさく、ようもあのやうな物にそふてゐる事よと、近所の人我を折しに、又十貫目といふ敷銀の光りで、揚貴妃に見ゆなりとて疎略に思ふ筈はなしと、後家にかゝつて身體しなをしたる男の申侍る。爰に西の國にかくれなき男、松の位を根引にせし、十八公といふ大臣、しばらく當地に逗留して、扇屋の萩野をおもしろがり、四五會して何の事なく引拔都に住所をもとめ、月雪の朝、紅葉の暮にも萩野をながめ、萩の下露濡ふかく樂しみ此家にとすこし自慢して、雲は色川原の名取、器量も諸藝も、うちそろふたる具足屋といふ子を手池ていけにしておもしろく酒のさめると夫婦起て、紙燭しやくともしつれ臺所に出て、棚にさしかゝり、卵子五つ、赤貝もにる

ばかりにして是さいわいと、爐の火をおこして薄鍋をかけ、何もかも打入れて、此うまき事どふともいへすと、舌打して、女房共かにはよいかと、さしむかひに、さしつさゝれつさまんの戯れ、ひとしほ酔もおもしろかるべし、女郎請出しても、こんな事して暮してこそ、樂みもふかゝるべきに、根引にするとそのまゝ、紺の布子ふしこさせて、萬の鎧よろいを腰にさげさせ一文がつまみ菜をねぎらせ、味噌薪迄の世話さして、然もむかし語りし人にも、ゑんりよせず出てあいさつするなど、何としても其心は残る物を世間かまはずお内儀さまにする事、無分別の至り也、されば此萩野、夕霧についての上作もの、うつくしいといふて又くらべものなし、ある時座敷踊の仕舞、亂姿の暮方に、召替の浴衣腰ゆかたより下の一重も、けふの汗にとて、そこゝにとき捨て、行水の御裸身、白く妙にして、彼驪山宮かきりやまのみやの温泉をひかれしむかしの品ものも、中々此君にはおよぶまじ、さりとは此里の男共、ようは命がぎぞかし、此夕暮に九軒へ出入する、小料理のきいた六兵衛といふ男、ちかき比母親相果しが、死骨を高野へおさめよとの、遺言にまかせ、浮世の事共わすれて、目には泪、手には珠數持ながら、ふたり有子共が事はいひのこさず、火の用心と斗いひ捨、大方は出家心になつて、我家を立出、いとまごいがてら、留守の事もたのまんど、吉田屋喜左衛門方へ



に帳、さいふかたげて顯れ、大節季も今の事じやとわめく聲に、耳ないやつが聞こんで、ぐなりとなつて、それより心静に奥の院に納て下向致ぬ、草木心なしとは申せ共、大晦日の苦き事をば能辨へけると、しゆせうに存る。

### 第三 梅の花山に登り詰る男

晝寝の料理ごのみ喰ぬ先にさめる夢

商人の高利を取ながら元直でござりますと、澤山そふに誓文をたつる、傾城の誠なき心から起請書で、客をたらずも、品こそかはれそれ／＼の身過女郎にかざりて偽りいふやうに悪口いへるは無理うに也、すでに我人老人は正直にして、假にも虚つかぬものと、律義に覺てゐれど、年寄ほど偽りいふものはなし、寺參しては、今でもほつく往生とねがい、此苦界にうろ／＼との長生一日もはやく往生したいといわる、片手に、隠居の庭に柿の核を

植て、八年したらば孫共に木練の取飽さすべしと七明年成事をたくみ、常着る小袖も、けんぼうはよはきとて、花色袖をこのみ、子供が元服したを見て死ぬれば、もはや此世に思ひのこす事なければ、それからは人にあかれぬさきに、一時もはやう、たうとい所へ参りたしとのねがい、程なく月日立て息子成人して、元服いたせば、あれに嫁を取てと、其願ひもすらりとすめば、孫を見てからの念願孫が出れば彦が見たし、とかく死にとむないに極つたる事を、いわれぬ口さきで、往生をいそがる、虚がにくし、なせに天道次第にしてはおかれぬぞ、持佛堂の佛も、毎日の看經毎に、往生したきこの虚言は、さぞおかしうおぼしめさん、歴々の息子持し親仁、町へ譲り状を出さるるに、我等儀若萬一自然何方にて相果候共と、書るる心底おかし、若萬一を百貳百かかれても、死なずにある身ではないが、心見へてつたなし、世間に此類おほし、喧嘩の咄などするどて、子が事ではないが、爰をさられてといへるは、おろかにきこゆ、子が事といへば、そこに口があくべきか、しかも二本指た口から猶以見ぐるし、女郎のいひかたにしてはあどけなくしてやさしう聞へ侍る、此前八木やの最中といふ女郎、京屋の座敷に、堺の古七といふ大臣と、五月雨の日しつぼりとはなされしに、稻光しきりにして、九軒町もうごくほどの大神鳴、是はならぬと戸障子をさへせ、俄に蚊屋をつらせて、此内へにげこみ、兩耳ふさいで大臣は汗をなが



し、引舟女郎になげふしやめて、雲雷被掣電の文にふしをつけてうたはせ、太夫にも伽羅  
それる體なく、さしかけし戸を明て此鳴のおもしろさ、自由ならば毎日聞きたいと、栖  
輕が顔して、虚空をながめてゐられしを、神鳴が心玉のおそろしき女郎と見かぎり、それ  
より終にあはざりしが、神鳴は虫のわざにて、すぐれてこはがる人と、又さもなきとがあ  
る物ながら、先はすかぬものなれば、女郎衆はおそろしからず共、こはがる、體がよし  
惣じて女の武邊だて見ぐるしき物なり、とかく女郎はやさしうして、花車ながよし、すこ  
しよはきやうにいふ共、詞數なく、高聲せず、身をはづるを以て色有花共いへり、いかに  
なじみの大臣なればとて、敷と居ならび膳にむかひ、二の汁も替て、杉焼の目のせんざし  
て、鮎の焼物引つかゝゑて、うつくしい口をあるほどあいて、あたまからかぶらるゝは、い

へりなど、ついには戀もさむべし、只いつ迄も、今の行義にして、たごへ納戸では何をま  
いらふと、それは見ぬ事、客と一所に物まいらぬこそ見よけれ、いまの半太夫うつくしい

上にひすい所なく、歌よまぬ小町のごとし、打見にはおぼこなしだしにして、取入て見る  
ほごきつとした、おもしろい所のある女郎と、伊丹の大盃といふ男、はじめて御げんなり  
しより、ごふもうごきがとれず、毎日出かけて、引舟の小蝶のたはふれ、莊子が心よりも  
ひろくなつて、大鵬といふ大鳥、すいぶん高ふとんで、此里を我物にしてのあそび、未は  
金がらうす踏身にならふとまゝ、つかはふならば、あたまから、ぐわつたりとした遊び  
こそ心よけれど、寄程の末社共が算用なしに奢せけるほどに、二年半に大盃が身體のみ上  
て、一滴七十五粒のこまがねさへない身となりて伊丹を晝ぬけにして、玉造りの出ばなれ  
に、草の屋かりて世渡る種もなければ、深編笠に大脇指、日比ぬきあげたる額口、今似せ  
老人の爲と成り、家々に入て舌をなやして、作説、是は御合力買とて、壹文づゝが耳か  
き、揚枝のつきつけ賣、扱もはかざらぬ事に氣をつかして、新御靈の椽先に腰をかけてや  
すめば、其側に我にかわらぬ身體がらの男、何賣もの共見へず、あたらかせぎざかりに、  
幸子にはあらねど、いたづらに晝寝して、何をか夢みしやらんよいきげんのこゑして、て  
いしゆが物見たがましく、何も入らずに、鶏頭の葉のはしらかし汁、割するめにあらめ置合  
せたる酒びて、是れよりは古代青鷲鹽鴨増ぞかし、とかく手づまのきいたかるい料理より  
は、へたくろしう、うまきがよしと舌打してねごとを申、扱はきやつもあぢな事知過て、



あの體どうなづき、是はよい友と、ゆすりおこし、ねごとのしだいを語れば、さりとは起して、うらめしい此比喩ぬ料理を、すはつて、箸とつてくいかゝる所を、扱も残念く、と奥齒をならして申せば、先某方がむかしをかたれ、此身も半太夫をおもしろ過て、我ながら二年半に、ようも皆あける大盃といふ、伊丹の大臣のなれのはてじやと語れば、扱はさうか、むかしの像はなし、我等は扇屋の花山にのぼりつめし、こんだといふ大臣のおひがらしじやと、かたるほど咄しがあふて、それ去々年の春、扇風方の中二階で、おびたゞしき大笑のありし時、汝はおく座敷にゐたげな、其時のさはぎの次第を、あらあらかたりきかすべし、いで其比は花山によい鳥がかゝつて、茨木が方につかんで、其日もあはせず、是ではおかしからずとかく太夫もらへといへば、けふのお客は、まだふかき御なじみにあらねば、ならぬよしやりてが指心得ての返事にくし、其客はとせんさくするに、我等が手代に、長堀に見せを出し、らうそくと紙をあきなふもの、其一番めの倅なり、扱は拙者家來の太郎助の御あいなさるゝと、すこしせき心になれ共、是を口舌にすれば太夫がひける、何じややらしらぬが佛、明日は天王寺の薬師の縁日なればとて、八日ついで申てやれば、太郎助聞もあへず、十二日ついで愛におくとつもの、とかくは太夫が仕合、とてもかぎりのある男、急に埒明たも増と、張あいかけしに、人の埒のあかぬ

さきに、手前の埒がはやうあいて、此體に成たが、其日のおもしろさ、隙なる鹿斗十人取よせ、末社あつめて、勝手口にのうれんかけ、十筋の繩を十人の女郎にもたせ、是ぞ縁のひとり引あふてかたづくものを書付しに、先一番に、初野とたかまの傳助と、おの山と上繪屋の佐次兵衛と、其外きんご、ふなばし、おしほ、かづらき、夜のちぎりを晝中にみし

らに着て、むなひもを後でむすび、頭巾を折かけ烏帽子のやうにかづき、我若時から、此道好にして、四十八手の外の曲造して見し内に、終に十二つがいの巻頭にある、道盛の闘斗しのこしければ、羽織を具足の心にて、一軍始ると、榮耀の上の物好、それは小宰相の局女郎にあふた時仕れ、是はかこい女郎じやと、腹のいたいほど笑しが、是もむかしになつて、其時よい事仕取しもの、仕合なり、さる程にはやう取つふせとほりあいかげられし太郎助めは、今に花をやつて、花山にはゆがられぬ事、合點ゆかず、今迄こたゆる身體でない事、我等よく知て居るに、さりとは遺様上手と見へたり、我親より譲を請て、一生榮



花に三十人口など、居喰にしてもあまるべき事成に、悪所づかひは、思ひの外はかのゆく物と語れば、大盃打笑て、本女郎買といふはそなたや我等が事也、迎も皆にするからは、ぐはらりとつかふて、今にいひ出す程にせいでは嬉しからず、とかく商賣は心ながふ、遊女狂ひは、急にくはつとしたがよし、家質置てつかふよりは、頭から賣てのけて大臣めくは智慧なり、世渡りの才覺には、利銀もあげてすむ事も有、悪所仕出しにかりて、其の家に住人見たといふためしなし、我人此道にかゝつて、よい程といふ程をしらねば、遣出すから萬の物を、我物とおもはぬが上分別成べし、下中の島の藤八といふ大臣、五年此方に七千兩の有銀を、後家の米の銀を拂ふ様に、人しれず一度ぐに揚屋へ渡しけるが、誰にあふ共、又は女郎買共見へすして、世上へかくすを大事くとおもふうちに、つかひ果して今といふ今、喰ねばひたるいといふ事をしつて、松屋町の裏屋へ引込一日に五分宛取て素麴の臼を挽事、是等はおなじ女郎買にも、たわけといふものなり、物の自由な時、うなつた事もせいでは、つかふた甲斐はなしと、暮方迄咄て、さりとては此身になつても、此咄しのおもしろさ、清貧は常に樂しむといふは、我々が事なるべしと、たわけつくして皆にしける事はいはずして、寒い時分に破帷子着て、過し半太夫との口舌咄し、今は無用の至り也と、權五郎殿も片目ふさいで、笑ふてござるべし、あの氣でなければ皆にはせぬ筈と

若いむす子を持し親父共が、異見の引事になつてはたしぬ。

#### 第四 梅の花笠に降掛る村雨

子を捨て色にまよふ親仁の仕果

人の親の子ゆへに迷ふは、常のならひなれば、ふるめかしとて、色の道に迷ひ、心は闇にあらね共、不斷の大酒に足もさだめず、晝中にもしるき所へふみこみ、むしやうといふものにはさぎくらし、あたらしやの金太夫にふかくなづみ、行年六十九歳迄、分もなふ通ひ死にして大分の借銀を、一子におしげもなく譲られける、此息子めいはくなる親の跡を請取家藏諸道具分散にして、住馴し我本町を立退、次第にくたり坂となつて谷町に、わづかの古道具見せを出し不目利の新助とて、常住堀かづきばかりして、くるしき世渡りをせしが、さすが親の子ほどあつて、ない銀をつかひたがり、透さへあれば新町に出かけ、阿波座の采女といへる、貳匁取の女郎にあいなれ、責て親仁が今鹿鹿かふほど、つかひ残しておかるれば、又たのしみもふかゝるべきにと、過ゆかれし親父の仕果をくやみぬ、かく子の事を思はずにつかひ捨し親もあるに、又子をおもふ親有て、身に絹物をあてず、口には濃茶もしらす、鼻に名の木の香もきかず、色道にうとく、秤目にかしこく、桶の輪かへ



るも、かづらゆひがそばをはなれず、古輪の切を非人とあらそひ、取あつめて焼木となし  
 する塵塚迄銭さしに拵、年來銭をつなぎ溜て、數千兩の小判になし、取ぶきやねも瓦に  
 しかへ、赤銅樋をかけて、末々世倅が世話のなきやうにと、身の娛みをこらへて、一子の  
 爲に金銀をふやし、死去の節下寺町の旦那寺へ、五十貫目祠堂にあげて、外は釜の下の灰  
 までも讓狀ひとつに濟て、誰か七つの内藏に指のさしてもなく、不殘請取四十九日の朝、  
 出家衆を申請、佛事仕舞ふて夕食より、精進あげ箸を下に置くと、宿をかけ出新町へ行て  
 山口やのていしゆ合點か、親父が所務分したぞくと、小判を逆手に持てまきちらし、此  
 家内はんじやうとよろこばせける、是より心のまゝの奢、丹波やの村雨にぬれかゝり、雨  
 の日も風の日も、精進日もかまはず、毎日の里通ひ、よろづ花麗にやつて、名題の末社引  
 揃て九人、前後を守護し、東の門よりさゝめいて鳴こめば、おさきへおてきより、紋付の  
 貳つ焼燈あげやから人橋かけて盛砂せぬばかり、追付是へおなりと、九軒の山口屋には萬  
 燈のごとく、火をかがやかし、臺所はまた板の音たかく、すりこばちなりやまず、井戸車  
 も人も、隙なくまわつて外より見るさへ小きみよし、不目利の新助は阿波座の貳人としげり  
 腰輕になつてかへるさの慰に、一へんくるわをめぐりしが、此大臣の威勢を見て、さりと  
 は人間なればあれなり、適色の盛なる世に出生して、銀でなる榮花の自由にならぬ身と

まれける事、無念の至り也何ぞ二女取りの女郎に戯て、うか／＼とくらす事、人と生れし  
 甲斐はなしと、油店の筆をもらひて、我大丈夫な身體となつて、太夫を自由にまはし、大  
 臣と稱美せられ、浮世小路の加籠にのらすば、此橋を二度渡るまじと、四つ橋の橋柱に書  
 付、すぐに宿へ歸り、何の目あてもなきに、明の日早々より京へ心ざし、京橋より牧方迄か  
 ごをかり、めつぼうかいにのぼりしが、佐田の天神前にて上から來るかごが、替ではない  
 かと詞かくれば、かごのものごこへじやといふ、ハテ京橋へじやといへば、そんな島なもの  
 は米のやすい時もいやじやと、かぶりをふるを、雀げんこ打て替るに極め、旦那おりて  
 下さりませい、爰迄をりましたに、ちと御合力たのみあげますと、なげきをいふを、不  
 便におもひ、つまみ銭をやつて替かごはやうもつてこいといへば、小腰かゝめて何もかご  
 に御ざりませぬと、すこしの事にて悦び、先の人をのせ替て、大阪の方へ行ば、上より來  
 しかごは、乗手の男、合力せぬと見へて、かごから打あけるごとくにして、さて／＼きた  
 ないやつかな、すこしの増もくれずに、其身は何をくらうやら、牛のやうに肥ておつて、  
 肩も背もたまる事か、あんな奴が、かごがきの油盗人といふものじやと、物にくさふに、  
 跡からにらみ付、さあ旦那めしませと、かごをなほす、新助のりさまにかごの中を見れ  
 ば、封じ文一つあり、是はさいせん上から乘て來し、旅人の取忘れし文成べし、呼返して



是をやれといへば、中に銀さへござらば、狀一つなどはわすれおつたら大事か、其上もはや尻かけも見へねば引きさいてすてたまへど、いひさまに、肩をそろへて昇だす、新助是非なく、此狀をひらき見るに、十兵衛殿下られ候に付、一書申入候、彌御無事の御勤珍重に候、我等事昨晩上下共に息災にて致歸宅候、然ば茶入の繕、留守の中に出来候て、此方に請取置候、近日春日膳指下候時分、一所に遣し可申候、將又此度大和廻りいたし候て、岡寺より、多武峰へと参り候道に、安部と申所の里はづれに、草堂有之連衆のごをかはかし立寄茶もらひたべ申され候、其茶碗今上方に賞翫致候、三島茶碗の、しかもころよきにて候ゆへ、いかさま何ぞ掘出しもあるべき所と存、うそく見ありき候所に、佛壇の間に腰張、勝手口より三枚めの反古櫛に定家の三首物と見申候所、少しも違あるまじく存、早速住持にもらひかけ可申存候へ共、連の内に、まんがちなる欲仁候故、態と其分にて罷り歸候此度引返し参可申存候へ共、下向仕間もなく、又罷立候事も近所の手前家來共のおもはくいかに候故我等は参り不申候、貴殿急に彼所へ参られ、住持の氣のつかぬ様に、少銀にてもらひ被申候様に、才覺可被成候、尤欲の世の中、此十兵衛殿などにも、沙汰御無用に候、此方にて何の義も不申候、急に御越可被成候儘雷の岡など、申、古所の邊かと覺申候、道具屋太郎助殿参る、同太右衛門よりと、讀もはてす是天のあたゆる福と、心

をしづめ四五遍くりかへして、よんで、見るほどうまき事也、まづおしいたいき懐中し、扱かこの者共にいひけるは、我大阪に用ある事を失念して出たれば、是より立かへれば、汝等には隙をやるぞと、かごをおろさす、かごかき共は、それはそれは御太儀など、笑止な顔はすれど、から身でかへるをよろこぶ、新助はそれより一さんに宿にかへり、妻子のなき身は心やすく、俄に市をたて、諸道具のこらす賣拂、何か取あつめて、金十一兩二歩を腰にひつつけ、家主にいとまこいて、すぐにくだんの草堂へ尋行、品よく住持にもらひかけて、金子拾兩相わたし、二色の道具を取て、又大阪に立歸り、伏見町の道具やへ、三島茶碗を金五板に賣はなし、扱定家の三首物は、京へ持上り、表具をいたし、上京の有徳なる茶人の本へ、大分の銀に替て、一夜檢校のごとく、よい身となつて、しばらく西寺内に宿をかり、一兩年は色事やめて堀出しを心がけしに、必よい時は、するほどの事心になひ、二年半と申秋の比、五千兩といふ小判の數になして、古郷なれば難波に歸り花、錦をかざりて親のすまれし、本町の屋敷を二雙倍で買戻し、今ははや浮世小路の遊びかごにのつても、あまり人に笑はるゝほどの身でもあらずと、女郎狂ひの心ざし頻なりしが、よく思案をめぐらすに、五千兩の幅にては、太夫にかゝつて、見事なさばきと、いわるゝほどにはならず、せめて一萬兩の身體にならば太夫を買てもおかしからずと思ひなをして



それより北濱の若い者と組で、米事にかゝりしが、仕合のよい時は吹付る風空に、思の外  
のあがりを得、つゝにねがいのごとく、一萬兩の身體となつて、さあ今こそ大臣といはれ  
て四つ橋をはいびろにあるきてもくるしからず、あゝうれしやと、四五年は弓のごとく  
ひつばつたる氣ゆるみしより、俄に煩出し、さまざま醫療をつくせ共、年々氣を煎へらし  
心慮といふ病のよしにて、幾藥あたへても、いかなく露ほどもきかず、次第くにおも  
りければ、新助泪をながし、さりとは悔しや、是ほど短き命としらば、五千兩の時、く  
わつとつかふて仕舞べきに、無益の金をためて佛くさい弔事に捨てのけんこそ、かへすく  
ならべずしてけつかうなる夢を見ずに、此まゝ死なば、ゑんまの前にして、見るめかく鼻

され、後の世にはちかゝん事、なんぼう無念の至り也、せめて息の通ふうちに、女郎買は  
どの器量ある養子をせばやと、手代共に此趣をかたれば、いづれもつゝしんで承り、御養  
子をなされなば、幸堺筋の甥子か、平野の従弟子然べしと詞をそろへて申上る、いやく  
汝等が思入我に違へり、甥もいとも、太夫を自由にするほどの器量なし、然れば我存念

を達すべきやうなし、唐土の堯王は、九人の皇子をおきて、舜の太子に立たまふ、たゞ何  
者にもせよ、分知とそれしや共にいはるゝほどの器量者を養子とし、親まさりといはせた  
し、是我願ひの一つなりとて、廣き大坂中を尋ねしに、茶碗焼出す、高原といふ所に、風  
の神と相住して、新町の名ある、太夫天神の姿を紙のぼりに畫、其身はふるき破編笠をき  
て、橋々をもつてまわり、さあく丹波屋の小ざつま、明石やのもろこし、あづま、むら  
さき、かづらき、吉田、瀬川、奥州小琴が、にがみのはしつたを、古釘にかへませうくと  
子供たらしめて其日おくりにする男、ごふでも色知の果なればこそ、あの身になつても、女  
郎の事はわすれず昔をとへど、よびいれて、始を聞に、難波津に我よしあしは御存知の事  
なれば、つゝにおよばずゆづりを請取てより、宿に一夜もねずして、新町に通ひ詰の男  
太夫の金吾になつみて、算用なしにつかひすて、今此體と、はづかしげなくかたれば、新  
助枕をもたげてさりとは奇特な男、是こそ色神の引合とよろこび、則養子と定一萬兩の金  
をのこらずゆづりて、つひに其身は過行ぬ、紙子大臣思ひもよらぬ跡をしてやり、遺言に  
まかせ、ふたゝび新町に通ひて、時めく太夫に、灸の蓋をさせるほごにしこなし、諸分知  
と、末社もあがめ奉り、女郎もかたぬならはと、偽さつて、眞なる心ざし、かたまり、  
御腹次第にかきたかになつて、道中するも見ぐるし、ねがはくは此里出て、お屋敷で御子



泡産ましたいとの訴訟、大臣聞とけられ、吉日を見て根引にすべき企、諸事八百兩で噂のあく事、ちか比心やすき儀と、お敵の悦び大方ならず、里のすまいも今二三日、太夫になごりの盃事あげや一家罷出、さいつさ、れつ、妹女郎禿迄、あやかりませんと喜悅の酒盛賑なる最中に、此世をさりし新助がこゑ、天井におとして、あの女郎請出す事無用、腹なる子は、西横堀の四の二といへる間夫の男が種にして、汝が子にてはなきぞ、切々中い仕掛をくふのみならず、ね心のわるい女郎を請出し、身二つになると作り氣違になつて、汝にあかれ間夫の四の二が方へ立のかんどのたくみをしらす、鼻毛をよまれたわけもの、それほどのうつそりとはしらいで、養子にせし事よみちのさはり、くやし、と姿は見えず、こゑばかりしてうせにけり、一座の者共肝をつぶし、あきれてそらを見れば、女郎は赤面しながら、ちか頃悪功なううれいじやと、天井をうらめしげに、見あげられは断々。

第五 梅に名の鳥が啼東路の別

男にも血の道の煩ひ戀に目まい心

色里の商賣、年中抓取もあるやうに思へどかくべつあはぬ客あり、たまさかに鹿戀かこひひとつ買男、二三人つれだち、まだ虎屋の梅花の油見せも、出さぬ時分出立くらいて揚屋に行、三つ取合のなんばん菓子、一人に壹斤あてにあらし、木枕鞍に番うたひ、腹のへるをかまはず、中食に切麥、程なく夕食夜食、ことさらいひあはしたやうに、いづれも上戸なれば、中酒から汁椀で見しらし、おさめまではで廻し、鼻紙いれば、女郎の延用捨もなくつかひ捨、たばこぼんのたばこ迄、打あけて取ていぬる客にも、宿のならひにて、くわしやが二度ほども出で、是は手續でござりますか、其ま、絹のやうなるごばん鳥をめましたと、けいはくにいひける、諸事丸取りにしてから、あげやの取が七夕ぞかし、是はごあはぬものはあるまじといへば、是尤かなやの金五郎、息災で居し時、罷出て申は、是よりあはぬものあり、それは何ちやとさけば、野良の病中と申す、それこそしれた事、商賣やめて居喰にする事、野郎にかぎらず、知行とらぬほどのものは皆あはぬはず也、まそつとよい事を申せと打こめば、是はいづれものき、やうがわろし、野郎の病中には、日頃目をかけて、ふびんがらるゝ大臣ほどあはぬもの也、そのゆへは、つねに子共になつて、あいらしい事のみして、かわゆがられた若衆、病中には白粉けたへて、赤みがちな類鬘生出其儘鳥ものを見ることくなれば、姿を耻て誰人にもあはぬといふ、それは其筈なり、色を賣身



は其心掛尤ぞかし、高島やのあづまぢ、十死一生の時、凡夫のむかしよりふびんがられし半風といふ大臣、病中五十日餘、雨の夜も風の日もかゝさず、一日に三度づゝの見舞、樂の様子、食事のすゝみ様くはしく尋、今一度の本腹を諸神へいのり、庚申へ裸參の代參をたて、住吉へ命乞の庭神樂を參らせられ、身をなげうつていのられけれ共、次第へいたのみすくなき由、やりてがつげれば、一生のいとまごいに對面すべき由、太夫方へいひ入たまへ共、いかなく此世を思ひ切て居る上は、ごなたにも御めにかゝる事致さず、かさねて申といくるなど、さりては心づよきいひぶん、いもと女郎引舟やり手の久米迄、口をそろへ異見申けるは、おなじみおほき中に、半風はご誠ある御方はあるまじ、御氣色わろきとて、引こみたまふ日よりけふまで、五十日あまり一日もかゝしたまはず、毎日三度の御見舞に、つゝに一度もあはせ給はぬ御事、あまりと申せば御こゝろづよき仕かた夢ばかりあはせられ、なき跡の事共、又は兼ておはなしなされおかれし、お袋泡の事迄もぢきにおたのみなされおかれなば、いよ／＼御ふびんにおぼしめし、何かにつきてよろしかるべし、ひらさらけふは御たいめんあれかしと、すゝめ申せば、さら／＼そなた方のおもはくとは、大きなちがいあり、今半風泡のごごとく、我事を大切におぼしめし、御心をつくさるゝも、我身息災なりし時の事を愛したまいて、おぼしめしわすれ給はぬゆへ

也、然るに今かく、やみつかれおとろへたるを見たまはゞ、興さめて戀をさましたまふべし、惣じて色を以て人にかわゆがらるゝものは、色おとろへては愛うすくなる事、つねの人心也、あいまして戀をさませませんよりは、あはで死なばしだいにおぼしめし出て一べんのゑかうにもあいぬべしと、つゝにあはすおしや勤さかりに、此の世をさりて新町に花なき心地と、行人袖をぬらしぬ、おしきかな情あつて、大氣にうまれつき、風俗太夫職

おほく、名譽思ひをのこさせ、別るゝはやかさねてあふ迄の日を、いづれのお敵にも待兼させ、末社共にもありがたきお言何かにつけて此君ならではと、此里へ来るほどの者思ひをかけぬはなかりき、ある時九軒の住吉やにて、木五、朝原、柏正といへる、今出の三大臣、東路、唐土、八重霧、三太夫に手をそろへてあい奉り、毎日のさわぎ、木五がつれし末社は作政とて、黒菊石の、きんかあたま、しかもせいたんにして、片足少しながく、何にひとつ取得のない男なれ共かつかうの人に替りて、おかしきと、頼子上るり語るを興にして、いつもお供につれらるゝ、扱朝原につきしたがふ太鼓持は、白髪町の留平とて厚髪にして、色白く、こゑよく端歌の名人、女のすく風にて、殊更鼻の高い所儂りなく、口柏子のきし若もの、其ほかの末社は、西の芝居の囃子方一兩人打まじつての酒事、た



のしみといふは大底の事、罪もむくひも、女房子の事もわすれはて、おもしろがる中に留平は此内の君達に、戀すると見へて、馬刀の吸物のごををらす、思ひに胸をくるしめる體、唐土さとい女郎にて早速氣をつけ、ひそかにさゝやきしは、汝戀するを見うけたりといへば、留平横手を打て、扱はあらはれてはづかし、此いつの比よりかかた様の御事を、おもひそめましてと手をしめる、唐土大笑して、鼻もうごかさず、ようもくかない事をい

女に、いかなくぞんじ共よらぬ事、そなたの思ひ人は、鳥が啼方といへば、あつばれ見ごをし、そのあつまち様になんとも成ませぬ、せめて此の事通じてなり共あらば、又いつぞのじせつもあるべき物をとなげく、それがじやうならば、神ぞ此の戀我等請取、明日の別に、腹いたむとて、残り給へ、おてきへはよきにひなし、あはすべきと、請合給へば、うれしく、今の世のふかき情知様、此の君七代まで太夫冥加あれど、心中にねがふもことほりぞかし、爰に作政は、ひるからうきく共せず、日比嫌ひの念佛を口の中に、ぼちくと申て、好物の酒も、のむ顔して打あけるを、大臣御覽につけられ、作政がけふの風俗まだ間のある大晦日を案する體と見ゆる、ちか比小氣成男め、廿はい迄は

此はなが合力して得さすべし、心やすく春のきた心になつて、さわぐべしとの御意、有がたく、旦那は清明はだし、ざつと是で重荷がおりましたと、一花はさわぐやうなれども、またじみくどめいりて野邊へちかつく罪人のやうに、なげ首して、片隅へよるを、八重霧立品に、肩を引て勝手口にまねき、そなたあつまち様にはれたと見請し、我目は違ふまじ、さもあらばたい一度の首尾は、命にかけて取持べしと、ふかきお心入とかふの返答は申上ずして、すゝりあげて男泣にないて、茶ごもんの袖をひたす、八重霧いよくふびん増て、しからは大臣御歸りの時分、心地あしきと跡にとまりたまへ、何ぞぞ思ひ人いたのみまして、心よくあはして參らせんと、のこるかたなき御心入、わたもちの愛染様、まわりごをき勝曼のかねの緒にとりついてたのまふよりは、君がくれないの内衣の紐に、たのみをかくればすむこと、焼燈掛しをくやみぬ、かくて二人のほれ手共互にそれとはしらす心々にあけ方を待て、此いつよりか戀すみし、胸の思ひを此曉に、はらす事よ、此ごぞく病人に薬がまはれば、死人はなき世なるに、人皆戀にころされけるよと、仰にまかせ二人は、俄に作病をおこしける、つれられし大臣は、此内證夢にもしらす、何があたつたと、とはせらるれば、留平は背にたべました蛸の手が胸によこたはつて、太鼓持ほどあつて、腹が張て痛と申、今日の料理に蛸はつかぬがと、ていしゆふしんそふな顔すれば、なんじ



やしらぬが、やれ腹を引さくはどうめく、其爲にこそと、柏正がつれられし、道鏡といふ飛上りの針立、懐中せし針を取出し、片手に槌をもつて、腹の蟲を残らずたいらげ手なみを見せんと、酒きげんにわめいてかゝれば、留平はおどろきむまれついで、針がきらいと勝手へにげ入、作政は何とした、宵からうかなんだがと、木五ねんごろに尋らるれば、頭痛がいたして、あくびが出て、目がまふやうで、どうやら死ぬるやうにござりますが、てつきり血の道でござりませふ、あゝ目がまふ〜と、にへかへる、内儀心得て俄によい茶をいれるもおかし、道鏡ぬからぬ顔して血の道は若衆にこそあれといへばそれは痔の道の事ならんと、笑ひ立にして、太夫連にいとまごい、兩人の病人を宿の男にあらましたのむとあつて、捨ていづれもかへり給へば、八つの鐘より夜明迄のたのしみ、大分なりと悦事大方ならず、唐土八重霧は面々にたのまれし、戀男共がおもはく、詞に品をつけ、情をこめてあづまぢに我事なげくやうにたのまれければ、あづまぢはふたりがわりなき心ざしを聞て、むかし生田川に身を捨し貳人も、ひとりの女をおもふからの戀死、おもへばいづれをいづれといひがたし、しかし留平殿にあいます事は、もしもれきこへて、世の人のそしりいやなり、是はふつ〜思ひ切てもらひましたし、作政殿事は、おもふ子細あれば、ひそ

あれば、唐土むつとした顔にて世の人のそしりをおぼしめさば、作政にあいたまふも、留平にあいたまふも、名の立はおなじかるべし、とかく取持手による戀いどくちをしと不興して立給ふ、袖をひかへそれは太夫共いわれさんす、こなさまには似合ぬ不承なる御事、留平殿は器量よくして、女のすく風、我身とてもいやならず、その方かたにあいましたは、此首尾しらぬものは、こなたから好であいもせしやうに仇名たてられては、せつかく情知てあふてしんせた甲斐なく、いたづらもの、やうに、取沙汰せられんも、いひわけむつかし、又作政は不男にして、しかも女のいやがる片氣、それも大臣ならば、欲で逢た共いわるべけれど、太鼓の身なれば是以て其詮なし、男ひではせまいし、あの男にかぎりて、女郎の方から、好であふとはいわれまじ、たゞ戀のきかぬ男に、あふてやるが情なりと、唐土にもうなづかして、夢斗のちぎりをこめて、此世の思ひでをさせてやり給ふ、ふかき戀しりと、過行給ふ跡の跡迄、其名高くをしきは此君。

### 第六 梅の匂ひ吹わたる大橋

戀は外になつて、色宿はうそのつき所

平家の二番はへ宗盛といへる本の大匠、六條通ひの心ざしはあれ共、第一の太夫職祇王祇



女は、親父手池にしてかよはれぬれば、少しさしあいをくりて、是非なく磯せゝりにかゝつて、揚屋狂ひをせられしが、其比のしだして、千枚形の肌着黒羽二重にかくし、裏同黒羽織に、平といふ古文字の大紋、上繪なしにいたらせ、袴高くすそ取て、大小よしやがゝりにぼつこみ、臙富士といふ大編笠ゆたかに着て、懐紙も延は女めくとして、こぎくの五折、爪揚子をさしこみ、奉書の反古包に、名木厚割、鼻紙入はさもしきとて、つれたる散切の禿に入させ、ゐんでんの横ひだ、金岡時代の、筆捨松の高蒔繪の平ゐんろうに、袋うちの長緒あまかわの二つ玉、廿六夜のへうたん根付もさらにおかしく、踏捨の桑ぞめ足袋に細緒のわら草履、鶺鴒の細杖けしやうについて、喜三太といふ小者に、紫しぼりの風呂敷に、替着物揚弓の道具を包添、替雪踏逆手に持せ、きびすにて尻をたゝくほどに足をあげて、ひん／＼とありかせ、難波瀬尾といふ、至り末社をつれて六原の門口より、斗鶏仕かけの人形のありくやうに、ねりだし給ふを、其時の若男、六原流とて是をまなびぬ、よく内證知りしものゝいへるは、宗州も今大臣顔したまへ共、あれはもと清水坂の傘張のむす子なりいらざる盛をやつて無用の奢、追付内證は、ない大臣となつて、つゐには八島の破れ口にあはるべし、惣じての浮氣男、我より上手な人のする事をまなびたがれ共、ある袖はふりよく、ない袖は體のわろき、もめん羽織の胸紐しめたは、きうくつそふに見えて見ぐる

し、天窓の物すきは錢のいらぬ事とて、一年に二度ほどづゝ、置て見たり剃さげたり、はちびん、厚髪絲びんとさま／＼にかわれ共、替らぬものは日野の一つきる物、心は至れ共姿を至らす權がまはらねば沖漕だ事もならず、冬氣は有にまかせて、夏の中はごより、身のまわりの物すき、まづはいやな所有、粹素男にかぎらず、帷子は紋付の薄淺黄に極まれり、いづれ淺黄に黒羽織きる人に、草り取のなきは、けつかうな振舞に、後段のなきやうな物にてあとの淋しきものにて、やすう見えける、是でも其心には、大臣とおもひ、位をとつて、過ぬ酒に酔の醒る薬たべんと、紙入あけて、ねぢぶくさ取出し、一跡に八九分あるこまがねの中へ錢一二文入れて、人には一步の音をきかして、がらつかせ、今朝も浮世小路の五郎兵衛が、かゝが、平産いたせしに、はや一角ねぢくれたと、人ぎゝよいせんしやう羽織のわく我家の門柱は取かへずして、まだあたらしき、柄頭を巻なをし、年忌前に、持佛堂の障子の破れしは張ずして、夜ありきの盛に、桃燈はさつぱりと張かへ、しかも我あふ女郎の定紋を付て、よろこぶ心にあらず、色狂ひおもしろからず、いかさませんしやうやめて、偽つかず二日寄合に町衆と物語する調子では、却々遊女狂ひおほおかしからず、せんしやうと、うそつくでもつた色遊なり、大臣は死れたる親父を、世にあるやうにいひなし、是れさへ仕舞てやつたらば、鑑請取て其時こそ、きつさりと物の見事な、さばきを



いたすでござる、それ迄は手のどいかぬ所をかんにんといへる、女郎は無事で確挽る、母親をどろし、隙があらば一日成共、世帯を見せてよろこばしませふ物をと、不斷仕掛の泪ほしき時にこぼす、雨乞に此人たのまば、はした銀つかふ百姓も世の中にあふべし、耳訴訟に大臣聞かね、石佛代とて、金子五兩はとりもなをさす、七月前の小拂となしぬ、今時の慰み、座敷うつかりとはあそばれず、遣手が近よれば、此程宿をもつたる移り聞て無心をいほぬさきにこなたから、追付家見にまいるぞ、四つ橋に大分薪買置しに、木棚は拙者承ると、しかもたばね木三荷持賃共に、八分二分五リンが物にて、かさ高に見せ、太鼓末社がちかづけば汗はかけ共羽織をぬぎおかず、不斷兵法の師をする人ほどに油断なく心がけねば、女郎狂ひもならずと、わるがしこき男の粹顔して、手下の若いものに語るを聞て、近比の御たわけ也、銀つかふて氣苦勞せふよりは、銀つかはずに用心のよい、我内にました事なし、大臣と色里で稱美せらるゝほどの身ならば、すこし鼻の下の長いこそ、壽命樂なれ、高が世間へ出ぬ遊び所なれば、利口ばつた方より、氣のつかぬといはるゝほど大様子がよかるべし、色遊びには銀を出し、談合事には智慧をいだすべし、かならず内證の薄ひ大臣が、萬にかしこだてをして、末社が言葉の先をおつて、皆逆いふなど、はやのみこんで先ぐりをいたし、かるたの場で手目させぬやうに、八方へ目をくばつて心をゆ

るさす、氣ぼねををつて何か慰に成べし、おのづから遊びもちひさふなりて、をかしからぬ事のみおほし、爰に家財かけて三十一貫五百目の大北濱の根づよい名題男と、おなじやうに連立て、毎日新町へかよふ千鳥と替名ついて、淡路町にかくれもなき、せんしやうものありて、名題の男共が上にたゝん事を思ひ、萬事かさ高に出けれ共、高が三十貫目内外の身代といづれも見透して、是にさからふ事なく、何につけても下手になつて、心の中でつもつて是遊びの外の慰と、影にてひそかにわらいぬ、ある時千鳥が申は、何とやら羽織の長いも醫者めいてわろく存、頃日拙者物すきにて、仙臺島の羽織を、成ほど見じかくいたし、此里へ着て参つたれば、はや大阪中の若男共が、のこらす羽織みじかふいたした、諸事にあちな思ひ付をいたせば、ごふしてしる事やら、早速世間へひろまり、にせらるゝにこまりはてると、此類のせんしやう、毎日二三十度も申出して、一座の痞をおこしぬ。其中に頼田といふ、家敷持し法師き、かねて、惣じて我身ひとつのからだをかざるせんしやうは、いたしてからが、高のしれた物すき、たゞならふ事ならば、家買せんしやうをして見度物とうちこまれて、是にはさすがの千鳥も音をいれて、片隅へかがみぬ、此頼田といふ法師幼き時、都新在家の庄兵衛の婆々の本にやしなはれて、成長し、當世男となつて長崎の鹿といふ大臣と前の吉野の花をあらそひ、つるに鹿に手折れ此里もおもしろからず



と、京をすて、難波の京に立歸り、生國なれ共、つゝに新町を見ぬ事、我ながらあまり成せんさくと、一元二元三元四元とて、都より召連られし四人の末社共に、同じ紋所を付させ、いづれ甲乙なしに、身を當流に拵へさせ、九軒に出掛井筒屋が廣座敷太夫は大橋、其外天職あつめて、むしやうさはぎの亂れ酒、宵からふけゆく迄呑明されて、前後座のさめ事なし、頼田物すきにて、四元の喜八といふ太鼓に子細を申きかせ、態大橋にあはせ、(二字缺)様子を見たし、(五字缺)首尾はつかまつるなといへば、ふれはさいわいの事なるが我等の仕掛にてひた／＼とやらぬといふ事なし、其時は中々せずにおかれじといふ、そこをかんにする替りには、京にて抱し妾てかひの小さいに、二百はいつけて汝にすぐにとらすがいやか、それならは無分別おこる所をおしまげて、是非にかんにんつかまつるは欲の世の中に、喜八一人にはかぎらずと、大笑して、床は大の身にかわり、太夫に戀の山、岸迄のぼらせてから、私は末社分こなた様の大官様にはもつたいなしと、よいはまらせ物、ひとつはおなぐさみにも成ます事と、おの／＼内談かため、その通りに申渡し床をとらせける、大橋は、今宵の客達の出立、いづれも一様にそろへざる物なれば、此内に末社のまぎれものあるには極れりと、氣をつけて見れ共、十二人の作り山伏の中、判官殿を見分かねたる、佐藤が後家のごとくいづれを大臣、いづれを末社と見きわめかねて禿のしゆんに、何やら

ひそかに申ふくめて、身ごしらへに勝手へ立れし間に、禿喜八にさゝやきけるは、太夫様にかくれて、お伊勢様へ参ります、お初尾の小判十兩、御さたなく下されませいといふ、喜八びつくりして、それは我等がまゝにもならぬといふ、爰をいわせふとて、太夫智慧を出し、しゆんにさもしき事をいひかゝらせ、大臣でない所を見出し、此事太夫にしらせ、段々覺悟させて(五字缺)、喜八首からつよふもつて参れば、中々當所ちがふて、太夫めつきりとおろして、いふ程の事を消てゆけば、首尾おかしくなつて、喜八身を(九字缺)るに種たねなし、なづみてかゝれば、偽にしてさらに請ず、ごふも了簡つきて、ひく起にして(四字缺)、大臣聞付、大橋(三字缺)入て、何とあるもしらぬ事ながら、京からの執心なれば、是非にあしからぬやうにとたのむ、太夫此の男の袖にすがり、それほどにおぼしめさば、今宵の御しかたさりとては恨あり、うかと心得てあの男に首尾せば、私の一分立がたし、かた泡の戀もすたるといふ物で御ざります、つとめの身ほどあぶなきものはなし、神ぞく、性悪大臣といへば、頼田大きにおどろき、今はあらそふ事ならず、何として此仕懸見付給ふぞ、ゆるし給へと、しらけて此床にすぐに無理共に(四字缺)かゝれば、いかにしても先の女郎の手前あり、明日からはお心任せといふさばき道理に極めける、喜八は中にぶらりととして、おちつく所なく、燈火のもとにさびしく、外の(四字缺)音を聞て、むじ



やうをくはんじ、夜もすがら、物おもふ比はあけやらぬと、百人一首の歌など思ひ出る所に、定家といへる女郎、ふかき分知なりしが、爰を了簡して我さへかんにんすればすむ事也、いとしゃ男と、喜八を(六字缺)我が身かくあるからは、何の子細なし、今宵からあいたまへといはれしを、すこしひけたるやうにおもへど、是かしこさあまつてのさばさと各々ほめて、此首尾珍しき始なり、惣じて女郎、男を商賣にしながら、人のほれたといふ事うれしがるためしには、喜八定家に自然と心かよひ、日の暮まぎれに、勝手へついて立ちつと鼻の邊を(四字缺)しが、今のたよりになりぬと、大笑ひにおもしろき夜も、あけてのおかゑりまたちかいうちにや。

## けいせい色三味線 四

### 目録 鄙之卷

#### 第一 女郎の心中をついて見る 鐘木町

ぬれ過て今は竹の子笠のほね仕事命の水をかいほす男なき人のために姿は  
墨染の里

#### 第二 戀の焼付柴屋町の門立

小歌の聲にこがるゝ女郎たましむ通ふ枕もと夢中の誓紙うつゝにもわすれ  
ぬ男

#### 第三 木辻鳴川に深入する男

ままだも一步の角をたをさぬ男ひいたりうたふたり夫婦もろかせぎ我身の耻  
を一文づゝに賣喰

目次



第四

高洲ちもりに茂る戀草

扱も其後初段からやつし上るり語り出すから哀成太夫が内證聞はさくほど  
やり手のたねは分別もの

第一 女郎の心中をついて見る鐘木町

千とせの松にかゝる藤の森の大臣

二三年跡迄は手前あちをやつて、お茶のよいといひし、上林のかほるを自由せる身の、世に銀づまりほごかなしき物はなし、異見いふ人もなきに、ひとりどやめばやめけれど、あげやの拂分もなふしちらかし、西嶋の道はたへたれ共、遊びつけし身なればたいもいられず、宿は伏見へやね木見合にゆくと、普請する銀があれば、色にしあげるなりをして、しさいらしく軒口を見あげ、ごふでも來年迄はまたれすと、よいかげんなうそを申て、七つの鐘をつく比鐘木町へと心ざして、毎日かの里の噂きく耳塚の前なる、九右衛門が所へ立寄、すこしもはやくと駕籠をいそがせ、三枚肩にておさせけり、人此道にかゝつてういて來る事科でなし、すでに九右衛門がかわゆがりし白犬、日毎に客の御供して、あげやの座敷迄推参いたし、女郎のあがり膳を頂て、尾をふつて悦び、是にあぢしめて、かごにのる人あれば、喰かゝつた鯛のほねをすて、いさんで駕籠について、三里の所を熱茶一はいのまぬうちに、京やの七左衛門方につきて、是よりかごをのりはなし、八幡屋傳右衛門おく座敷に座をさため、女郎目利といふ事もなく、兼て聞およびし、一文字屋の夕霧を申てや



れば、御約束有よし、ごなたにかと、宿の男が罷出て極めたがる、然らば龜やの井筒か、有て浮舟泡御出と申、先一だん見ぬさきからはや浮舟にこがれて待うちのたいくつ看のかまぼこ犬に喰せてさんたさせ、是も氣のはらぬ太鼓とおなじと、興にしてゐる所へ、又男罷出、始てのお客様に、何とやら申上るもと、もみ手をするを、皆造いやるな、浮舟もつなぎとめる男あつて、もらいたいの訴訴かといへば、八まん旦那は見ごをし、いかにも御意のごとくといふ、戀はたがひ事、とかく先の首尾よき様にと、あまり結講過たる御丁簡、此かわりに夢川泡とて、いまだせけんのお客の御ぞんじなき、手いらすの飛切様、是ばかりは相違なふつれまして参りませふと申、なる程く其君見たしと、是に極めて早速御出忝なく、川るびのすい物も所とておもしろく、九右衛門まじりに酒のんで、むかしに替るあそびながら、是も宿に居て女房共が、世のせはしき咄し仕かけて、耳こすりするを聞て、

々御所女の、たま〜かゝるめにあへるがごとく、是を誠の堀出しとは申べし、此女郎おもてむきはさもなく、内證のよろしき事たとへば取替やねのすまいして、銀もつているやぬを、世間で手前が悪いといひならはせり、此風味に喰つき、のこりし諸道具賣拂ふて、世を夢川と渡りてうつゝのごとくつかいなくして、今見れば竹田通に、竹の子笠のほねを仕て其日をくらし、不斷煮ぬき食を好し腹へ、きらず食もあたらす、はらのふくれしまゝに、上林の元かほるとの口舌咄し、いふ程其身の耻にして、近比しやらくさい事を、きく人笑ふて通りぬ、爰に丹波橋の二三といへる分知此里において肩をならぶるものなく、むかし繁昌の時はしらす、今のせばき所には、氣の〇き大臣也、一生したい事して、ごまり時にとまるが、〇道の奥義と合點して、いまだつかひのこりの金の有うち、此里通ひもけふ迄と、鐘木狂ひの鐘打て、ふたゝび足をふみこまず、氣さんく思ひ切り、是におとらぬ大臣、風俗しこなし二三に似たとて、二代の二三と名に高く、手前すいぶん體なる身體、此里に太夫などあらば松にもかゝる氣ざし藤の森に住所をかまへ、表向は藁ぶきにして、百姓の家らしく見せかけ、内の美なる事、つゞ〜いふにおよばず、銀にあかして、工手間のかゝりし物すきの大座敷、外から見では一日がりにして、爰であそびなば、心ものびてよかるべしと、



浦山敷おもへど、我物になつて不斷みれば、鼻につくがごとく、手前に少しも心とめず、間近なれば朝暮十町めにかよひて、のみかけひつかけ、たのしみ此里にありと、心のまゝの榮花、りあい初、今猶ふかくいひかはして、あさからぬ中となつて女郎も此人ならではと、物になる客を外にして、文のやりくりさへせざれば、いつとなくあふ人たへて、物日のさびしきを、皆二三請取、いたりせんさくになつて、一人にかたづき、千歳は少しうき名の立に、心のつよき女郎にて、世間なんともおもはず、誓紙髪切、爪指入ばくろ、身を割とは是なるべし、此上は命を捨るの外はなし、段々にくからぬ心ざし、風俗しやれごしらへ、其年も

ひ曲自然とそなはり、逢人毎に戀をのこせり、有時二三絶て二月あまりもゆかざりければ、千歳は心ならず、一日に千度ふみしてとい參らすれど、詞の返事さへなくて、あはぬ思ひにしづみ、大方は泪でくらし、勤も心にそまぬ所へ、二三が連の夜深法師といふ深草邊の樂人、難波の人にさそはれ、大阪の色町見物にゆく門出に、此里へ立寄を、ちとせはやくも見つけ、格子よりこゑかけてよび入、二三がみへぬ様子をとへば、此法師もすれものにて、少せかしてなぐさまんと、けうとい顔して、扱は貴様は、二三が此頃の事御存ないか、

近比それはおそまき也、今は島原がよひに隙なく、よしうを手に入れ五條の古手大臣とはりあふ最中愛の事などいかなく、おもひ出す事にあらず、あんなぶ心中ものに心をつくさるゝは、大きな御損、さらりと氣を替て、當分物になる客の心に入たまへと、誠らしう藁を焼て〇も灰もつかぬやうに、にべなしにいひ立にして大阪へ下りぬ、ちとせはきくと胸をいため、今なごかふしたおもひをせふとは、ゆめ／＼思はざりしに、さりとは聞へぬ御仕形、ごかくこれまでご心中かためて、最後の一句と文したゝめて、御返事次第に後とはいわぬしんてい、古郷の親達の方へも、此世の別れの筆を殘し、萬死覺語に極め、二三が返事を待時、まだ秋ながら素紙子を着て、深編笠に、竹杖、たよりなき風情して門口に立しを、無用の非人の色好、往來のじやまじや、あちへゆきやと、やり手がはしたなく申せば、此男出て行を、千歳ちらと見て、今のは慥に二三様なりと、人をしてよぶ迄もなくかちほだしにておもてにはしり出、紙子の袖にすがり顔を見て、何かなしに泣出し、愛は人めもあれば、中戸の腰かけ迄ともない、笠をとらして、先此姿はととへば、二三耻をすてて顔をあげ、今爰に来るは、死ぬるほごくるしけれど、今朝油やより届し文を見るに、我等身の上あしさまに、何ものかそなたが耳に入れ、事なき恨の返事もあらずば、今宵もしれぬ剃刀わざとの覺語極たる文體に驚、そなたの命のほご心もとなく、あさましき姿をはち



す断に斗參つた、扱我事はかり初にせまじき夜あそびに、身體のこらすうちこみ、素身に  
なつて、今日はくらせ共、明日過る便なき身となれば、俄に思ひ立て、越後の村上に母方  
の伯父あれば、是を頼みに罷下るなり、然ば日比互に申せし事も、勤のさほりにもなれば  
なる、今よりは我事死うせしものと思ひてわすれ給へ、さらに恨に思はずと、紙子の糊の  
とけるほど涙をながし語れば、さてくかゝる事とは知らずして恨み申せし段々御ゆるし  
給はるべし、そふした事にて中絶申は、世にあるならい、日比の御心に似ずして、氣のよ  
わき御事、假身を捨命をかけて、あいませいではおかぬ女也、浮世のならいしづむ瀬あれ  
ばうかむ瀬有、御身上のつぶれし事さのみ御なげき有まし、只御身の恙なきこそうれしけ  
れ、ごかく命は物種とさまぐいさめて、宿へかくとしらさるれば、もとより馴染の宿と申、  
殊更下々迄もお影をわすれず、是はと一家驚先二三さまを四疊敷の静なる方へ入れまし、  
様々のもてなし、さすが京近き所なれば、下々迄の心和らかに情有心づかひ、千歳身に  
ては數々嬉しく、先お盆と心よく吞かはし、紙子ぬがしまして、はたなれし下着をさせまし、  
三味取寄て、いつより調子高く歌ふて、昔になしていさめる心、魂にこたへて嬉しく、扱  
もく今日首尾、以前に替らぬ志身に餘りて満足いたした、此上は妻女にしても偽りな  
き心底頼もし、誠は其心根を見て引ぬき、一生宿の詠め物にせんため、身をやつして來れ

第二 戀の焼付柴屋町の門立

見知り越のわる口、いひがち高名さやごがめ

東山は青葉茂りて、梅も櫻もいつしか根にかへり、香の風も吹おさまりて、樽は今を盛に  
千團子にぎはひ、取分子持の嬢共がいのる神とて、三井寺に綿ぬきの裕見せかけ、都より  
のまふで車にせきあい、是も替ておもしろしと、三條の西に伊三といへる男、お出入の米  
屋吉六とて、大津にするべ有ものとつれて、大橋より駕籠にのり、札の辻にておろさし、  
是より三井寺へはあゆまずして、先柴屋町に立寄、南の門より入れば、京よりわづか三里  
のちがいで、端女郎の風俗各別替りて、きる物しだらくに帯ゆるくし、白粉へげるほど厚  
く塗て、よしあし共に三味線をにぎり、すこし顔をそむけて、なにやら一ふし宛うならる  
る、立寄人を見れば、いづれもいかつらしき男、大わきざしさすも有、又ふどころにはは



なねちかくし、かりそめの事にも詞どがめして、情らしき事はなくて、喧嘩がまへもむつかし、戀も遠慮もむしやうやみに鐵砲はなつごとく、出るまゝの悪口、花鳥様かきもちが好やら、おはぐろがはげて見ゆると、しかもちかづきさふなが、見知りごしにあたぐち、さりとはやかましさも、うれしや比叡の私雨に四方へにげ散、いざ雨やごりがてらと、揚屋にたち寄、何かなしに座敷へとをり、歌仙小太夫など申君達をむかへて、都風の酒事の、あぢ

らば女郎の方から、やつてなり共あふべき大臣、歌仙初會よりふかく此男に心をうつし、百石町のおもはくを外になして、かたりたるあけの日より、毎京都へつてをもとめて、はじめのほどは今一度あいましてと、おなじ事斗書續しが、後には泪といふ字ばかり百二百

ど申て男作る内に、昨日の酒氣に頭おもく、何とやら心すゝます、それなりけりに枕引よせ二日酔の息をぬくべしと、はりあげて時行歌をうたふに、天井に聲有て一能々ど讚る、ふしぎさに林才といふ小坊主をめされ、己我歌ふ歌を、賤しき身として譽るは推參也と、焼煙管したゝかに頂き、罪なくてたゝかるゝおきせるとつぶやくを、腰打と召るれば、是非なく畏てお腰をうつに、また何となくうたふに、先のごとく一能々ど讚る、林才おごろき、まさしく今のは女の聲なりと申、次の間に女はいぬかと吟味あれど、林才より又人といふものは屏風の押繪より外になし、誠に雲の上人は、大和歌にて鬼婆々も哀とおもはせ給ふ、我はまた一節の小歌にて、目に見ぬ女の聲を聞とうち笑ひ、其後すこしまごろみに、い

我流を立初八年の日數經うち、あげ錢に任す身なれば、貴賤のかぎりもなく逢見し中に、馴染を戀の種かたまりて懷妊せし程の男も、かいま見し君にくらべては、ひえの雪と龍宮の井戸ほどの遊ちがい、いかなる御縁にや、是ほどにもおもふものか、かく白地に申さば只悪口の世の中、所がら柴屋町の焼手にてと、おぼしめしの程もはづかしながら、われ僞らぬ心底は、是にしたゝめ置侍り、浮世のふしやうに今一度誠の御げんなりたし、さもなく



ば追付死にますといふ、それは見じかし命ありてこそ戀なれ、かならず短氣な心をもたれな、成ほどすへかけてねんごろに語るべしといへば、ちか比うれしいお詞と、よろこぶ色みへて四足五足おとして、姿はきへて、さらばといふころに夢さめ、あたりを見れば逢初し日より、今朝までの偽ならぬおもひ入を、一つ書にして、おくに諸神をちかふておそろしきほど誠をつくし、名書の下を血にそめて、哀成筆の跡をのこしぬ、かゝる思ひ入深女郎もあるものかと、其後はおろしあふて、心をなぐさめける、世に女の執心と借錢乞ほごおそろしき物はなしと、因果經にもとかれたるよし、物知れる出家の申されしも思ひあたれり。

### 第三 木辻鳴川に深入する(缺)男

二千兩皆になして、今口過に一文のけいせい買

奈良の京春日の里に、諸分知るよしにて、かりそめながら心やすひ色狂ひとても、奢ははかのゆく物ぞかし、京大阪のお上家な遊びもしらす、いきはりといふ事もなくて、おもしろからぬ酒に長じ、我儘いふて、とにもかくにもねぢ上戸、百萬が厨子といふ町に、若草屋の春助とて、木辻鳴川に大事にかける箱入の大臣、此里の名取、秋篠といふ女郎とふかくな

つて、三年半に二千兩の身體もみつぶし、住宅を賣て退時も、いかな／＼氣をしなさず、其儘昔里通ひせし衣裳にて、静に町をねつて立退、あの氣でなければ、あのさまにもならぬ筈と、近所の親仁ども指さしをして笑へば春助見かへり、己が銀はつかふまいし、身が物すきとする事を、無用の指さし、色遊びのおもしろいといふ事を知ず、一生黒米の打込茶を呑、所から奈良漬の香の物も、煩はねば喰ぬなりをして、蟻のさしみに、生諸白を呑ふて來た男をそしるは推參なりと、すこしもおくせず、手前よい時に引かきし、秋篠を供につれて、三條通に色里でつきあい、心やすくなつての上に、兄弟の約束せし三笠屋の常といふ大臣、まさかの時は見捨しとの詞をたのみに落着憊と安堵して、この方へ尋ゆけば、此男も算用なしの色狂ひに、身體くづれて分散となり、門口に負ふせ方より、きびしく番を付置折節なれば、あるじにあふ事もならぬ首尾にて、頼む木のもとに、雨もたまらぬ三笠屋の當手もちがふて、ひとへに目くらの杖をうしなふごとく、心は暗となりて、くらがり時の籠に、我幼少の時、少の間里にゆきし、五良作といふ百姓の方を思ひ付て、爰になげきをいふて、半年餘りすみしが、いかにしても居喰にはしがたく、一かせぎかせて見る氣ではあれど、何をせふにも元手なくて、いろ／＼思案して見れ共、俄に鋤鍬のあらばたらきもならず、ふうふ談合して、近郷の麥秋を心當に、柏の破れ三味線才覺しだして、秋



篠にひかせ、其身はあそこ愛きりぬいて覺へし、文彌ぶしの上るりを語り、口過のために大和めぐりを致し、百姓の家々にて半分は偽を語れど、聞てが律氣なれば、あらいたはしや、すてんどうしはでも合點して、一つかみの麥になる事、天道人をころし給はぬとは、こんな事をいふべし、往來の人の其事となく笑へば、扱はきやつめは一ふしなる奴かと、すいぶんおぼへし所を語りなせど、誰足とめて聞ものもなく、耳梨山をすぎて、かつらごの池といふ有り、故ある事にやと里人にとへば、むかし三人の男ありて、一人の女を思へり、其女の名を纏兒かづこといひしが、三人のおもひいづれも切なりければしたがふべき方を思ひわづらい、此池に身をなげしより名とせりと語る、扱も其女素人かな、三人の男共に、すいぶん物つかはして、どふやらなる様で、ならぬしかけてもがし、かたひしに身體かたづけてやれば、手薄奴からそろ／＼あいそつかしておもひきるものなり、戀も情もいにしへはりちぎにして、ようも只は叶へてやつた事じや、但しなりひら時代には、男が大せつで、女の方から物やつてあいし事か、あつばれそんな世にあふて死たしと、今日の身の上をあんじはせいで、なんのやくに立ぬ事を思へば、むかしせんせいの春も過て、夏來にけれど冬裳束、汗にぬれて、日當りに背中ほすてふ、あまのかく山といふ邊に、れき／＼の隠家、おもてむきは萱軒にして、中戸より中のきれいさけつかうさ、めつたに奥ゆ

かしく、内をはるかにのぞけば、食燒かきや女もさどびずして、あまたそれ／＼のめしつかい女、紫のうしろ帯目にたち、是は天の岩戸のいか成大臣のかくれ給ふやしきぞ、手力雄の神力あらば、あの奥の杉戸引ひらいて取て置の女體の姿おがみたし、さぞ面白かるべし、爰はいけもせぬ上るり所にあらずと、あきしのにすいぶん間の手あちをひかせて、頭をふつてなげぶしをうたへば、こしもとらしき女、何やら承りておもてへ出、おく様の仰らるゝは、何やらふうふの人にとわせられたい事あるよし、くるしからぬにおくへ通り給へと、兩人をともしない打はれし大座敷へつれ行、こゝにしばらくまたるべしと、二人を置てかつてへ入ぬ、是は何共がてんのゆかぬ事、もしはふうふの生肝でもとつて、妙薬に入るがてんで、こんなおくの間へ引入れし事か、同じくばうまい物喰しておいて、ともかくもしてくれ、まづ食悦だけの徳也と、世につれてさもしき心になつてふうふ息もせず畏る、所へ又最前のこしもと出、こなた方は何ゆへかやうの淺ましき姿には成給ふ、先よりおくさま物の透よりごらんなされ、いやしからぬ男女若は色事にてかくはなりはつるや、様子の程を尋見よとの御事にて、是迄まねき申せしなり、自然戀よりしなくたり給は、くはしくむかしを語り給へ、男つき女の風俗兩人共に一風あれば、定て外の事ではあるまじ、戀であらふとおとしつけて申せば、近比おくさま又はおの／＼迄目高なり、成程此さまになり



しも、つれたる女ゆへと申、嘘やさふこそあるべし、おく方のおなぐさみに、有様に咄さるべし、あれなる御簾の中にてお聞なされるれば、いと調子高く語るべしといへば、吞助畏て、そ、けし髪などなでつけ、今更申もお耻い事ながら、私事幼少より有たいま、に暮、十七の春より木辻にかよひ初て、さまざまの奢つりて、此秋篠を請出し、我宿で遊は地女と語るにおなじと、身請せし女を、其ま、かの里につれゆき、毎日のさはぎ、其時分は親仁堅固にて、さまざま異見をいたし、追付物もらいになるを見るやうなといわれしが、其詞にたがはず、今袖乞いたすも、親へ孝の爲と語れば、御簾もうごくばかりにあまたの女中の聲して、どつと笑ふて後、御簾をあげて、乳母めいたる年がまへの女、十二三成美き男の子の手ひいて出、我をゆびざして、あの人をようごろじやりませ、大旦那様は堺でかくれもなき、分限者でござりましたが、新町の初夕霧にかゝつて、御身體をつぶし給ひ、お前様のお四つの年、おふくろ様と置捨にして、西國へ共申、又は江戸へござつた共聞ましたが、今におゆくえがしれませぬ、しかれ共手代衆此家督つぶす事をおしくおもはれ、おまへを取立御家相續せんとして、堺の屋敷は祖父様の御支配なされ、とかく瓜のつるに茄子はならぬといへば、此子が成人のすへも心もとなし、只色事の自由なる大阪近くにおく事、千里が野邊に虎の子を養ふがごとし、先此子廿才になる迄は、傾城町のない、人家まねな

る里すまいさすべしと御袋様と御一所に、此里にながされもの、様にしておかせらるゝも、傾城狂ひの疾をこわがりたまいての事なり、是長松様御成長あそばし、堺の屋敷へお歸りなされたと必々傾城狂ひを遊ばすな、けいせい狂ひいたしますと、あれあの男がやうに、夏も綿入着て、米もらいに成ます、よう見ておいてこんど迄わすれさせ給ふなど、穴のあくほごゆびざして、とくと和子に見せまして夫婦共に太儀じや、もはやよいに、いんでたもと、御簾の中へはいりぬ、吞助ふうふあきれて、是は各別成おもはくちがいと、少しは腹がたてど、ねだるべき手がらもなく、すぐくと愛を立出、其後女は吞助にいとまをもらいて尼となり、むかしの名によりて、秋篠寺のほとりに、草をむすびて庵とし、二六時中のつとめおこたらず、後世をいのるの外餘念なし、かゝる佛縁あつて、よい出家になり場を、何の末に頼みもなき身の、坊主をきらふて十錢たまれば、すぐに酒にして、吞助が今の姿の見にくさ、何をかしてけふを暮ぞとみれば、おなじ様なるならす者共を語らひ、大佛殿の新初の群集の場にむしろを敷て、辻打太鼓はじまりくと、聲をたて、見物あつまれば、扱おこはりを申ます、只今仕りますは、木辻鳴川はやり女郎全盛のなりふり、買手の大臣一座のしこなし、同く酒ふり口舌のつめひらき、并に太鼓持のそりやう、一角もらふて悦ぶ身ぶり、其外色町に有程の事はこまかに氣をつけていたします、今程は京都



に坂田藤十郎大阪に嵐三右衛門と申しまして、傾城買の藝の名人がござりますれど、それは狂言體で、私共がやうに、手帳を皆女郎につかいあげて、大分元手を入置ました、正身の我身の上にあつた事を、いたして御めにかけますと、世盛の時分に木辻狂ひをして、さま／＼の遊びせし事を、今仕て見せて口過と呑助は大臣になれば、おやまの九平次は、鳴川の女郎になる、ひの木玉の權平は末社の太吉になり、物にかゝりの虎右衛門は、やりての久米になつて間夫狂ひを改め、これぬ客を鼻であしらふ所、女郎は物前に無心の長文章あんするてい、又は退さふな客を取とめる時、恨みいふ内に、芥子かいで俄に泪のこぼしやう、爪をはなつに、細小刀にて二枚にへいで、いたまぬやうにはなつ仕様、大臣は参りもせぬ、お伊勢様を、うその相手に頼み、堅固なる長活の娘をころし、又は雪隠のやねふくほどの事を、大普請するなど、いろ／＼に身ぬけして、盆正月を請とらぬ前置の僞りたくみ、すいになつて遊びのおもしろなる最中に手前うすくなつてはのきかぬ所、親の異見聞ずに追出さるゝ身ぶり、又は身體皆にしてすみなれし家を立退思入見る人爰がよう似たと、大笑ひするも斷、家賣てのきし事は次第にくやくしく身にしみ／＼と、今もわすれねばうつる筈也、扱編笠をぬぎて、いづれも歴々さま方持合がござりませふば、すこしの露をうたしやりませふ、むかしは是がおもしろふて、此體になりましたが、今のうたてき、

慰に汗水たらしめていたしますではござりませぬ、せめては蒔て置た種が百ふ一もはへまして我々四人が口をぬらしたふ存まして仕ります、かりそめながら、一人まへに二千兩宛入ておきました藝でござります、扱此次に御目にかけますが、かの里の以前の女郎共が方からくれました状文、其外さま／＼替りしもの共を、今日の惣きり狂言に仕りますと、古つづらより取出し、先是が前の若紫が、外の男はつとめばかりと、諸神を書込し起請文、僞りのない所は、今の高橋が添状有、扱是が只今迄不便がりました秋篠が、みぎの季指たへま、當摩呑のかんなべ、右のよし野が三味線の撥、かづらきが根より切し黒髪、古小野嶋が、晝夜は皆僞りの筆の跡ひつさらえて反古の目三貫目が、百二十貫目餘の物、いづれもちかふよつてうそのかたまりに御えんのむすばしやりませふ、とかくお立あいの人々、我々を見ならい給ひて親よりゆづりの家業をはげみ、その家髓にはんじやうさせて、世間を御子息方に、おわたしなされ、浮世ひまになつて、六十過て年月の氣晴しに、女郎狂ひはするものと御合點なさるべし、わかい時參れば、血氣にはやつて、萬かさ高になり、漸々につのりは致せど、止るといふ事金の有内にはいたしにくい物で御座ります、爰を以て傾城狂ひに能



程といふ程がないと申は、此事でござりますと、其身の耻を一文宛には安物と、みる人笑ふてなげてゆきけり。

#### 第四 高洲ちもに茂る戀草

口三味線にのせて五十はいの無心語り出す上るり太夫

今時の若人何ぞ替た事にあらではおもしろからず、かぶき狂言にも、むかしよりありふれたる、まゝ母事も、手をうつ程にかわらねばよいとはいはず、増て鑿屋衆道女亂髪などいふ、古めかし事、辻打の放下師がはなしにもせざりき、上るりも又それにつれて、扱も其後それつらくおもんみればと、堅い仕出しにてはゆかず、下り破にての、天王立も取てのけて、あたまたから頼義公えぼしもなくて、着ながしにてぬれの所、力じまんの公平に、島原狂ひをさするやうに、序破急なしに、初段からやつさねば、がてんせぬ世界の間人、ふし事も、名所づくし四きの段、しるし捕馬捕は、文句あらたにつくり替ても、古代めくこと、もらひ札にて見物に行子供さへ、聞て頭痛がするといへり、さもこそあらめ頃日は、奉公人の請狀に、ふしをつけて橋々浦々迄もかたりなぐさむ、當世の人心、此氣を知て、何ぞかはつた思ひ付もせば向棧敷の下迄、入りを取るはしれた事と、見て來たやうに芝居事に

は、しんへんふしぎの清明もはだし、道満市郎兵衛といふ名だいのものに、堺で一芝居して見たき相談しかくれ共、じせつあしきとて取のらねば、長町の團屋のうらに、山本好太夫といふて、本文彌風に、にがみのある上るり太夫有しを、少銀にてかへ、何かなしに堺の浦に、やぐら幕をあげて、近日よりとかなばん出し、旅しばゐの人形役者をまねき、只替つた思ひ付の、趣向をのみ相談すれど、道具すくなく役者たらず、先人數ふそくにて、けふいふてけふなるあやつり、法藏比丘が増といふ、それはよい太夫共いせんより度々してと、今は阿彌陀でも錢のひかりが、なしの木の花、素見物も其やうにはくふまじ、とかく世間けいせい事をすく時節なれば、何とて是にたよりて、しあんして見るべしと、い人切、並に辨けい七つ道具の賣喰といふ惣げだい、是はならぬと一座の役者、腹のいたい程わらひ入れば、勸進本の粹じまんの男はらを立て、内はから其ごとく打込といふ事、給銀取ながら太夫本を、はじめぬ先からたをすふんべつかとしければ、口軽な役者が申は、また手摺さへ掛ぬうち、七つ道具の賣ぐいとは、きつさきのわるいかなばんといふ、是は尤と又しあんを仕なをし、然ば辨慶七つ道具の置所と替んといふ、是も聞ぐるし、第一七つ道具といふが、質物のやうで氣にかゝる、それに置所はなをく禁忌なりと、座中が顔



をいたす、惣じての事氣にかけ出しては、とめごのないもの也、太夫本惣げだいに情をつかし、とかくこんな時は、氣を替て、心のわつさりとした時しあんするがよかるべしと、好太夫ともない、津守の神社に詣で、それを高洲の色町、ちもりをながめありき、あれは鼻筋通り過ておもはしからず、是は物いひが氣にいらす、そこなは藪にらみの、白目がちなるがいやなり、三味弾ば頬さき赤し、髪のちいみに思ひつけば、手あしがふとし、小歌と、廿三へんも、ぐるぐとありきて見合、後には目まぎれして、勸進本も好太夫も、

大道筋に、西太といふ大臣、新町へゆかぬ日は此里に來ての遊び、是又替つて面白しと、難波の末社一兩人めしつれ、けふも晝よりぞめきて、北の端から打こめば、此所のあらゆる天神小天神局女郎迄、大臣御出といろめき、面々によそほひむりに見られ度ふせい、目にもかけず、いつもの方へつんざしてゆく時、山本太夫が局より出るにゆきあい、是は太夫あちておしやると詞かけられ、赤面仕ながら、あまり徒然にござりましたゆへ、晝食たべに立よりましたとわらふ、近比よい所で見かけられた仕合男、座付すんたらば、夕飯拙者申つくる、用さへなくば參れの、御意忝なし、しかし今日は太夫本を同道いたしたれ

ば、私賣口がござりますとて、是からひとりつきはなしてもかへされませぬ、さりとて殘念至極と申す、それさいわい太夫本ぐるみに、けふ一日は我らあげるでござると、すぐに二かいざしきに上らせらるれば、山本太夫勸進本がはいりし局の戸をたいて、よい事有りと表よりごよめば、太夫本もはや(三字缺)段にて、心の殘る事もなくて、外に出て何いやではあるまい、何事も我らかけじやと思召て、今少し給銀あげて給はれと、はやもたれ口を申せば、人にせつかく満足がらせておいて、跡で割付出さすやうな事ではないかと根をおす、とかくすかさぬ男共と、互にわらふて内に入り、二かいへもあがらず、はしこの下にて山本太夫がさゝやくは、よい仕合といふは、女郎を買ってもらふて、我物いらすに遊ぶ事をいふにあらず、上にござる今日の大臣は、堺にかくれもない借銀屋何とぞけふ取入つて、此度のしばゐに五十はい程出さす、しあんし給へといへば、太夫本をふくみ、近頃よい氣の付所、あつばれのはたらきと存る、人をふすくる事我らが得物、すいぶん兩人心を合、おもしろおかしう酒をしいて、酔せられた所を見合、右のねがひを申かけるがつてんといへば、是然るべしと内談きはむるを、臺所に、たねといふて新町のやり手の關山、此所の内儀とねんごろにて、咄してゐたりしが二人が談合を聞て笑ひ出し、酒しいて



酔す方便はむかしの事、ちかきほどは京も大阪も、酒を薄ふ作るかして、きゝめが見えず、それをなせといふに、前々は大正におもしろくのませて、此上に御無心を申せば、夢中になつて拙者正月請取たと、跡先なしにいはるゝを、町よりのおつれを證人に、つい物にしけるが、此ほどは御客の酔助を見すまいか、かれば、帷子時の事は耳に入れて、小袖じぶんの事はきかぬ顔して、いつもさだまつて壹歩やらの人に、二朱つき付て、いかふ予は酔たさうなどいはるれど、酔れぬ證據には、蚤取眼をして、太夫殿はごこへかしたぞも二時ほどになるが、一向もらひ手があつてもらふてくるれば、今迄の遊びがたいになる

へ出やれと申せ、是は爰においた扇が見へぬ、我らが持ちしは十一本骨の、ゆうせんが繪に、ゆく水に茶筌を書て、ながれをたてるといふ古事じや、こんな寺扇ではなかつた、尋ておこせと、こまかな覺へは、酒がうすいゆへに、本酔の出ぬからなり、皆さまも大臣へ無心おつしやるがてんならば、並酒盛た分では、我をわするゝ程な、根へ入し酔は出ぬものでござんすと、さすがは大所にすむほどあつて、酒がうすいとはかしい氣のつけ所と、兩人我をおり、あるじ夫婦を頼み、大和屋のつて置酒の中にて成程濃いのをとゝのへて給はれと、一角出せば、ていしゆもおかしい男にて、大臣様の酔のつりしじぶん御案内頼

みます、拙者も御無心の尻馬に、のつて見たふござると大笑ひして、取につかはせば、二人は二かいにあらり、太夫本を大臣へ引合せ、萬事頼奉ると、そろゝつけいりして、ごふやらかふやら酒にして、大方熱もまはる時、太夫本こらへ情なく、しばゐの事申出し、五十兩の金がとゝのひませいで日和のよいかんばんは出しながら、今日迄得はじめませず、大勢あそんでおります段、むねん千萬何事も旦那お影で、惣座中うるほひます事、何と太夫そふでないか、成程勸進本申されます通と、詞を合して申せば、大臣胸につかへながら、女郎共にかねて盛を申て、たかうのぼつてゐる最中なれば、むげに返事もせず、五つ／＼に見へし時、何とぞ髓に請合せ度思ふ所へ、くだんの大和屋が三年酒を、はつたりと間をいたして、勝手から持て参れば、時分はよきぞはや盛と、大盃は脇になつて、中椀平皿後は錫鉢にて、あいの、又あい、大あいと申出して、むすびのしに小板の焼味噌、漬鯛に、ほたではありやと、さいつさゝれつするほどに、先一番に無心の頭取いたせし、かんじんの太夫本、大臣より先にかたづけられ、もんたいがなし、され共山本太夫跡にひかへて、旦那みだれ姿を見合せさいせん太夫本が申かけて置ました、五十兩の金子の事、しばゐつとめます内、お取替なされ下されなば、惣座中は申におよばず、木戸半疊、やぐらだいを打ます、小ぼうす迄がうかむ義、はかりながら女郎さま方、御取なしを頼上



ると、長口上申出せば、成程／＼其方かつて次第に、手形した、め證人汝印判もつて取に參れ、是忝じけなしと悦び、あまり氣さくなる頃のあきやうこんなきおい口には、何でも云たらなりさうな物と又手をついて迎の事に、私かくや入の衣裳二かさね、見事にあづかりたいと申す、それ程の事今迄申さぬは、近頃小氣な男め、金子請取に參る時分、染色定紋書付て參るべしとの御意、有がたく畏る、時にていしゆも罷出て、太夫殿もはやおねがいはないかと、口をこちめ旦那へ申す、やねが殊外損じまして、雨ふりの時分お客がいたしにくうござります、おかげでもりをとめます訴訟と、女房共が私に心へて、何ぞ手がるい無心申て見てくれと、たしかに言傳仕りました、お前へ出ませぬは、當月産月にて、二かいのあがりおりあぶないと申によつて、私どか／＼と二軒役の御せうと申す、やねのふきかへに甘雨、みだい所に袖二疋に、真綿そへてはいやかとあれば、是はけつかう過ますと悦ぶ、然らば明日々々といひながら寢入給ふを、高間といふ女郎、物なごきせまして、此醉のさめぬやうにと、いづれも産所人の夜伽するやうに、しづか／＼にと物音せずにもりある、しばらく有て水乞せられ、もはや歸りてよい時分と、すぐに起て、おかへりごしらへ、こんな大臣様よその風にあてますなど、おかごにのせまして御供の外に、男二人お宿ちかく迄送らせ、山本太夫始をの／＼おちつき、勸進本をゆすりおこし、願ひ事の上

ゆびせしやうすをかたれば、ね耳へ小判の入し心地して悦び、どかくくはほうはねてまでじやと、ぬからぬ口を申せば、いづれもどつと笑てこんな事は急に手取したがよいと、二人は旅宿にかへり、夜が明ると其ま、大道すじの、西太方へ參り、昨日御意なさるゝ通、預り手形したゝめ、印判持參仕るよし、年若な手代を頼みて申入れば、大臣二日酔のさむる程おどろき、頭をかへながら表に出て、そんな事いつ申せしぞ、近頃それは云かけと、大きにけんの顔付、兩人あんにさういし、きのふのだん／＼申せば、いかないかな一つも覺ぬ、公事にしたかおしやれとおくに入るゝ、是を思へばあまり濃酒をもち過して、大臣かつて覺えぬも尤ぞかし、此後は女郎狂ひ、其外浮氣事には、かりそめの約束も、當座手形といふ事になるべし仍而如件。



けいせい色三味線 五

目録 添之卷

第一 室むろの遊女うでよめに氣きをはりま湯

女郎ぢやうらうのこらすそろふたり座敷ざしきおごり色いろにかかつて身み體たい棒ぼうにふるうごんやの  
延助のべすけ

第二 焼取やきとりにする鶉野うすのの仕掛

た女郎

第三 稻荷町いなぎに化まを顯あらわす手管男

上方かみかたにない下の關せきの女め狂くる言ことめづらしきは髪かみ長なが辨は慶けい目角めかくの強つよき小倉こくらの大臣だいじん

第四 詞ことばに角かくだゝぬ丸山まるやまの口舌くつせつ



第一 室の遊女に氣をはりま瀉

花前に蝶まふ執心の紋所

抑是は播州室の明神につかへ申、神職の者のおとし子なり、扱も都の島原と當所室の遊女町とは、同商賣にて御座候へ共、いまだ一見申さず候程に、此度思ひ立當地の色里へと急候、はりま瀉室の色湊は、西國第一の分里、遊女もむかしにまさりて、風義もさのみひなびず、多くは大阪の女郎共の風をまなび、酒ぶりもよく一座もしめやかに、いきはりもおぼへて、折ふしは口舌の浪も立つべく、たち花風呂丁子風呂廣島風呂、是皆爰の揚屋なり、かの神主のおとし子、高砂屋の松右衛門といへる、あてじまいな名を付し所知の末社をともなひ、情に亂るゝ柳風呂に入て、さつこのみかけ、扱ていしゆにあないさせ、にしやひめちや但馬や是三軒に、九十餘人の姿を見つくし、其中に風俗よく、あちな所のある女郎お名はとていしゆにたづぬれば、花前さまと申て全盛の米さま、端歌名人にして、又なき

しと床脇になをし奉り、盃事すんでの上に、きゝおよびし歌をのぞめば、京大阪で萬四遠柳

—傾城色三味線—



がうたふて仕舞、小歌比丘尼の手にわたり、末のすゑになつた歌も、此里でおもしろく、あつはれ名譽のお上手、梁つばのはこりも落ぬる斗、虞公もはだしにて、きく人心うき立所に、秋のすゑにはめづらしき蝶飛來りて、小歌につれて舞有様人間物をしらぬ也、誠や花前に蝶舞紛々たる雪のはだへにちかづく、柳上に鶯聲を出し、妙成歌をうたはせらるゝ故なるべし、此蝶も片々たる金氣があらば、花前をあげてまはすべきに、自身舞あるくは大臣蝶であるまいといへば、松右衛門が申は、惣じて蝶は大鼓のはて也、既に露をなめて命をつなぐからはとわらへば、ていしゆおかしい男にて、あれ小藤さま蝶が我ごとびあがるさまは、さながら身あがり蟲共申べき、あはれ茶挽草にとまらして見たしと、女郎のいやがるゝ事申つくして、一座是を興にして、心よき酒をのめど、花前は更におかしからぬ風情にて、かの蝶を扇に取うつし、けふも又ござつたかと、人に物いふごとく、しかも涙ぐみて是はけうとし、さゝに酔れてあれか、たゞしはあんな事が此里のならひかと、大臣ふしんし給へば、松右衛門もがてんのゆかぬ顔して、花前さま胸に手はござりませぬかと申せば、成程脇から見さんしたら、氣もちがひしかとおぼしめさん、始てのお客に、あさましき我おもはくの人の姿を見する事と、遊女にはめづらしき本の涙をながさるゝ、是はきたいのためし、扱は此蝶はおてき様の執心か、どうやら小氣味のわるい事と、おくびやう

なる大臣、すこしふるひごゑにて様子をたづねらるれば、はづかしながら此蟲は、當國あはしにかくれなき、有徳人の三男、三四さまと申せし人の執心なり、此大臣十七の年手代衆御供にて此里へ御出、風俗當世流にして、しかも角前すまへ髪かみの器量よし、戀のきくさかりに、生れついて大氣に、お心も廣島風呂に入給ひ、我身をこの御さしづにて、はじめて御げんなりしより、眞實にいとしようなりて、初會から互の心底をあらはし、起請迄取かはせし事、凡江口の君此かた、つゐにはじめたお客がたに、誓紙書しは我斗、それよりふかき中となり、あはぬ日は文してかはらぬ心をしらせ、あへばはや別れの且を思ひやりて、酒事やめて語る夜も、いつよりはつゐ明やすく思はれ、かうした事もいはふ物と、詞残りてとがなき鳥をうらみ、おかへりの跡はいつとも涙の淵に、しづみ入程のおもはくなりしに、世には子にむごき親ごも有て、惣領次男は所にて、家業の榮花に仕付給ひ、おいとしや御器量御智恵は、兄さま達にもまさりし物を、跡から生れ給ふとて、父母の仰にて、一子出家すれば九族天に生ずといへば、三四郎には出家をどげ、我々がなき跡をどぶらうべしと、おしや過つる春の頃、十九歳にて押て出家になし給ひ、書寫山の何坊とかやを師と頼み、かの寺へのぼし給ふより、此里への縁切れて、あはぬ思ひに胸をこがし、戀しゆかしの數かぎりなく文して寺へおどづれしに、あなたもかはらぬ思ひにてたとへ此身は出家と成、あ



はで此ま、此山に住みはつる共我一念は以前にかはらず、折ふしごとにもまみゆべしと、御返事有しより、形身にぬき置給はりし、お小袖の定紋の、あげはの蝶におぬしの一念入けるや、小歌にひかれていつとも御紋の蝶ぬけ出、かやうにたはふれ給ふ、淺からぬ御思はくを、思へば／＼ながれをたつるといふ身程、世にかなしきことはなし、我つとめの身ならずば、末々あひますしあんもあれど、歌のふしにてかこの鳥かやうらめしき浮世と、わけもなふ取みだされければ、大臣慰は脇に成て、きく程哀成物語、しらぬ事ながらもらひ涙をながし、遊女町は氣を晴す所と存じて、大切な銀を持つて來て、是はわざ／＼暗に

あらば借りたいとの仰、幸當年こしらへましたがおざりますと、早速取て參つて奉れば、太夫ことない悦びにて、三四形見の小袖を取よせ、大臣に斷申小袖をさせかへ、かづらに成べきとのぞみ、銀出しながら、しつかいそれは人の形になつて、きさまの持あそびものに成やうな物なり、是は太夫殿に我らが買ふ、といふものなれば、けふの造用其元か

ふられふより是もましと、御好のごとくかづらもかけ、小袖も着かへて三圍さまといへば、又はさぬきの天狗がつかんで御内儀さまにした共申、兎にも角にも此の身の上、福徳の百年めよき仕合なり、相かはらず呼つつけて今の花前も、小歌の上手といへり、始の花前は情あるやうに見へて、男いくたりか思ひつき、請出す沙汰せし人あまた有中に、鹽の出る所に正といふ男、あぼしの三四とはりあひし最中に、何ぞ三四より増つて上かさ成事をし、女郎に思ひつかせんと、八月の末つかた、末社共引つれ、梶久磯に金銀つかんで、ばつとしたるつけとどけ、忝き數々の酒事、すいぶんとさはげど、さめぎははやく調子めいりて、き／＼なれし三味もおかしからず、何ぞ替りし事はないかと申せば、内儀がさし出で、色遊びは春夏、扱は盆の大おどり也、此所は七月十三日切に萬の取やりを互にすまして、十四日より盆の有様、又興有ておもしろきおどりぶり、見せませいで残りおほひと、くどく申せば、何が着かてんでわせた大臣、甚氣を持、それはなんと銀づくでは今見られぬ事かといふ、成程女郎様方さへ大勢まねけば、只今もなる事と申、是はいと心やすき事と、跡先しらすの大氣な末社共にいひつけ、室津の惣買と觸て、女郎あるほごしきりて、座敷



踊をもよほし、風も身にしむ時分に、皆々風よきおどりかたびらを着て、思ひ／＼の仕出し、ひとりもにくいはなかりき、大臣は床の上の卓香爐を取し、くれなるの敷物しかせ、さも大やうに座し給へば、左は追蹤箔安と云、浮氣醫者療治を捨て、今旦那ひざもとさらすの末社となり、物下さるゝ脈あぢをぞうかひけり、其外御きげん取の可笑中間六七人なみゐて、おどりおそしと待あけたり、先但馬やのくれなる、ばつとしたる出立、すそはたつ浪に入日のもやう、一しほ色ぶかい井筒がしやれたとりなり、いかにしてもすいた風、命取とは此君々々ど、見る人鼻毛のある程のばして、くりかへしかへしてもおもしろやおだまきがおどりぶり、其次は大ふり袖をひるがへして、目にたつ風ながら、ごこやら足どりに初心な所有て、是ぞおどりの手ならひいろは、たゞうつくしくつま川がにがみのあるも一子細有てよし、姫路やの若狭が、すらりとしたも見よく、若紫小紫のりはや川いさごみちん程もにくげのない君達、そろふたり手拍子、腰付いづれもうまさふにて、けかへしはねづま引足のうるはしく、大臣をはじめおの／＼魂をとばし見る所に、一きはすぐれて五人一様に、住吉踊の出立、笠につけたる紅の絹にかくれて、誰共お顔のしれぬが氣の毒なり、箔安あれは誰々じや指て見よとの御意、かしこまつて足どり身のひねりに氣をつけ、四人はしれて中一人がしれぬといふ、まづ四人は誰さまぞ、夕霧朝霧雲井あげまきなり、

しからば中なは、幾世か久米の介なるべし、いかな／＼そんな君にてなし、凡此里に女郎衆百人あらふが千人あらふが、我等のしらぬは一人もなし、暗で足音斗きいてさへ、何と云よねじやどがてんいたす法師め、見ちがへる事でない、どうでも是はまぎれものじやと申、ちか頭粹自慢なる入道に、さらは笠をとつて、あの口とめよとの仰、承はつておそばの末社罷立、かのしれぬおどり子の菅笠とつて見れば、丁子の又助めなり、扱もにくしやれどううせたと、おの／＼立かれば、こりやならぬとにげてかへり、おどりも是をかざりにくづれて、跡は大勢の女郎、大臣を取まはし御きげん取ての大酒盛、あつはれ寛活なるあそび最中に、大臣申出さるゝは、さいせん箔安が此里の女郎何百人あつても、足音で誰じやといふ事を知ると、所自慢いたせし間此坊主が目をふさいで、足音で誰じやと名を當じやぞとあれば、箔安悦び、六脈は取ぞこなふ共、是斗はちがへじと、人もなげなる知自慢、いづれもにくみて、紅打の手細にて目をふさぎ、さあ是からが始りと、下張の平助といふ末社、尻をまくりあけて、箔安が鼻元ちかくよせ、音なしに二つ迄すかしければ、是は鼻がもげるは、さりとはおたしなみ成女郎、口中の掃除めされ但し息のくさは肺のさうに病あるか、腸胃に積熱あるかの故也、當歸連翹飲などを、二三貼しんじましたいと、



ぬからぬ顔してはいざいを申、一座おかしさを胸におさめて見物する、女郎はいづれも聞  
しられぬやうに、足音をやつして、さまざまの身ぶりおかし、宿安は五音の占のごとく、  
小首をかたぶけ氣を付て、今の大またにあるかれしは、儘に金吾ごのとはしれて有ながら、  
端女郎に望なければ、態名をさぬ也、まそつとよい衆御出なされと申、いかさまよく聞  
しる事よと、いづれも我をおり、みふねに付こゑさして、淀川と云悪よねを、しづかに足  
音させて、さあごなたじや、さして見よといへば、足音とこゑとが替りて聞明がたし、今  
少ちかくにておこゑ聞たしと申せば、みふねをばちかくよりての付こゑ、きくふりして足  
音はかまはぬ、御こゑはかくれのなみふねさまにのる氣じやと、やがて取付目がくしを  
取て悦び、にがくしくもはなさぬ時みふねかしこくも、それ／＼ふどころから、一步が  
おちるはといはれければ、ごれ／＼ごにこわき見するうちに、袖ふり切てにげ給ふ、い  
そがしき中にさりとは智慧かなと、人皆ほめける、宿安は腹をたて、うそついで成共、  
われを嫌ふてにげたがる君を、とらへてからおもしろからすと、不興してやめける、それ  
は汝が戀より欲の方がふかき故也、懐に入たおほへのない壹歩が落るといはれて大事の君  
を取にがす、さもしい心入の法師に、何とて女郎思ひつくべきや、是ぞ浮世のはやり詞に、  
かなはぬ事をいしやばんといふは、汝が事よとわらはれし、大臣も跡先の算用なしに、め

つた春におごり、つゝに身體棒にふつて、うごんやして浦人にすゝらせ、五十通て始て金  
銀は大切なものと知て、せめて今迄つかひすてし、三分の一程まうけたしと、すいぶんか  
せげど、のばしたき銀はのびずしてねがひもせぬうごんと鼻毛は今にのびけり。

第一 焼取にする鶉野の仕掛

同國賀西郡鶉野といふ所に、遊女町あるよし、都へかへりて咄の種にと、上方の小間物や、  
國廻りの御師の手代難波の米問屋の若きもの、かれは三人西國筋の銘々用を仕舞、同船して  
此浦ちかくつきしを、さいはひに、あなひ知る人先に立、色めづらしく心玉も飛で、うつ  
ら野へ行て見れば、格子局といふ事もなく、軒まばらなる板屋に六七八人居ながれ、むり  
に見られたき風情、さのみそいですつる程の所にもあらず、爰での命取、高橋常盤すがの、  
此君達は酒ぶりもよく歌もうたひて、色絲も見事ひかるゝと聞て、是は興に成て一しほ酒  
も、のんだやうに思ふていふてやれば、御三人ながら御隙入と申、是は思ふたよりははん  
じやう成所、しからばこれ成共、一座の興ある女郎をつかめと、重て三人申てやり、あけ  
やといふ事もなく、親方又四郎が奥座敷へ入て酒二三盃のむと、はや膳もつて罷出、爰元



は上方どちがひ、物事不自由にござりますれば、御馳走申たふてもならぬがじやうでござります、御きげんやう御食あがつて下されませふと、取賄ひする男が手をつゐてゐんぎんに口上をのべ、扱食次あつかいを持って出、ひたどしいるに、いづれもこまり、とかく氣根次第にしやれといへば、後にひたるふないやうに、したゝめなされませと申、されど女郎は箸をもとらず、上方の事誰がいふてきかしかけるぞいとやさし、小歌もさのみ古き事をもうたはず三味も所相應に弾て、折ふしあぢな事をも申、いか成ものか爰に来て、かくは仕入けるぞと、あないせし人にとへば、此里の女郎は、諸方へ壹年半年づゝ御見世をいたし、諸國の人に出あひぬれば、おのづからよい事も見おぼへめづらしき事も聞おぼへ侍るとさゝやかか、是律氣な客にあいつけ、虚もすくなふついで、誠おほき心からなり、さらにくから

おまへさまは京でござりますか、さだめて御内儀さまがござりませふが、こんな事を聞しやりましたも、お腹立られなげうちなどはなされませぬか、お子さま方はおいくたりござ

りますぞ、かならず御子さまのおためなれば、悪い事に銀なごつかはぬやうになされませい、一度でもあひました殿達の、御身體がならぬと聞ば、中々苦になりました、かしらの毛のぬける程に思へど甲斐なし、田舎商ひなされますなら、すいぶん御情入れられました

申侍る。

### 第三 稻荷町に化を顯す手くだ男

付り氣のことをつた下の關の女かぶき

いふ心にて名付といへり、是此里通ひにこりた人のわる口を、聞ながしにして詠とがやるに、



まき、扱は宮やの金山堀出しな君達京女にさのみかはる事なく、是三人をやくそくし、小倉の大臣を先にたて、揚やへ行ば、日比よろしくさはぎおかるゝと見へて、大座敷をわたし、ていしゆ夫婦入替りて、さまぐのもてなし、とやかくあいさつする内に君さま達一所に御出、早速盃事して、なじみのなき都大臣は、何いわるべき種もなく、さりとはすまぬ顔して、作りつけの板天神のごとし、所自慢の小倉大臣、此體に氣をつかし上方人に替りしあそびを見せて、一いさめいさめんと、ていしゆをまねきけふは大切なる珍客あれば、此里の女郎かぶきをもよほし、御目にかけてあれば、これは上方のお客様へは何よりの御馳走、都にては壹萬兩でもならぬ事を銀壹枚でお氣のはらぬおなぐさみ、おつゝけきやうげんはじまりと先番付を御目にかける。

女歌舞妓女郎役人替名付

當流義經北國落

付、色狂ひは身の爲にあたかの湊、並富樫が關をこおりものゝ寄合

一源のよしつね からはし

一むさし坊辨慶 花まき

一かめいの六郎 あふさか

一かた岡の八郎 もんの助

一いせの三郎 まんざん

一するがの次良 木々の

一くまい太郎 もん木夫

一源八びやうゑ さかた

一わしの尾の三郎 しら玉

一かねふさ からさき

一とがしの左衛門 かしの

其外女郎衆あまた出さんす

是が此頃の仕出し狂言、男の所作を女郎のいたさるゝゆへに、色顔むすんで取あひのせりふにも、につくいやつてござんすなど、やさしき所あつて、又外になき替り遊び、六軒の女郎のこらす爰にあつまり、それ〱の役々きわめて、罷出たるものは、とがしやの左衛門といふあげやにて候、扱も源九郎つねさまは、都にてさまぐの色狂ひばつと世上に名の立て、こうとうこうまつなる頼朝様のお耳に立、つゐに御勘當あそばし都の戀草に御身のかくし所もなく、舊離切られて行末は、あづまのあく所友達に身體よしのあるをたのみ、日比の末社びんぼう神のつきもの迄、今にはなれず、以上十二人のこもう僧とならんして、あげやの分もたてずして、ぬけてお下りあそばすよし近比とゝかね仕方なれば、此所に催促の關をすへ、家質のやぐらあげ、借錢の淵に高利の石かけつみあげてもがりのさかもぎさびしく打、書出しひつしと立ならべ、銀取錢取さいふかたげ、斷も佗言も聞入れ



ぬ顔つきにて、くすみかへつてゐるていは、さながら大海日にことならず、いかに誰ぞあるかゑ、こも僧立のおとをりならばつばね女郎のごとく、むりに袖を引とめまじや「旅の姿は浅黄むく伽羅焼袖やにはふらん、いたはしや義経は、算用なしの仕過しに、都の諸分不埒にて、遊び所のあぢわろく、大臣ぶれと請つけず、氣じやうを出せと金銀の、ひかりもうすきはし月夜、鎌倉殿の勘氣を得京のすまひも成がたく、おもひもよらぬたびはじめ、行さきくゝに負ふせ方、待かけ居ると聞し召、末社もろ共こも僧の姿に替る浮世かな、かの焼印のあみがさも、熊谷笠に着替りて、過し奢の戀風に皆吹上し尺八の、ねてもさめてもわすれぬは、都の遊びなりけらし、扱御供の末社には、龜井片岡伊勢するが、わしのおの三良熊井太郎、辨慶は先に立、十一人の太鼓持、いまだならばぬこもすがた、墨のくわら袈裟かけまくも、我旦那は頼朝殿の御舎弟にて、殿ぶりようてしわからず、天晴よねおもへは口惜き勘當やと、年比もらふたるもの、數々、思ひ出してぞなげきける、扱あてのない旅なれば、路銀はあるかど面々が、巾着紙入さがしつゝ、拾壹人が其中に、取あつめて金子壹兩壹歩貳朱、銀が五匁錢貳百、むかし旦那の世ざかりには、編笠茶屋にも是ほどは、露にもうたせ給ひしが、今大切な銀なれば、随分始末の夜をこめて、日數かさなる山を

越あたかの浦に着給ふ、辨慶いかに申上候、しばらく此所に御休みあらふするにて候、判官いかに辨慶 辨慶なんぞござんす 判官只今掛こひの申て通りつる事を聞て有か、あたかの戀の湊には、ごかしやの左衛門が残り銀をせがまんとて、催促人をかたらひ、あけ錢の關をすへ、似せこも僧を堅く吟味し、是非に皆濟さすところ申つれ、辨慶言語道斷の御事にて候ものかな、扱は御下向を存てせひ乞詰んと存立、先へまはりて待懸たると存候、物前のごとく、出ちがふ事もなりかたふ候、先此かたはらにてしばらく銀の御談合あらふするにて候、見なくちかふよりもがりふんべつを出され、此借銀を手をよくねるしあんあらふするにて候、龜井六郎私が存ますは家質義理あいの手形銀にもあらずなんぞや證文もなき揚錢の引残り、何ほどの事候べき、只書出しを引破て御通りあれかしと存候、辨慶しばらく、近比それははりのつよきいひぶんにて御ざんす、此揚せんの書出し一卷、引やぶつて御通りあらふするはやすき事にて候へ共、さやうに横と出候は、山こかしのやうに申たて、死に一ばいはいふにおよばず、おそろしき手形銀迄おそい來らば、わすか貳兩に足ぬ路金にて、いかでかふせぎ申さるべき、たゞ何共して無異の義が然るべからふすると存候、判官ともかくもそなたはからはれ候へ、辨慶畏て候しからばすいぶん口さきをもつて、ちよろまかし見申べく候、旦那には御笠をふかくとめされ、いかにもひんなるこも僧の様に、我等



より引さがつて御をり候は、よも大臣とは見申まじく存候、さあ〜皆々御通り候へ、  
さがしや左衛門なにもこも僧達の御通りあると申か、心得てある、なふ〜こも僧達、是はあ  
げせんをおひたまふ似せこも僧衆を吟味仕り、もし引残りあるにきわまつたるこも僧衆は、  
身の皮をはいで成共、急度算用相立させ候、さもなきにおいては色里の大法にまかせ、桶  
ぶせに仕る事にて候、辨慶委細承り候、それはあげ錢をおひちらけたるこも僧をこそ、吟味  
したまふべけれ、色町の出入はいふにおよばず、家質米屋の銀迄も終に一錢もおふたる事  
なき誠のこも僧を、いかで桶ぶせにしたまふべき、いづれもはやくとをられ候へさがしや左衛  
門いや〜其手はくわぬにて候、御身達が口がるな物いひ、あちな手付などのおり〜見  
へ候は、何とつゝみたまふとも、末社達と見申てこそ候へ、四も五もくはぬ揚やのていし  
ゆを、偽り給ふはふかくなり、もどり虚は我等が家、詞のあまきうちに、おの〜取もちた  
まひ、大臣のお名の出ぬ様にいたされ候は、然るべう候、辨慶それはすいばまりと存候、も  
つ共、我々腹からこも僧にてもなく候、たのみし旦那三ヶ津の色里を見めぐりたまへ共、  
御心にかなふ美女なし、さるによつて筋目にもかまいたまはず、美なる娘あらば、それを  
乞請、一生の妻とさだめんのぞみは此とおりと、姿のしな〜一つ書になされ、此註文に  
すこしもたがはぬ娘を、尋出せしものには、そのほうびとして、金子千兩取すべし、なん

ちら廣い世界なれば、さがし出せと仰をうけて此かた、諸國を尋めぐるに家々をよい娘は  
あるか〜ことはれもせず、かくこも僧の姿となり、尺八の音にひかれて聞に出る女を註  
文にあはせて見てまはり候へ共、千人の女千人の男の目にいればこそ、壹人もあまらず、  
それ〜のかたらひをなせば、萬人の目によきとさだむる女、いまだ見あたらず、かく尋  
かね候、貴殿も揚屋と有ば、色のかす見る商賣なれば、もしおもひあたりも候は、御し  
らせ下さるべし、さもあらはほうびの千兩をすそわけたそうするにて候、さがしや左衛門近  
比それは御くろなる御事にて候、さりながら、もし尋あたり給は、一夜けんぎやうに  
成事、路銀も旦那からのあてかいて候は、どの道にもそのゆかぬ事にて候間、すい  
ぶん目の悪ふなる迄見あるかれ候へ、只今は大臣も末になりて、我等ごとき揚屋商賣も  
あはぬ世と成て、たま〜よき客とおもへば、人の嫌ひ手をかづき、物にならぬ人あまた  
にて、揚錢夜食御所柿迄、喰ぞんになるがかなしく、かやうに先々へ出むかひ、さいそく  
たす事にて候、まだもして見やうならば、おの〜のやうな千里一はねなる事にて候、扱  
女見に御通り候は、定て美女のすがた註文御座なき事は候まじ姿の註文をよんで御聞せ候  
へ、辨慶何と註文をよめと候や、心得申て候、もとより註文あらばこそ、懷中書出し壹通  
取出し、姿の註文と名付つゝ、たからかにこそよみあげけれ、それつら〜おもんみれば大



臣功者の目利の色は、直打の高下にかざらず、丁字油のながき髪に、匂ひをかづく人でなし、爰に中比うつけおはします、御名を無生とんてきと名付奉る、幸の美人もなく、艶女ありがたく、灸穴背中にあらず、艶顔玉をあざむく、姿は雪のふり袖をひるがへして、花車なそだちを懇望す、かほごのよい女郎の、あらなん事をかなしみて、可笑中間の末社ども、諸國を女見さす壹年半年の、奉公人の輩にても、此圖にあいなば、奥間にして樂にはこらせ、汝らには數千兩のほうびを取らせん、奇妙希有の註文と、天もひやくとよみ上たり、催促の人々帳をけし、おそれをなして通しけり、時に見物の小倉大臣、目はやき男にて、跡なる笠をかたぶけしこも僧こそ、ふしぎのものなれとまれとこそ、辨慶あふしばらく何とてあの人斗どがめさんす、さればさいせんより十壹人の女郎衆を見るに、風俗足取いづれも此里の風にしてかわらず、此壹人何共のみこまぬ所あれば、笠を取て何やの女郎ぞ、對面せんためとめましたとある、さすがは此里へ數年おかよひなさるゝほどあつて、目すいしやうかな、此とめたまふ女は、私の親方のもとにつかはれます、すぎと申ます下女ござんすが、今日あたかの狂言に、面々役わりをいたせし中に、常陸坊になる事はいやと、ごの女郎衆も役目をきらい給ふゆへに、せふ事なさに、此下女をひたち坊にして、あたま數に入て出ましたとある、是はいよくがてん參らず、何のむつかしい役もない、ひたち

坊さらはるゝは、様子のある事かと大臣ねをおして尋られければ、されば遊女はいづくも人様の評判で、おもひ付のないお客も、お心のむいて來る物でござんす、しかればあれはわるゝ役目はいやと、ひたち坊になりてがなさに杉を役人にくわへましたとこのことより、さりとはいひまはしの上手な女郎、そんな事はまそつとまへ方なる男におつしやれと、むたいに笠をとれば、此邊へ商に參る小間物賣の、丁子の小平次なり、是はといづれも肝をつぶせば辨慶になりし花巻といふ女郎泪をこぼし、今はつゝむべきやうなし、はづかしながら此みとせが間、小平次殿とは人しれずあいませしに、此比親方の耳にたちて、かたくせかるれば、あい見る事はおもひもよらず、文の取りやりさへたへて、なつかしさもゆかしさも、大方ならぬおもひなりしが、けふ此家にて狂言あるをさいわいに、傍輩の女郎二人を頼、役人の中へ入れて、かくやのしゆびを見合、ちよつと成共あいましてと、おもふ心から跡先のわきまへなく、かゝるてくだ、さぞにくうおぼしめさん、そもくゝいひかはせし始より、二人共に長ふ生る所存にあらず、いかやうにも御心次第になされませと、兩人共に思ひ切たる氣色、大臣感じて是社本戀成べし、男は家業をわきになし、戀にやつるゝ身のしほらしさ、又女郎の心入身の爲に成事歸り見すに、情は誠有仕方彼是やさしう



思ふから、此事さたなしに、すへくも逢する才覺して、大臣名代にして内證は小平次を  
知れる人のいへり。

第四 詞に角のたゝぬ丸山の口舌

付りのりあい舟は諸國の樽箱

行ず、一生をろばん枕にして、寝ても起ても始末の二字をわすれず、よい事しらすにかせ  
ぎ通して、次第に貧になる事、是ばかりは不審はれず、花の都も金銀なくてはおかしから  
ず、よしや難波に足をとめて、死ぬる迄かせぎ見るべしと、三十三の年散々の仕合にて、京  
を立出伏見へ朝食時に着て、京橋にてしたゝめし、是より三十石に乗つて行に、さま／＼  
の旅人あたご参りの下向揃のゆかたに花に襟をかたしき、けふ一日の道のつかひをさん用  
するに、散銭かりておぼへぬといふもおかし、あるひは江戸飛脚、大阪の米屋らしき男、  
奈良の具足屋、高山の茶筌師、近江の蚊屋賣、京の小道具賣、山伏藪醫者、鼠衣着たる出  
家のそばに、茶やの二せめく女、かしまの事ふれ、旅芝居の役者、丹波の百姓、拾人よれ

ば十國の者、いづれも咄しかはりて、當年は世の中でござる、うらが國には大分植出しをい  
たしたといへば、大和には猫またが赤子に化て、油をねぶつたとの、いかにも／＼坂田藤十  
郎はけいせい買の名人でござる、とかくねんぶつさへ申せば極樂へ往に疑ひはない、近比  
有がたい事、今年ほど鯛の高事もござらぬ、此比の咳氣は敗毒散では參らぬ、夕べの嵯峨  
は本でござつたかと、思ひ／＼に出るまかせに咄し、聞ほどおかしく乗相の氣さんじは、  
おれそれなしに横にねて、そらいびきしてとなりを聞ば血氣な男三人旅辨當をひらいて酒  
の最中にて、ひとりがいへるは、鶏喰ふて酒をのめば雨降に合羽着てあるくやうなといゑる  
詞儘に長崎者とおぼへたり、何ぞぞ是は仕掛次第で、一盃は吞さふなものと、盃をやめて  
火繩取出し、おむつかしながら火をひとつとさし出せば、火も進上いたさふず、まづ此間  
をして下されと、中腕をあてがへば、望所とむくおきにして、ごなたのお盃でござりますお  
てもと見まして、お聞いたさふと罷出ば、三人の男共一度に手を打、そなたは茂太夫ではな  
いか扱も久しや、先其姿はごふした事ぞ、國元にては兩親のなげき、お内儀の愁歎大方な  
らす、あまねく日本の地をたづねられぬ所なし、いかなる所存あつて、何方にかくれ居ら  
れしぞと、ねんごろにたづぬるほどがてんゆかす、私はさやうのものではござりませぬ、



生國は都にて、身體しもじれ、大坂へかせぎのため罷下ると、誠を申せど、いかなく三  
人實にうけず、さりとは茂太夫きよくもなし、親達内儀に不足あつて、家出をいたされふ  
さま、竹馬よりの友だちに、何の恨みありて、是ほど迄にはつゝまるゝぞ、其方は長崎  
の戸村屋徳甫の一子、茂太夫にまがいなし、三年以前に菩薩祭見物に出られ夫よりかいく  
れ見へず、陰陽しにかんがへさすれば、天狗にさそはれ、讃岐の金比羅あたりに、迷ひら  
るゝよし、人をして尋ねれ共知れず、おふくろはそなたの事を戀かなしみ、兩眼を啼つぶ  
され徳甫はこがれ死に、去秋相果られたり、誠に金銀藏に満て、世に不足なき身をして、  
何を目あてに、いづくへにげてはゆかれしぞ、たごへ天狗がさそへばとて本心さへ極まれ  
ば、魔道へ引入らるゝ物でなし、さりとはおろかな男、氣をたしかに持替、はやく古郷  
の長崎へかゑらるべし、内儀は貞女の道をまもり、後夫をもとめず、後家をたて、手代  
共を引まし、家相續いたされ、むかしに増る繁昌、隣町に肩をならぶものなし、ひら  
さらかゑりて後家の心もなぐさめ、親のぼだいもとはれかしと、三人詞をそろへて申、扱  
は人たがへにまがふ所なしと、して我等を茂太夫とは、いづくに見知りありてのたまふと  
いへば、おろかな事をいわるゝ、幼少より同町にてそだち、片時もあはぬ目なく、兄弟よ  
りは心やすくせし其方を、見わするべきか、面體物ごし、なり恰好、目の上のほくら迄見

おぼへ居る男共にまだそのつれない事をいふと、すこし腹立めれば、成ほど尤なり、いかに  
も我事茂太夫にまぎれはなけれど、久しく天狗の給仕をして、朝暮鼻の高い衆中に出あひ、  
人間にまじはりうとくなつて、いにしへの事會ておぼへず、おのゝの名さへわするゝほ  
ごの仕合、何ぞぞ天狗道をのがれて、古郷へ歸るやうにいたすべし、其方立先へ着船あら  
ば、母や女共に爰であふたる咄しをして、よろこばし給るべし、此度一所に歸國したきも  
のなれ共、天狗にいとまもこはで參らば、又つかまけんもしれず、先は互にそくさいなる  
對面うれしと、それより酒をくみかはして、つもの物語よいかげんにへんたうつて、日  
も西山にかたぶけば船は八軒やに着三人は伏見町に用有とて、いとまごいして、歸宅の事  
をねん入て申てわかれぬ、彼男ね耳へ茂太夫がはいりし心地して、雁は八百てんは長崎へ  
行て、茂太夫になつて様子を見るべしと幸、長崎へ下る船に便舟して、こはき風にもあはず、  
浪しづかにして、心ざす大湊につきて、何かなしにまづあがつて此地のけしきを見るに實  
の島とは爰の事なるべし、錦の山白糸の瀧、流れ木の伽羅を筏に組、じやかう犬は和朝の  
猫を見へわたり、丁子は葉茶の煮がらのごとく捨ありきて、金銀採取の所、一夜に長者共  
成べきは爰なり、しかも好物の酒事はやりて、たのしみふかき榮花の湊と見めぐり、扱戸  
村やの所を聞て、其町を髪おしみだき、すこしそらはぬ事を申て、大道一ぱいになつてあ



りけば、近所より男女出て是を見、やれ戸村屋の茂太夫殿、氣ちがいになつてもたられた、天狗がつかみしといひしはげに誠なるべしと、人あつまりて此沙汰をいたしければ、戸村や一家はしり出て、よく／＼見る程茂太夫殿にまきれなしと、内儀の満足、手代のよろこび、目の見へぬ母迄おごり出られ、むりに内へ引こみ、もとより人參澤山成所なれば、正氣にならるゝやうにと、かたはしには獨參湯を煎じかゝる、祈禱坊を呼にかけ出す上を下るとかへし、先行水にて身をきよめさせ、古茂太夫の衣裳を出し、いやが上にきせて、王質仙より歸りて、七世の孫にあふ心地して、大方ならずよろこぶ、表へは知音近づきの衆中、茂太夫歸宅の嘉儀を申に參らるゝ、千秋萬歳悦の酒事すんで、二三日も能正氣でない風して、四日めより祈禱のちからにて狗獺の見入退しとよいかげんな事申て、先其夜から、ばへぬと、しらぬ事は是ですまし、まんまと茂太夫になりきり、次第に奢つきて、丸山の色狂ひ心ざし、出入の素人末社つれ、あたまたから油やの太夫山城にかゝつて、とめどもなくかよひ、ある時はせき舟みさは、うきはし、木々野外山くれない、ばつとした太夫共を一所にまねき能をさせてよろこび、さまざまのおごりつりて、壹年もたぬうちに、金藏ひとつからにして、今一つの唐物の藏に、手をかける段になつて、誠の茂太夫金比羅の杉

の茂みよりかへりて、菩薩祭りよりつかまれし段々を申せば、内儀をはじめ手代共肝をつぶし、兩人の茂太夫を兩方へわけて、二人が顔を見るに、さりとてはみじんちがはず、是影の類ひ成べし、いづれにても影の方を見出し、それをうしなへば此類ひを治するといへりと、家内不殘目金をあて、見れど、いづれをあげと申がたし、時に誠の茂太夫いへるは汝き奴なり、おのれ茂太夫に究つたらば、親仁より家財請取、去々年天狗につかまれし前迄の年々の勘定をいたして見よ、我等は帳をひかゆる迄もなく、中だめに年々の勘定高をいふて見すべし、此高知たものはおも手代の徳右衛門ならでなし、是を證據に茂太夫を極むべしといへば、手代の徳右衛門至極いたし、成程此儀然るべしと、似せ茂太夫にそろばんをわたせば、終に秤とそろばん、手にとつた事がないけいせい狂ひするものは、算用知てはあそびに始末出しておかしからず誠は我人間の種にあらずして、又人間にとをからぬ物、けいせいかいといふやくたいなしのかたまりなり、富貴な家の二代目の若代に、そろばん秤むつかしがり、親の異見を、はやがてんする心に入替りて、金銀家藏諸道具迄、物の見事に皆にさする、我通力を見よとて、忽薬人形となつて、焼印の笠をかたふけ、日本の地を



一生よりわき出ると、取揚婆々の申侍りき、此生に取つかれぬ様の大事は、第一家業に情を出し、そろばんにうとからず、秤目せりりて、始末をわきまへ、衣裳好をやめて大酒をせねば、永代けいせい買に取つかるゝ事なく、子々孫々迄繁昌し、永く家傳り、大福長者となる事、うたがひあるべからず目出度〜。

色三味線終

扱申上まする

好色一代曾我 八卷

付 十郎と虎が石よりかたい契約

並 五郎と口舌の泪は少將の夜の雨

右之本來春早々出し申候

御しらせのためこゝにしるす

元祿十四年八月吉日

ふや町通せいくはんじ下ル町 八文字屋八左衛門板

21235

珍書刊行會叢書 第八冊 不許複製

大正五年四月八日印刷 非賣品

大正五年四月十二日發行

編輯發行人 竹内謙六

東京市田區西小川町二丁目六番地

印刷人 森川修一

東京市田區西小川町二丁目六番地

印刷所 大精社

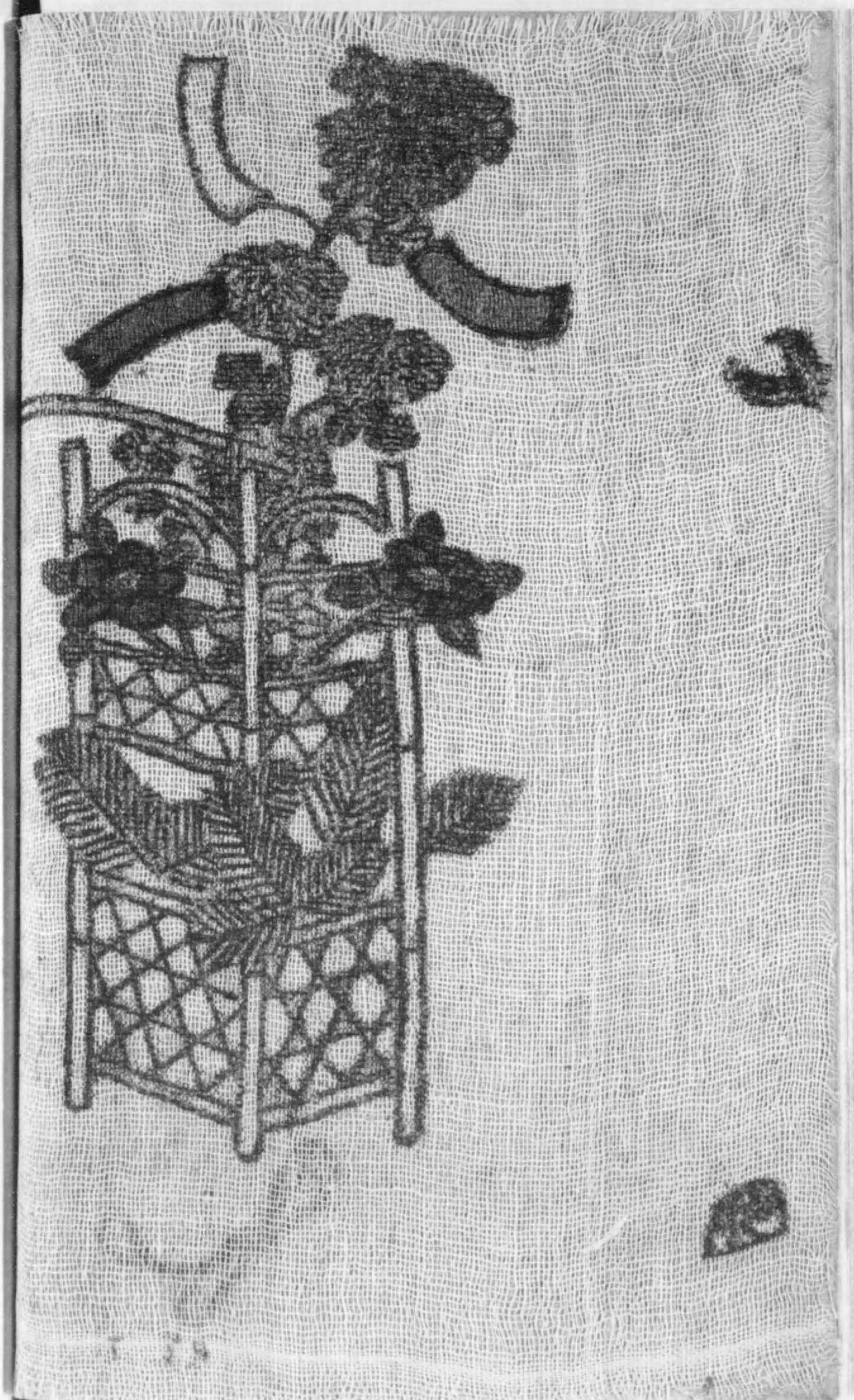
發行所 珍書刊行會

東京市京橋區柳町二番地

電話東京三〇二二番

郵政東京四七八番







終

